とて。人又これを羨ひやまず。年來いと疎遠なりゝる。村長上蠆憑司。こゝを〻一子昌丸郎もろともゝ。詣來て婚姻の賀びを述。ゝをよりとじめゝ異あらぎ。みゝ是尊吉〻誠の致と所。かくあるべき事ゝ〻ら。わきて幸ひを得さりしものゝ遲也なり。原この老女ゝ樽水の農家。苧環某甲〻長女娘なり。女同胞ありけゝ。妹老樹ゝ。二夫の農家。盃屋の善三の妻となりて。善吉を生ぬ。二親孫て。遲也ゝ壻を招て。家を嗣せんとする程ゝ。渠極めさる淫婦なれゝゝ〻夫を追ひ出して。父母の志ざしゝ得稱ゝぎ。二親なくなりて後みづゝら。白丸郎といふ破落戸を引入ゝて良人とし。男兒を擧つゝ。ゝを鵜太郎と名つけさり。かくて女壻白丸郎ゝ。酒と楊洲とゝ身上と打頽し。人もろくて五六年を過す程ゝ。此をとて。有一日多賀の鳥居本へいもきてかへるさ。番場の辻堂ゝて頓死してゝり。されゝ相傳の田園も。年來賭博ゝ失ゝきて。枯野ゝ殘る撫子を。養ふ便着なくありにされど。地方ゝ舊き農家なれゝ。なやゝくてもあるべきゝ。門の松ゝも操を恥ぎ。その年の終ありけん。遲也ゝをさなき子を捨て。渡鳥の保二郎といふ密夫ゝ誘引れ。逐電して往方を知らせぎ。賾ゝ殘るゝ五歳の男兒。うさてやなき鵜太郎ゝ。二夫の姨夫。盃屋の善三ゝ養れ。年才八ゝなりし頃。善三夫婦相謀りて。美濃の赤坂へ遣し。商賈某乙〻小厮とゝしつ。こゝゝゝ五六年を送りゝり。去りるゝ鵜太郎ゝ。父ゝやゝ肖けん。母ゝや肖けん。年才ゝ似げなく奸智ゝ闘て。竊癖さへありしゝゝ。主人もやうやくこれを知覺ていたくいひ懲ふしなどするゝ。もゝ〻うへ去ふれてゝ。末おほつゝなしと思ひゝん。その嘸昏ゝ臂近なる金五六両盗みとりて。往方も去れぎなりしゝゝ。主人ゝまを〳〵怒ゝ堪ず。やゝて二夫へ事の趣きを聞え去ふそれゝ。善三夫婦うち驚き。彼此と索ゝされども。その影をゝゝ去るよしなし。十一の童ゝゝ。あるべきとゝゝとて。姨すらおそれて舌を卷。やうやくゝゝ彼金を。贖ひて主人ゝ勸解。世ゝなきものと思ひ絶て。のち〳〵までゝ索ざりゝり。去程ゝ鵜太郎が母遲也ゝ。襄ゝ保二郎ゝ誘引れ。岐岨路を投て走りつゝ。信濃ゝ近きみのすゝや。落合の驛路ゝ。をとこの由縁あれゝ足を駐め。こゝゝて保二郎と夫婦にありて。女子を生り。これを阿丑と名つけつゝ。いともはゝなき世わたりして。十年ゝまり送る程ゝ。有一年の春保二郎ゝ。時疫ゝて。患と僅に三日ゝして。やゞてむなしくなりしゝゝ。遲也ゝます〳〵困じ果て。妻籠なる客店。森村和五郎が炊妾となりて。親子もろとも。彼處ゝをると四年ゝ及びて和五郎〻妻身まゝり〻り。家ゝゝ僅ゝ五才なる。女兒ひとりあり。現去ものゝ日〻ゝ疎し。和

五郎ハ。鰥すまひの寤寢さみしき隨に。遑也ゐ臥席のわげおろしさして。果さ稚き女兒よも。母ぼ〳〵と呼するよぞ。遑也いこゝよもくりあく。客店の妻よなりて。女兒阿丑も身のそゞひろく。人あゐみ〳〵ある春秋を送りつゝ。又七八年を過す程ゐ。和五郎が活業年ふよ妻へて。よろづのとおもふゐ任せぞ。大きなる家ハあり〳〵よ。住荒していつくろひがたくて。家借る旅客も稀よありつ。かくていゆくするのと。心もとあしとて。遑也ハ今さふよ。いひがひなく思ふものゝふ。女兒阿丑ハとしごろよありて。容止も人あみゐハ勝たり。是を人の側室妾ゐ去さりとも。ゐが身ひとつを老樂ゐ。過さゞいゝで過さゞふん。かゝる處ゐ虛〻をるハ。釜の中よ遊ぶ魚。薪の上ゐ巢をつくる。燕よりあ四愚あり。と思へども氣色よ見せず。密よ阿丑と談合して。誘ふ水もゞあと。思ふ折。京ある坊賈の主管あるもの。年〻ゐ東國へ赴くよ。和五郎が家を定宿とするありけり。かくて此をとこ。阿丑ゐ懇相して。をり〳〵物取せさりゝるが。和五郎が身上衰ろへて。家さへいさく住あらせども。さすがよ見捨がたくてや。此度もまた一夜をこゝゐ明せしゝゞ。遑也ハ怨卒ゐいひよりて。思ふよしを相譚ゐぞ。件のをとこふゝく歡び。去ゝらばゞれ京へ歸りて。窮ゐ人を遣すべきゐ。豫て物よくとゝれへて。おん身も

ろとも走りて來よ。東山のやどりわ。よき家を修理て。親子やすらろよ過させんといいるゝよいと嬉しく。事よく課し合しつゝ。迎の人をまつ程に。果して彼をとこ。消息こまやかよ書きたゝめ。竊わ人を遣しゝり。ろくといきらず和五郎い。去歳よ里疼積よ閉籠られて。世の經營もこゝろよ忘。世帶のと大かたい。女房わのゑ委しゝび。遇也い折こそよりれとて。里がもの良人の物ともいいず。表裝櫃を傾々て。一袂きとし。夥もわふぬ金錢さへ。悉々く腰よ着。病羸ひさる良人を捐。年來毋ぼふとて。われを慕ふ。前妻の女兒を棄。迎のをとこを先へ出してその夜阿丑もろともわ。京を投て走りつゝ。五十里を五日ゞ程よ。也き〳〵て近江なる。草津の驛よ宿とりて。翌い京へ入らんとするその夕。ふさゝひ飛脚いで來さりて。京わるをとこの消息を遞與せしゝど。親子眉根をうちよしつゝ。忙いしくこれを見るよ。件の主管某丙い。年來主の物を掠めさる事發覺て。官けの沙汰とありぬ。ゝくてい豫て契りし事も。今さらに仇よおりてん。好も歹もおのとの。おちもるまでい留りたまへ。と書さりける。遲也も阿丑もこれを見て。おじゝい驚き呆れざるべき。津わ舟を失ふ如く。進退こゝよ究りて。いゝわともすべなきをば。且く草津わ逗留して。かさねて京の音耗をまつ程わ。無悪やな彼白物い。み

づゝふおせる藥ひを。遁るゝに路おゝをゞ。いさく獄舍よ繫れて。やがてひなしくなりけるよし。程經て草津へ聞えしゝゞ。遲也阿丑いますゝ呆て。今さらに妻籠おる。家を戀しく思ども。後悔こゝよさつべうもあらぢ。とせんかくせんと思ふのみ。竊出せし衣裝金錢い。盤纏よ殘なくつかひ果しつ。剩さへ親子時疫よて。旅寐の儘よ枕をおふべ。こゝち死ぬべくおぼへしが。病と冊日あまりよして。辛く玉の緒い繋ぎ留されども。乞食するよりすべもおく。僅わ人わ備をて。畫い苗とり茅萱を刈り。夜い苧を績。綿を繰り。つゝそゞくその艱苦して。やうやく口を餬ひつゝ。一年あまり送りゝり。この時よてそ遲也い。色と欲とよ迷ひてい。筑摩の鍋のかづゝわ。造りし罪をおもひ去る。邪慳の角い折あげふ。牛わ等しき草野稼ぎ。勉よ人なゝよ。ましたる女兒いもちあがら。ゝろき所行のみ誨つゝ。憑む樹蔭ゝおさまでわ。ありも果しい和五郎刀禰の。憎しとおぼす執念が。親子のうへよ因緣て。世よも人わも棄させし歟。二十年あまりふる鄕を。出よしときよ捨し子の。鴉太郎いいゝわおりけん。いと惜しきとしてけり。と此彼こゝわ思ひやるのみ。過ておよゞぬ冬の蜂。老てい身さへ心さへゝとじめよい似ゝ顏折たり。ゝゝりし程わ善吉い。毋ゝ遺言を仇よせじとて。三年以來姨遲也が。所在を

彼此と索つゝ。竟ゐ草津の落野井ゐて。不思議ゐこれと環會阿牛もろとも。二夫の家ゐ伴ひかへりていと。眞實やりゑ發ひつ。元來色ゐ愛るゐゐちねど。亦繩の繋る處。竟ゐ脫れゞたけれゞ。阿牛を妻ゑ去たるなるべし。扨も實母老樹が今般ゐ及びて。さる心ざま正しりゑで子を捨るまでゑ淫奔さる。姉の事をのみ心ひ遣せしい。いりゐぞといふゐ。原彼老樹い。姉遲也とい質りいりて。親を慕ひ夫を思ふ誠心。人なみゐ勝をしりゞ。姉い姉れこゝろもて。妹をば見りへらねど。露ゞかりも恨とせず。姪鶴太郎い總角よりいとおそろ去きものおりしりゞ。彼ゞうへいせんすべおし。姉御前い女流のとおり。一旦の迷ゑて。家を捨子を捨て密夫と走り給ふとも。年長ていおかゝゑ。悔しくぞ思ひ給いん。おん身その面影を認らぜとも。環會よしゐふん日ゑ。よるべなく見へ給い。ともろくもこしふへて。故郷樽水へかへせりし。それも得りないぜゞ汝が家ゑ發ひとりて。一期を過さしまゐふせよ。とりゑきてゑゞ姉い。父の愛女ゑてをいせしりゞ。その悞を改めて。故郷ちりく身をよしつゝ墓所の夏草刈拂ひ。香華を手向給ひおゞ。亡二親の怒も解いと歡しく思ひ給いん。心よりゝるこの事のみ。母をおもいゝ姨のと。外ゐおせそ。といひ遺せし。言の葉を去ゞしも忘ぜ。三年ゞ間心を竭して遂ゑ遲也ゐ環會し。善吉ゞ孝順。只この一事をもて思ひやるべし。されゞ善吉い。年來姨ぞの身を潛めて。在けんりさを問も極めぜ。昔のとい去りさるも。おゐ去らぬおもゝちして。聊もその非をいとぜ。われもし男兒ふたり擧ゞ。二郎ゑい外戚の苧環氏を冒らせて。亡母の志を果さんとのみ思ひ々り。さる程ゐ遲也い。村長上臺馮司ゞ物りさりゐて。往ゑゑゞ子鶴太郎ゞ。主の金を盜て逐電しその。債を姨夫おる。善三ゑ夙しつゝ。今ゐ往方も去れざるよしを。そじめて聞ていさく驚さ。且羞て行ひを改め。善吉を慈愛と。女兒阿丑ゑ異おらねども。さすゞゑ影護けきゞ。信濃おる妻籠の客店。和五郎ゞおさけを受て。遂ゐ彼ゞ繼室とおり。七八年を過す程ゑ。漸その家の衰さるを見て。更ゑ邪念を發しつゝ。病臥さる良人を捨。前妻の女兒を捨て。阿丑もろとも京を投て走さるよしをゞ。善吉ゐざゐ告も去らせぜ。元來二夫と妻籠とい。卅餘里を隔されゞ。去る人絶ておりりけり。さておれまでい。過去かさの物かさりゑして。善吉阿丑ゞよるべところを。再て餅ゑ訛ゐりせり。只いさづちに見すぐさで。よくこの條をくりかへさゞ。後段ゐ趣ゐるを去らん。

○二夫川の中

却説善吉い。聞しよも似ぞ姨遅也ぞの。いと老實あれば。ふうく歡び。ます〳〵生活よ僻るとあく。一年あまり送りつゝ。つく〴〵と思ふやう。わが家と。數世連綿と由緒正しく。祖父のときまでい。村長を奉ぞさまひぬ。と傳聞り。去るゐ父よてをいせしが。いとゞうかりしときぞ家勢衰へ。田園大りさい失ひて。剩從弟上臺氏ゐ。村長を推恵ぞ。今將水も飲ゐへぞ。月祭日祭の圖坐ゐも。豪家の庭子ゐすらおとしめられ。人の爲ゐ屈戌る。これも又世ゐり勢こいうよともすべゐけれど。かくまで先祖を辱ると。いと枋をしく思ふ物うら。年十六の北よりして。曙さゝび家を興さんとて。志をえば。しも移さぞ。三伏の暑さ日も。又玄冬の寒さ夜も。牛馬よ等しく身をゐしつ。八よいまして稼ろよけれど。ゞ母い多病ゐて。六年七年の藥餌三昧。親よい換るものゐし。と物の雜費を厭いねば。瘦田一頃の生ゐも得ゐらず。母公ゐくゐりさまひてい。又姨は前ゞの絆となりて。妻さへゐる身とゐりぬるよ。子ゐど夥舉ゐば。桎梏を被られて。貧乏うへゐ貧くゐらば。何をもて年來の志を果すべき。今より鎌倉へ赴きて。五六年も稼ろゐば。それゆどの事いゐるべし。搖錢樹い彼處よゐり。と孫より聞ものを。手を空くして生涯を。老屈んい愚ゐりと。こゝろひとつゐ思ひ決て。さて事の趣を。姨と妻とゐ告しろ

ば。遅也阿丑いうち撫き。こい思ひもうけぬ事を宜ふものうな。吾儕親子ゞ餓もせぞ。凍もせぞしてけふよゐふい。ふん身ゞこゝよ在せばゐり。ひとつよりていくゆどゐく。五年六年米遠き。留守せよとい心づよし。宜ふ所理ゐりとも。吾儕い女流のとゐるよ。何をよそがゐ口を餬ん。老さる姨が疎しく。言を設て阿丑もろとも。置去よせんとゐらば。ゐろ〳〵よ禁めいせじ。如此ゐふば如此ゐりと。明白ゐぞらしさまへ。ゐらしさまへ。と左右より席薦さゝきて怨ぞをば。善吉ゐゞ〳〵嘆息し。姨いさらこ女房を。置去よせんとゐらば。三年ゞ間苦心して。所在を索まゐらすべき歟。某今さら故郷を去て。遠く鎌倉へ赴くと。身ひとつの利を謀るよゐらぞ。舊の田園と受復して。亡親へ孝養よ。供んと思のみ。ゞ家とじめの如ゐらば。閭宅の福ゐるものを。ゐばしの別をいと惜みて。恨みさまふい僻事ゐふん。某孫より。これらの用意をしていへば。錢五六貫を遺しおくべし。これをもて今玆をば。ともかくも送りさまへ。これのゝならず。明年の春よりして。年々よ給銀の。半を贈り遣ぞべけをば。心やぞく思ひさまへ。よしや鎌倉へ赴くとも。本錢ゐければ。五六年。彼處よて奉公すべし。待としゐれば久しゐゐ似れど。未をたのまば何をうかこたん。これふのよしを聞きて。阿丑もろとも留守し

てさべ。と叮嚀に說諭せど。姨女房にやうやくまで。こゝろを得てうち点頭。うくまで思ひ決めさまいゞ。禁るよしも侍らねど。鎌倉にあまりに遠し。京あらんに折〳〵の。音耗せんも便宜こ。喃阿丑さい思いぞや。現母ぢの宜ふ如く。縣城下いづれいあれど。華洛にまして何ういう侍らん。近江山城い鄰國にて。こゝより京へい廿里に。足らぬ程に侍るある。おなじくい華洛へ赴きたまへうし。こすゝむきゞ善吉頭を左右に掉り。王城の地いめでたきと。まうさんも恐けきど。生活の爲に。却て便宜の地にあらぞ平家西海に沈淪し。承久に三皇。遠き嶋峯へ迂されたまひてより以降。字字の熱鬧い。鎌倉にますものなし。遠きを厭ひて近きをゆくとも。不便の旅い蒙して効なし。姨ぢいさらえ〻ゞ妻も。こゝろを善吉と等しくして。衣食を薄くし費を省ぢ。綿を繰。機を織る。女子の手にてあるべきわどの。生活を去さまいゞ。內外に得つきて。積らゞ塵も山とありあん。妻子の心一致してこそ。ねがふとも成就せめ。村長上臺馮司親子い。且く中絕されども。近ごろい交加て。强顏ももてあさきねゞ。妻子の事をさのみおきつ。臨時の夫役何にまを。彼人に相譚さまいゞ。世の務も後やぞけん。阿丑い母ぢによくつゝへよ。母ぢい阿丑に敎訓して。善吉を笑いしさまふあ。まうさんよしい只これのみと。

いいれてさすゞ女ぞち。母と女兒い面をあいして。思いぞも目を拭ひ。宣ふ處こゝろ得侍り。加田の立械さてつくし。縱飢渴に迫るとも。おん身ゞ歸りさまふ日を佶と俟て家を守り。人に絕てうしろ指を。さゝるべういおもいぬに。これらのことを念とせず。願ふい偏に自を愛し。旅寐〳〵の水ういり。又奉公の苦しきに。寒に傷られ。暑に中られ。病煩ひたまふあよ。といひ諭されつ。いひ諭せど。姨捨山の月あらで。慰うねて。やゞて分つ。袂をこゝに濡らし〻り。さる程に善吉い。俄頃に行裝をとゝのへり。次の日い香華院へ參詣し。父母の墓へ花をりそゑて。啓行の事を告。其かへるさに村長許にとあひて。妻子の事をたのみ聞に。里の戶毎に辭別して。その曉に行季を負ひ。鎌倉を投て起行〻り。されゞ古人の言葉にも。富貴あれ他人聚り。貧賤にい妻子離る。世にたる爲といいひあゞら。飽も飽れもせぬ妹と使ゞの。こゝにゐられて山鳥の。尾上の月と木がくるゝ迄。あれと目送る人もあし。時に建治三年秋九月。十日あまりのことあるに。善吉い只ひとり。里遠離る小篠原。けもく露にものすそ濡らし。家を出しより。第三日といふ嘘昏に。岐祖の妻籠まで來に〻り。那須澤を過てこそ。宿りもとめゞやと思ひて。歩の運びをいそゞせども。秋の日あれゞ短くて。こや足もとより暗くあり

つ。阿計呂の山の山夾より。十三日の月圓を昇りて。去のぶを餘る去の芒。うら枯れそめし虫の聲。聞くふつけ見るふつけ。歌よまぬ身い有ろ〳〵ふ。こゝろ慰よしもなく。おの〻森へと霧ゑ歸る。烏ゑたも後つゝ。暮て宿ふき獨行。心頭りふ忙しく。只管ふ走る程ふ。と見れば右手ある小松の下ゑ。晃〻と光るものあり。立よりざまゑ蹴うへせば。から〳〵と音するを。やりも過さを手ゑ取て。月ふ翳してこれを見れば。玳瑁の櫛のいとふりたるゑて。齒い三ッう四ッ缺さり。道ふ遺たるを拾んい。こゝろ穢き所爲ある。このをとりなる山妻等が。拂ふるすべき物ゑいあらを。これも又世の貨ある。野駒の蹄ふ踏碎かせんい。可惜しさとゑてそ。と思へばさすが見捨うさくて。懷ゑ挾つゝ。又二三町ゆく程ゑ。一里塚のをとりより。喃〻旅客これより。前い人煙なし。暮果て傳るのを。何處までゆきたもふう。宿し傳らん。と呼びうけて。遽しく走り來つ。背後よと引く袂を。ふりも拂いず見かへれば。年十三四ある少女こいめづらうある宿引よふ。さのみい急ぐ旅にあふねど。ゆくものゝ慣あれば。慾に路を貪り。宿とりおくれていと便あし。おん身が宿所いづれの程ぞ。飯あたゝうにして食し。虱あき蒲團を貸すや。おはつうなし。と回答つゝうち笑へば。打笑ひ。そい宣ふまでも侍らず席薦

い近ころ表をうえたる。席鋪いく間も侍るうし。こあさへ。と誘引れ。いあにいあふぬ稻家を。うち繞りつゝ舊の路へ。三町あまり立歸れば。山を背ふせし家の。間口六七間もあるらんと おぼしさが。柱斜ゑ簷傾き。瓦落て草を生じ。戸いゆがゑて顧にい開を。こゝにて侍る。といひうけて。裡面に入る少女に引れて。あがり檔ふ。まづ尻いうゝたれども。あまりふ物の凄しくて。前後のみ見らるれど。さすがに出てゆかんともいひうさくて。草鞋の紐を解間に。少女そ盥ゑ溫湯うと。思ふをかりなるを汲もて來て。善吉に足を洗し。行燈引提て先にたち東面ある坐敷に誘引。脂と埃に塗れたる。木枕をとう出つゝ。さそふ疲勞給いんに。帶推ゆるめて横轉たまへ。といひうけて遽しく庖厨のうさへ走り入り。半晌ばうり出も來を。善吉い頭を回らし。家の四下を熟視るに。塵落て骨をあらいし。壁ちぎれて皮をとゝめを。紙窓を拂ふ風に。破れすゝびたる紙。内へ入り又外面へ閃き出てさあがら人を招くが如く。網代天井い半頃れて。うき缶をし蜘蛛の細。大うさ煤ゑとぢられて。海松うけをさす磯屋ふ似さり。うくまで荒さる宿ふれど。主人い地方ふ苗緒あるものゝ。過世わろくて凋落さるゑや。家の造りざま凡庸ふらを。されど彼少女が外ふ人氣ふきい。山賊ふんどの隱宅歟。さらをい惡鬼の住家う。

と疑ひ惑へゞ忽地よ。項さゝ〳〵と寒くあり。立てゝ見。又居て見ても心とにゝく安からぎ。活路を見ておかゞやとて。竊よ戸尻へ手をゝけて。開とするよ雨戸走らぎ。切を究めて推ゆどよ。戸ゝ外面へ撲地と倒を。ゝゞ見もともゆのぼし掛りて。うつ俯よ輾びけり。この物音や聞えけん。庖厨のかたより少女が聲して。旅客淨手よもゝんとあらゞ。こゝろして出たまへ。左手のゝたゝ竹綠ゞ。いたく朽て侍るよといふ。あゆ便あしと思ふよぞ。やうやくよ身を起し。摺り傷りたる膝頭と。肘のかゝみへ唾を塗りて。やをら戸を引起せども。さらぬゞよ破れたるうへよ。今亦いさく踏折し戸ゞ。いゝりて舊の如くゆたつべれ。ゝれあゞら鈍ましくて。そと倚けて醒んとすれゞ。生憎よ颯とおろす。山風よあふられて。戸ゝ又庭へ撲地と倒を。行燈さへようち滅さり。去れどもさし入るゝ。月の光ゝ幽ある。燈火ゆましていと明し。こゝゆ又つく〳〵と外面をあゞむれゞ。柿もみぢかつちる隨ゆ秋寂て。かきも拂ゝぬ庭あゞふ。石の置ざま樹立まで。たゝあらぎ見もるゞゆ哀れあるよ。蒸襖のああたよ。いたく咳く人ありていと。苦しげよ呻く聲す。原來ゝ患人あるゆこそ。とひとりごちつゝ足を翹。引手落たる蒸襖の。窠より彼所を闕窺ゞ。齡五十あまりあるをとこ。いたく病瘦て。ふりたる衾よ身を倚うけたる。顏色の青やうある。唇の黑やうある。白髮まゞりの鬚生て。長き瓜ゝ衾みつゝ。項のやとり紫ゞちて。些赤く見ゆるゝ枕よ摺たる痕あるべし。折〳〵痰を吐として。唾壺をゝゝ探る腕細りて。この世の人とゝおもわれぎ。瘦燈心のいと暗く。あるゆひあき燈火と。いづれゝ先ゆ滅やせん。脆きゝ人の命ゆて。亦是人のうへあふず。と嘆息して密やかよ。舊の處へ坐を占め。彼ゝ正しく生人あるべし。かゝをゞてゝゝ山賊の。隱宅にゝあらざめり。と思かへして腰ゆ著さる。燧袋の口をとき。こなさの行燈へ火をうつせゞ。折ころよゝを庖厨のうゝより。少女ゝ飯をもて來つゝ善吉ゞやとりにさしおれ。物やしくをゝしゝん。ひとりゞ手して炊き侍れゞ。急ぐとすれど時もうつりぬ。あさゝゝよたうべ給ひて。とや寐まりたまへといふ。物のいひざま愛敬づきて。進止さへ怜悧見へたり。善吉ゝ今さらに。外のあれよ胸ふたかりつ。はつゝよして箸をおき。さて少女にいふやう。見れゞ悲しくあるゆころ。かく廣やうある家に。使るゝ小厮もあく。只二人住さまうや。昔の餘波推量をゞ。痛しく思ふゝし。患人ゝおん身が爹〻歟母は前ゝをゝさずや。おん身ゝ何と呼れたまふ。今宵限の宿あゞふ。主人の名さへ聞まゆし。と問れて忽地酸鼻聞も傳へ見も去つる。昔を今に繰ゝへす。賤婦の孚

環まいりかねし。家の鄰を匿あへぎ。馴〳〵しげゐ告まうさんい。恥かゝぎろしき所行あゞら。
嚮よわらいよ詭欺ふれ。ろゝる處よ宿りをし。と腹立しくおぼさんよ。其を憎しとて各たま
わず。誠ある言の葉よ。まつおく袖の露とのみ。かこたるゝ我うへを。明白ゐい恥しく。恨し
く又悲しく侍れど。問せたまふゐ應ずい。ゐ怪れ侍りてん。猜したまふとく。彼處に臥した
るい父ゐ侍りこの驛路よい多くもあらぬ。客店ゐ侍れどもわらいゞいとけおろりしころ。母
い長き病著ゐて。これより家の鄰とおり。さま〳〵ゐ心を竭せし鍼灸藥餌も效おく。黄泉の
客とおりたまひぬ。此ころよりして活業衰へ。今茲い去歳の戀しきまでゐ。おりもくざれば
下男下女。大うたい身の暇をとらし。とが中ゐ眞實おる。專をあげて後妻としをふいを孚せ
とや年來を經よけれど。衰もく活業いゐ年ふよおとろへて。ろろきときゐいわろきとの
み。うちも累るものえうし。四年前おる八月の下旬より。假染ようち臥しさる。父の病著おこ
さり果ぎ。人のこゝろよ秋風の。たつとしおれゞ枯をてもく。穂屋の芒も招よかひおき。繼母、
の鬼ふしくて。七八年淺ゞふぎ。家政うち任したる。夫の病著を見とふんともせぎ。あるべき
ものを搖擺ひ。一夕潛やうよ。背門より走り出しより。三年のけふまで往方去をぎ。母ゐい實

の女兒あり。其を囮ゐして老樂よ。わゞ世經んとて逐電せし歟。恩を仇おる狗自物。彼憎むべ
し腹さゝし。と臥つゝ罵る父の怒を。寛んよしも泣ゞり。をゞ身ひとつの形おさ昔庇を裏
さるものも。見おとしてよりつうぎ。身よちうき親族おけをゞ。何うさらいんも病む親と。年
ゐも足ふぬをふいのみ。曛昏毎よ招けども。見うへりもせぬ旅客ゞ久米路の橋い渡をゞも渡
り難さる世よ捨られし。親子ゞうへいよるべおき。去〳〵年の山洪水よ。母屋の腰を洗をて。荒
さるうへよ荒さる宿い。客店の名のみゐして。宿うる人い絶て侍ぎ。せんをべおさよ驛稍蟲
所へ。立出て行人の。袖を引つゝいひこしらへ。稀よ誘引ふ房錢よ。親の命を繁ぐのみ。藥價
い絶果て。佛の利益神の加護。あさおゆふおよ祈をども。罪いと深き虚盲い。身の爲ゐせぬ活
計を。明白よ告侍り。許しさまへ。と面おげゐ。陝き袂を押當て。拭ふ涙のむふ雨いあとより
晴るゝよしもおし。善吉い緣由を。つく〳〵と聞て嘆息し。世間よ幸おきもの。ろをひとりゐ
いゐふざりゝり。肩縫釋ぬ少女子ゞ孝行等間おらねゞこそ。四年ゐ及ぶ篆〳〵の火病。ゝふま
でとりもとゞめされ。かくまで誠ある人を。皇天いうでう憐ざらん。今こそあれ久後い。必榮
さまひおん。おん身ゞこゝろ慰ひ爲ゐ。一對の物ゞさりあり。ろれい近江おる。二夫川のゐと

りゐて。善吉と呼るゝものゝ。祖父のときまで。ゝ有得の農家ありしと聞けども父のときより衰微して。ゐが二親ゝ世をゝやうし。助る親族ざよゐけをゞ。今でゝ氷も飲あへぢ。親ゐき後の孝行ゝ。家と興をよゝくとゐふじ。と志を激せども。獲ゞさきものゝ世の貨。故郷ありとも村落ゐて。事成べうもゐふざれゞ。鎌倉へ赴きて。五六年も稼了よゐゞ。不意禍よ。ゐふよしのゐふんゥとて。嫉女房を家よ留め。由縁もゐふぢ見も去ふぬ。東の盡處へ投てゥゝ。旅の衣の妻籠よ。袖ふりゐゝを一樹の蔭。葉末の車身ゐうけて。憂事のゥぢ〳〵を。迭よ語をゞ相似さる。容もあるじも薄命。さゝれゐん身よ比をゞ。ゐれ幸ゐ男子と生をて。進退も又自在ゝ。寔よゐん身ゞ心ゐそさを。推量をゞいと痛し。ゐれもし富るものゐりせゞ。よしや路費の半をゐけても。その孝行を賞ゝべきゐ。途遙ゐる旅棄する。懷よ物輕けをゞ。思ふのみゐて意よ任せぢ。何をゞゐ。と小顆を傾々。ひとり点頭懷中より。嚮ゐ捨し玳瑁の。ふりさる櫛をとり出し。させる物ゐゝゐふねども。賣ふゞ些の錢ゐゐるべし。これをもて篆ゝの口腹よ。稱んものを進ふしね。といひつゝ件の櫛を遞與せゞ。少女ゝやをら掌よ受て。行燈よさしよして。と見かう見てうち驚さ。奇しやゐをゝ。嚮よゐらゝゞ途ゐ道せし。母の紀念の櫛よ侍り物大う

さゝ賣竭し侍しゞ。こゝ亡母の紀念ゐり。せめてゝ産育の恩德を。生涯頭ゐ載ん。と思ふて小雲時も身をゝゐさぢ。去るゐ嚮ゐ驛盡處より。ゐん身を誘引立うへり。ゥくりゐく。頭を探るゐ櫛ゝゐし。こゝ何地よて遣しけん。走り去て索んものを。と心頻ゐ焦燥どもゐ旅客よ宿し侍をゞ。それも頓ゐゝ事稱ゝぢ。天明ゞ人よとられゐん。鈍ましきと去てけり。と百遍悔。千遍悔のみ。今將心よ係りしよ。こゝ何處にて拾ひさまひし。願ふ所ゝ賜ゐり。と數回うちいたゝき歎び氣色よ見れたり。善吉聞て小膝を拍。されゞころわを嚮ゐ。箇樣箇樣ゐる小松の下よ。この櫛のゐるを見て。道路よ遣さるを拾んゝ。心穢き所行ゐがら。このゐとりゐる山妻等が。插ふるゝべきものゐらず。と思へゞ流石よ見捨ゞさくて。懷よ挾つゝ。こゝへ來て今昔の愛物ゞさりを聞くゐ紛をて。その事をゝや忘をしゞ。ゐん身ゞ至孝を感佩し。物もがゐとて懷より。探出して去の櫛の。主とも去らで返せしゝ。亦是ゐん身ゞ亡母ゐを。小雲時も忘をぬ孝心を。皇天ゐれと窮して。ゐれをもて返さしさまふ歟これも。又奇ゐり妙ゐり被を見。これを思ふよも。實よゐん身ゝ世間よ。有がさうるべき孝女ゐれ。ゐれ鎌倉より歸りのぼらゞ。再會ふ日のありもやせん。名と聞ざらんゝ遺憾し。何とう呼れさまふらん。と問れてやをら

額を拊。實い六といひ侍れど。後の母ゐ携子あり。其を姉とし侍りしゑゞ。常ゐい乙女と呼れ侍。といへゞ善吉拳と捺り。かへす〳〵も。憎むべきい。被櫪母親子あり。生さぬ女兒の孝行ゐ。自をも羞ぢて物推奪ひ。一旦身をゞ躲すとも。かくまで嗚呼のものあれゞ。ゆく末いうで榮ふべきぢ。もし天雷ゐ擊れぢゞ。猛獸ゐ啖れあん。それゞ終りを見る日もあらゞ。快事あらめといふ。善ょ與する壯夫ゞ。嫉女房のうへといきをふで。肩張らしつゝ罵れゞ。阿六い頻ょ嗟嘆しつ。さおもいるべきすぢあゞら。父ゐい不義の妻あれぢ。まふいゞ爲ゐい稚きより。孚きさる恩深ゝり。心つよく出たまひしを。恨しとい思へぢも。憎しとい思ひ侍らぢ。とゐもかくゐも過世より。罪障重きまらいがうへを。ひとりをづゝふ唧つのみ。假ゐも母と憑し人の。善惡咎んと物体ゐし。人ゐおきらしたまひそ。と信だちていへゞ善吉い。感涙坐ゐ禁あへぢ。是彼の物かさりゐ。夜も長月の影深て。寢よとの鐘ゞ音をある。折しもあれ。あるじ和五郎。でゐ〳〵と咳きつゝ。乙ょ呵六よ。と呼ぶ聲の。いと苦しげゐ聞ゆぢゞ。少女いおきょ驚され遽しく身を起しつゝ走去。且して。溝く垢染さる蒲團もて來て。善吉ゞ臥房を作ぢ。その身い父の枕方ゐ臥しされども。いく度ゝ起て介抱ぢ。さる程ゐ善吉い。少女ゞ心操を嘆賞し。且親子ゞ薄命をあいれとおもふょ。この秋より只これゞ爲ょ。悲みを添るに似たり。更闌るまゝ夜床さむけく。あるじがをり〳〵。呻く聲さへ耳ょつきて。通宵いもねられぢ。朝ざちの飯炊せんも。心おき所行あれゞ。まゞ天い明とおれねど。少女を呼覺し。路次をいそぐと僞りて。飯をゞ食ぢ。定めさる旅籠の外ゐ。錢二緡をとらせんとするゐ。お六と固辭て絶て受ず。せんぢべおさゐ件の錢を。竊ゐ臥簟の下ょ推入れて遺しとゞめ。辞別してさていふやう。願くい今おん身ゞ志を移す事おく。只いつまでも叮嚀ゐ爹〳〵を看病給へゝし。春方向て温暖あふゞ。おこさりたまふともあるべし。緣しあらゞ亦もあひおん。恙あくをいせよ。と信やゝゐ慰めつゝ。草鞋穿しめ笠ゝいとりて。外面へさちいづれゞ。お六と早飯もすゝめぢして。かく忙しくたゝそるを。勸解つゝも指燭して。端ちうく目送ぬ。畢竟この孝子孝女再會の時ありやおしや。そい次の卷ゐ。解つゝるを見て去ふん。

青砥藤綱摸稜案後集卷之上終

○二夫川の下本

大山ゐ貨あり。人をおこれお獲まく欲す。去られども獲るとかさし。貨ゐこゝろあきものゝ。さま〳〵これを獲るとあり。と柱下のいゝゝん故あるゐ。さても蚕屋善吉ゝ。九月下旬ゐ鎌倉へ來着し。とじめて七郷の光景を觀るゐこゝの熱鬧場閙しにまして。家として富ざるおく。物としてあらざるおし。窟ゑ倚て掌を拍ゞ。鈎お用ひゞして鮮魚おも釣べく。櫻ゐ登て酒を呼べゞ。いまゞ錢を投ざるゐ。忽然と去て美女侍る。この故ゑ。少壯して錢あるものゝ。その錢を失ひ易く。微賤して錢おれものも。富をおゝと難らず。東家の子。家を興せゞ。西家の子。産を破る。田鼠の鶉と爲り。腐草の螢とおるゝ物ゝ。去年の新店空舗と變じ前月れ酒店餅師とゝゝる。況て秋の塵朶賣る。春見し顔の花賣多く。夏の巷の冷氷賣る。冬の門邊ゐ炭ゝと呼ぶ。變化交疆なし。かゝる都會ゐこゝろしく。稼了ゞ物のぬしともおりおん。去りとも不知案内の田舍見ゞ。本錢おれゑ何をゝ賣るべれ。主とりそるゑますとあらじ。と豫て思念を決めゐけれど。鎌倉樣を去らざるものゝ。武家の奴隷ゐ參りゞさし。又もさゝおる坊賈ゝ。雛養とゝ唱て。稚れより使ふゑあらねゞ。小圃ゑおゝと稀おれゞ。善吉ゝ十日あまり。虔婆ゐ導れ。彼此へ參るといへども。凡庸の主おるもの。孰うさじめより。人を識るべき。賢を擇むゐ意おけれゞ。或る男態の好歹を論じ。或る言語の訛さるを嫌ひて。事終ゑとゝのゝぜ。只いさづらゑ數十軒。執謁といふとに。日を費せしゝゞ。路費既ゐ竭んくす。かくてゐこゝゑ一年も。足を駐んとかなふべゝらぜ。もし宿願を果さぜして。手を空しく故郷へ歸ふゞ。何をもて姨女房の。面をふさゝゝび見るよしあらん。と百遍千遍思へども。おもひゝねつゝ五六七日。又いさづふゑ過程ゑ。化粧坂おる遊女の長。風流數澤屋と呼るゝ大樓ゐ。米春をとこを欲とて。俄頃ゑその人を求るよしを告るものゝゝり。善吉ゝかくまでゐ。困じさる折おれゞ。主を擇ゑいとまおく。そをこそ究竟のとおれ。と歡びて。媒妁をこしらへつゝ。件の長ゞ家ゑいくに。緣こそゝりけめ。立地ゑ事成て。形の如く。券書ゑ保人をとり定め。次の日より使れて。毎日ゑ米を舂をもて身の勤とす。當時大磯化粧坂ゑ。二箇所の妓院あり右大將頼朝郷のとき。田代冠者をもて。傾城局の別當ゐ補しさまひしより。全盛今ゑ比おし。そゞ中ゑ。大磯の舞鶴。化粧坂の風流數澤屋ゝ。第一番の青樓おれゞ。名妓こゝゑ敵するおく。嫖客去ゞしも絶るとおし。去られども善吉ゝ。鄭聲艶曲の奏をも見かへらぜ。洞房花燭の樂をも羨ず。旦よ

り暮るゝまで。只管に米を舂わ。一粒も化ませぢ。そのあす所老實あれば。おもゝぢ主人に益多うり。是よりして善吉ハ。年々の給銀を。過半近江へ贈りつゝ。嫉女房の衣食わ充。その餘れるを〻主人に領て。節儉をさ〳〵人わ勝れ。遊里の小厮わ似りしゝ〻。嗚呼あるものもありけりとて。人僉わざゝ笑ぬハあし。こゝのあるじハ白眉の長と呼れて。いとも墓あき生活いすれども。特わ富るものなれ〻。米舂夫あんぢを。常わ見るともせざりしゞ。側のもれども動すれ〻。彼善吉ゞ陰言いふを聞て。のくく〳〵とおもへ〻。こゝろ得うさきと多うり。這奴ゞ給銀大うさハ。故郷へ贈ㄡ遣すとういふある。然るをそれ餘れるざに。おほれれわ預て。一錢も用ふとをせぢ。口をバるれわ餬ふとも。衣裳何くれとあく。些の物の減ざふんや。顧ふわ這奴ハ。年才わ似げあれ老田猫に。表皮バうり老實あるおもゝちし。米を盗むわやあふんぢふん。試して虚實を知るわハしうじ。と肚裏わて思念しつ。有一日一個の蓑娘に分付て舂屋の裡面を張し。善吉が晝餉さうべわとてもきさる間。彼が舂米の中へ。星金一顆を入さしたり。とも去ふぢして善吉ハ。その米を舂とハり。千斛透わかくるとき。ゆくりあく糠わ雜ㄡて。金一星わふハを出たり。あるべき事とも覺ねバ。且驚き且怪み。躊て母屋へもてもきて。如此

〻このよしを告。金を主人へ返せしかば。白眉の長この爲体わ感佩して。日來の疑心一時に散。ろくも人を謀りわけりとて。今さら悔しく思へども。明白わいひがさくて。金をバ得とらぢうちわう笑み。現も汝ハ思ふわまして。正直あるものゝうし。米ハ勿論ㄡが米あれども。金ハㄡが金にわらぢ。天より汝に賜ふわこそ。とくもてゆきね。といひ諭せバ。善吉聞て頭を掉り。この金のとゑらせたまハぬに干てハ。僕これを取るべき理あし。つら〳〵身のわと〳〵を。慮りハに。僕こゝわ參りて下。いまざいくバくの年を積ぢ主の爲に身を殺す。忠義を竭すよしもあきに。天何等の德を賞て。この金を賜ふべき。米の中わ金あるよしを。去らせたまハぬものあらバ。必外わ主ありあん。さき〳〵を糺したまへうし。被米を賣たるハ。何處の商賈わハやらん。とじめ米を出したる田舍までも。使うけさまハりて。いもきハぢやといふに。長ハ感涙を禁あへず。かくまで眞實あるものとハ去らで。側のものどもの譏を實とし。漫わ疑ひおもふのあまり。蓑娘してこの金を。米の中へ入さしたりとて。緣由を說去らしさていふやう。凡色里わ生活するもの。及これゞ奴僕とあるものハ。浮渺わして理義を去らず辨佞ふして實情少なし。仁義禮智。忠信孝悌の八の行ひを亡ふわふざれバ。こゝわて富を

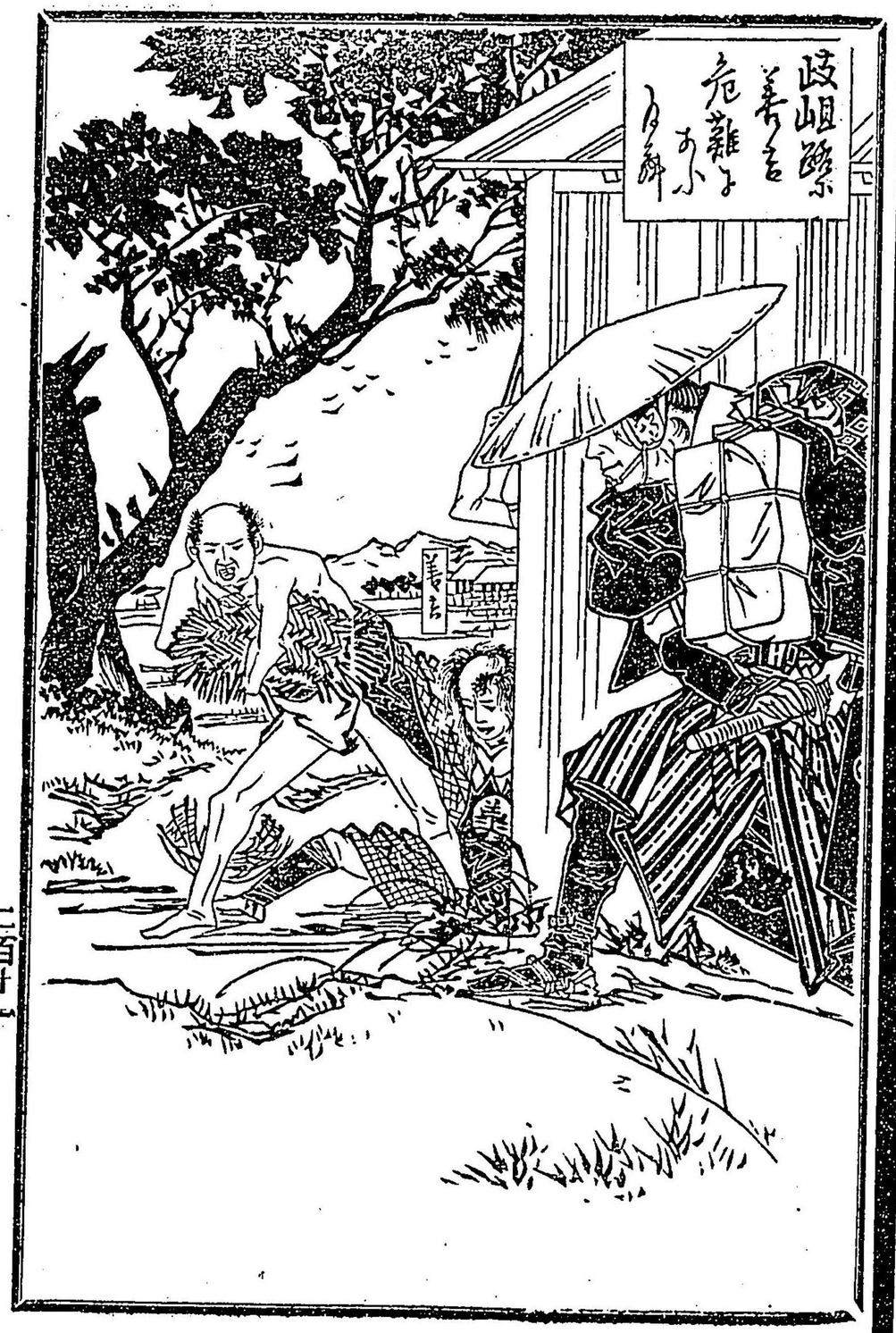
あに〻至ふぞ。されも又懇ゐ。これらのよしを云るをもて。よれ業とい思いねど。親より受さる活業あれば。さるき事とて得も已ぞ。家を抱きて臭きを忘を。漫〻和主を疑ひしい。恥るゐもあ㊐あまりあり。你ゞいと正しき心うら。いぶせくもあらん云ういあれど。郷ゐ入ていい郷〻〻従ふ。何事も過世より。脱得ぬ道あれ〻こそ。一季半季の主従も。主従の名い削らぞ。われ思ふよしあれば。年をかさねてよくつうへよ。これい和主よとらするぞとて。件の金を與へしゝば。善吉い縁由を。聞ていさすゞゐ固辞がさくて。おそる〻受納め。かゞりの事ゐよりて。おん疑ひの散さるい。自の幸ひとのみ思ひいよ。金さへ〻よさまいるい。當りかさきとゐこそ。さまいる所の給銀を。衣類の料〻せぞといへども。さじめより聽されて。空俵い悉々く。所得ゐせよとて賜ふをもて。これをあつめて售ときい。月ゐ四五百の銭い獲易し。かゝれば別ゐ何をう求ん。僕れ宿願あるをもて。妻子を故里ゐ留つゝ。こゝゐ參りて使いるゝい。箇様くゝの情由〻とて。さじめ尾を物ゞさり。さて毎月ゐ。售ところの俵の價を。反古の裏へ書つけさるを。どう出つゝ見せしゝば。白眉の長。まに〻〻甘心し。こをよりよろづよこゝろして。善吉ゞ春米の。多少を窺〻計ふるゐ。春滅といふもの少く。鼠ゐ食をさりといふ事もあし。去

年の春まで米を春せし。某甲をとこゐ比ぶをゞ。損益少〻の事にわらぞ。允ゐ彼い主の爲〻。よろしきものゐをゞとて。俄頃〻引ゐげて。庖厨を働うするゐ。酒食の數をさじめゐまして。客ゐい多く勸をども。心を用ひて費を省けゞ。物として捐るとゐく。客と遊女等ゞ歡ぶのみあらず。主人の爲〻益多けれゞ。白眉の長ふろく嘆賞し。次の春より樓上のことを主どらせしゝば。善吉ゞ所得。まに〻〻多くありゐけれど。漫〻さじめの志ざしを移して。賤娼妓のひとつ買するとも。おく。いよ〻〻儉約を旨とする物うら。おのゞ心をもて人と推さぞ。遊女等ゞ失ちあるを見るときい。去のゞ〻〻ゐこをを諫めて。花車子女ざも聞そるとゐく。又としゐうき嫖客ゞ。溺れて歸るを忘るゝときい。事〻托して久しく留めぞ。彼とゐく此とゐく。誠をもて進止ひしゝゞ遊女等も善吉を。いと憑しきものゐ思ひて。よろしき客ゐいより〻〻薦めて。物とらするも多ゝりゝる。この金をも善吉い。悉々く皆長〻預て。一点ぞうりも匿すことをせぞ。かくてその年の終ゐ。雪ふりていと寒き夜。空蟬といふ遊女ゞ客い。二階堂家の若黨ゐ。井驢元二と呼るゝもの〻。さじめての見參あれど。寃家ゐ熟さるおもゝちして。酒を飲てと大蛇のごとく。物を啖ふと胡孫〻似て。みづうら歌ひみづうら舞。いたく醉て臥房ゐ入りぬ。

空蟬いとしめより。彼がおめげあるを憎しと思へば。醉臥を見て竊ゐ歡び。嬾て臥房を脱出く。時たゝび寄もつゞりゝり。さる程ゐ更闌て。丑三ゐやとおぼしき比。元二ゐ酒の醉醒て。蛇の如く長くあり。龜のごとく見かへるゐ。されのみ裳脱の殿よ寐さして。空蟬の君ゐをらせ。忘れて枕方よ置たりゝる。鼻紙の袋ゐゐ。金五両納てあり。いと心もとあくて。遽ゐしく身を起し。搔とりつゝ内を見るゐ。紙のみありて金ゐあし。さらぬゞゐ腹たゝしきよ。金さへ盜れたりと思ふゐ。去ばしも得堪ぜ聲とふり立。この樓上よゐ偷兒あり。わゞ物さやく返さぜゐ。目よもの見せんと。脛を鼓さて。いと嚴ましく叫しゝば。空蟬これゐ驚りされく。忙しく走り來つと。見をば元二ゞ居長高く。眼を瞬り髯を張り。勢ひ烈火のごとくあるに。おそれて近くゐ寄も得りぜ。身を轉へして走り去。善吉ゐかくと告るゐ。折もよく彼をとこ。不寐番してありしゝば。緑由をさや聞て。聯ぎさる氣色もあく。空蟬ゞ臥房よ來て。ひとり罵る元二を寛め。ふさゝひ緑由を問よ。元二ゐ敵手ほしき折あり。今善吉ゞ勸解を見て。勢ひさじめよ十倍し。金を盜れさるよしと。くり返しつゝ訴ぎらし。世ゐ枕さゞしとゝいふ賊ある事ゐ。豫より聞つ。されを熟く醉臥さし。何處へゝ脱出けん。疑ひゐ彼遊女よあり。もし捷ゐゐ。

よゞ金を返さずゐ。こゝの屋蓋よ茅萱を生して。秋ゐ虫の音を聞ゝんも。いと易きとゝゝし。覺期せよといきまゝば。善吉聞て小膝をすゝめ。さればとよ。いたく醉臥たまひしゝば。去ゝおぼし召ともありあん。失ひさまひし金の數ゐ。いゝばかりゐゐと問せもあへぜ。眼を瞪し。金ゐ正しく五兩ゑ。ふとおゝ紙よ推包みて。この鼻紙の袋よ納れ。枕方に置たるよ。金のみなきゐいゝよぞや。されゐ只。一年の在鎌倉あれば。女子ゐとを缺ばこそ。殿より賜る俸錄を。かしてくも夜錢を撒して。一夜妻を求るあれ。よしや醉て熟睡すとも。その遊女として束の間も。臥房を離るべきゐあらぜ。汝よいゐんゐ無益ゑ。速かゐ長を出せ。長を出せ。といそがせば。善吉かやゝとうち笑ひ。その金の事あふば。心を勞しさまふゐ及ばぜ。僕れ蹇よ盃盤をとり收んとおつる折。この屏風の外面ゐ。紙ゐ捻をて捻さるものあり。かゝとりて開き見るゐ金あり。こゐ刀稱ゞ醉ゐ紛れて遺したまひし物あらん。と思へばさにゞようちもおゝをぜ。いく度ゐ呼び覺せども醉たる人の癖なれば。應ざゐ去さまいぜ。醒たまふを待て返すとも。遲さゐあらじ。とそゞまゝゐ。僕れこれを預ぬ。常よ百金二百金。齎しさまふ刀稱ゐあれども。故ゐく失ひさまふとを聞。ぜ妓院ゐ特よ門戸固きよ。さる不正事あるべしやゐ。物よゐ

思ひ懐と多うり。まづ僕を竊ゐ召して。如此〳〵と告さまいで。小夜深さるよ心おく。人の睡を覺すまでゐ。罵りたまふゝ傍ら痛し。鎖りてをゝせよ。彼金もて來て進ふせんよ。といひうけて。遽しく退出よけきゞ。井輕元二ゝ思ひの外ゐ。善吉よ窘らを。直と呆きていふよしもおく。枕の塵を捻りてをり。さる程よ善吉ゝ。ふさ〳〵び元二ゞ臥房へ來て。彼ゞいひつる數のごとく。圓金五両を遞與よけきゞ元二ゝ俄項ゐ笑うたまけて。件の金を受納め。やよ某の男。いふべき程のとおらぬよ。甲夜の酒ゞ醒ぎして。麝さへ不覺ゐ高うおりしを。金の事とのゝおおもひそ。彼君が强面て。ひとり寐さしたる腹さ〳〵しさよ。と頭を搔つ〳〵いふよ。空蟬ゝ今更ゐ影獲て。なほ外面ゐ立在を。善吉ゝ見かへりて。衝と立おゞら傍よ招き。今宵の事みおおん身ゞ。心ひとつよりとおぼさぎや。彼金もし失さらんよゝ。いとむづかしかるべきよ。勉といふと忘をさまふおと。眞實やうゐいひ諭せゞ。空蟬ゝ身の怠ゐ。いひとくべき言葉もおく。術よくもおさまりし。今宵の首尾をよろこび聞え。やをら屏風を推ひふきつ〳〵臥房ゐ入り。えじめよゝ似ぎうち解て。他事おゐさまゐもておせゞ元二ゝ鹿を追ふ山ゐ。駿馬を獲し心持しつ。甲夜ゐゝひとり待ゝびて。うちぞ對ひし行燈の。丁子頭もこの爲よ。結びゐけりと思ひ



やる。夢の往方に娯しくも。雲とあり又雨とある。雪の夜ならむ窟の隙。あくるともあく曉方の。つれなき鐘に驚かさを。起るられんとする程ふ。今朝に殊更ふ寒けをべとて。空蟬に枕方ある盃をかんとりて。一度すぐしたまへといふ。銚子ふ酒にありながら。いたく冷さるをいかふせん。これ煖むるべうりなる。埋火にあゆありもやする。といふふ元二に臂近ある。醜女火鉢を引よしつゝ。箸を取りて二ッ三ッ。滅殘る火を搔起せべ。忽地紙焦臭くありて。弗々と煙ぐつを。何ぞとて夾を出し。押もみあげらおれを見をば金あり。紙二隔ふ包たる。その數ならも五両あり。元二にこれをと見から見て。呆るゝと半晌べかり。ならべ〳〵頭を搔あげら。空蟬を見かへりて。これ見さまへ七遍索て後ふこそ。人を疑へといふ世の常言を。今更思ひあにしされ。正ふこれこの金ぞ。ヨダ失ひしものあるべし。つら〳〵事を案ぜるふ。甲夜ふいさく醉ふ紛をて。獨酌む酒を走らし。紙入の袋をべ。絞るべうりに濡しさり。されども生醉本性錯にぜ。彼紙入を乾んとて。火鉢の上ふ翳を隨ふ。裡ある金を灰の中へ。辷ふしさるを一点ならで。人を疑ひ剩さへ。彼をとこを虐げさり。こに人をろき所行ならてけり。と只管ふ慚愧して。忙しく善吉を召ていふやう。襄ふいいたく醉さる故ふ。紙入の中ある金を。火鉢の灰へ埋しさりとも。ならぜして罵りしに。われあゆら鈍ましくて。今亦いにんに面ぶせあれど。いにで已べき事ふあらぜ。さるふても和主ごの扉風のゆとりふて。拾ひしとて返せしに。別ふ主ある金なるべし。明白ふ說ならせよ。說ならせよ。と信ざちて。いへべ善吉完爾と笑み。宣ふ如く彼金に。僕れ扉風のゆとりふて。拾ひしふいいにぜ。癒したまひし金五両。失たりとて罵りさまふを。よしやならぜとまうにとも。樓上ふての事あれべ。疑ひの散べきふあらぜ。ならも昨夜に僕れゲ。不寐の番してにふ。かくまでふ正ふさとを。親方ふ聞せんに。在ゲひもあきまざふこそ。五両の金に貫けをども。世の惡說を受んふにうにがたし。ふの樓上ふ賊ありて。客人さちの齋したまふ。金失さりといをてと。生活是より衰へふん所詮如此〳〵といひこしらへ。金を返し進らそるふ。まにものあらじと思ひしらべ。おのをゲ金を進らしさり。ならるに今ゆくりあく。舊の金の出たる故ふ。刀禰の疑ひまに〳〵散て。歡べしくこそにへ。と首尾を說あらせべ。空蟬もやうやく曉て。善吉ゲ物を惜で。後の後まで主を思ひし。誠心を感佩し。元二に背ふ汗を流して。數回嘆息し。恥にしや。僅ある金ふ愛惜して。心の底を見られさり。泥の中ふ芙蓉を生じ。砂の中ふ玉を出す。妓院ふも又君子あり。志ざしの愛さふ。金殘りあ

く和主ゐとらせん。とく納よといひうけて前の五兩と灰の中ゐ。今とう出さる金を合して善吉ゐ與をゞ。左右ゐくゐれを受も納めぢ。前よ進ふせしいゐゞものなれゞ。返しさまいふんと仔細いねど。別ゐ五兩を加さまふい。襞ゞふ所よあふず。と固辞を許さぢ小膝をそゝめ。和主ゐれを恨ぢい。快よく受ようし。さもせでいゐを再び。妓院へ面を出しうさし。失さりと思へゞ。こそ心よあらぬ事をもいへ。誠ある人の爲ゐかゞうりの金惜んや。と叮嚀ゐ説諭せゞ。空蟬も側より。もろ共よをゝむるゐぞ。善吉辞をるに術ゐくて。やうやくゐ納めけり。現や堪忍五兩の金よ。合して獲さる思案十兩。主を思へゞ身の爲ゐ。福ひもいと多うる。善吉ゞ陰德い。只この一條のみなふず。いと憑しきものあるよしい。主の白眉も。豫てあらざるゐあふねど。就中件りの事を傳聞て。ふうく感嘆し。さをゞこそ彼をとこ。前夜更闌て。ゐゞ臥房の外面よ來て。遽いしく呼覺し。火急の要用いで來さり。金五兩貸てたべ。といひき。ゐゝろ得のさく思ふものうら。ゐゞ貸金ゐい あらぢ。彼ゞ物を彼ゞ乞ふよ。推辞べうもあらざれゞ。やゞて金を遞與せしゞ。原來事みゐ主の爲ゐ。あせし陰德陽報あり。ゐれもまさ。些の報ひをすべし。といひしゞ。それといあくて折〳〵ゐ。物とらとる事多うり。さる程ゐ。光陰箭の如く。又梭の如く。善吉い假初よ。この處へ來つるより。ゐや五年を經さりしゞ。三季れ給銀いさらく。臨時所持の金錢蘊て。百金ゐ あまりぬべし。宿願既ゐ成就ゐさるに。いつまでう。かくてをるべき。久しく父母の墓へ詣でぢ。姨女房ゞいうゐ〳〵。と待ゐびてやあらんぢふんと。思ひやりつゝゐうすゞゐ。舊里の空ゐつうしくて。をさ〳〵主人の氣色を窺ひ。近江ゞへりれ事と告て。身の暇を乞ふゐ。長ゐい家の白鼠なるを。今忽地よかへし遣ると。いと惜くい思へぢも。進退を主の隨ゐする。庭子といふものゐあらねゞ。ゐりなくいとゞめ得ぢ。只点頭さるのみにして。何日を限りとえもいいで。今茲も秋のすゐよありつ。善吉い起行の准備をゐされども。いまゞ主人の許を獲ぢ。いうゐ〳〵と思ひうねて。ゐゞ〳〵乞ゞやうやくよ。九月十一日ゐ事ゐりぬ。この年來物積りて。見ゐ金百二十兩あり。これを主人より受とりて。やがて別を告る程ゐ。この樓上ゐ名さゝる遊女等。餞別けゐとて。物をとらせ。主人も路費を助んとて。別ゐ金十兩を與しうゞ。此彼合して百五十金よあまをり。物夥懷よせし。獨行い殊更よ。心苦しきものあゞ。金をゞ蘊苞ゐして背ゐ肩ひ。とべて身かろく打扮て。主人ゞ年來の恩惠を歡び聞え。頻ゐ瞼を押拭へゞ。白眉の長嘆息しれ。年來いくゞくの。小厮等を使ふと

いへども。いまゞ汝ゞごとくあるを見ぜ。後々い暖簾をとらして。こゝゐて生活させんぜ。と
除より思ひしゞ。只管ゐ身の暇を乞へゞ。思ひしのみゐていひゞひなし。よしや田舍い旦暮
よ。心易さとありとも。久戀の地ゐあらず。妻子を將てふゝさび來よ。再會を俟のみ。といへ
ゞ善吉頭を擡。初ゐい物一ッ。齎したるともなくて。百五十金のぬしゐなる事。皆是主の陰ゐ
れゞ。縱故鄕へゥりても。東のゥたを足ゐして。夜も睡ふんとい思ひいぜ。ゑふせさまふご
とく。宿願もいへゞ。といひゥけて又目を拭へゞ。白眉ます〳〵嗟嘆しつ。路次の用心叮嚀ゐ。
敎諭して目送りけり。時よ弘安四年秋九月十一日。善吉い遽しく。花街の大門を走り出。近江
路を投てもく。百里よあまる旅ゐれど。今幾日ゐりて故鄕へ。歸るとゐもへゞゐのづゥら。歩
の運びもいと輕き。草鞋汚さぬ秋日和。五年前よ近江ゐ。る家をいでしも九月の。十日ゐまり
のとなりし尾上の黄菜野邊の花。見をゞかいちね色ゐゞら。けふい又ゐゞ爲ゐ。故鄕へ飾る
錦ゥし。末懇ゑ犯身の榮ゐ。とゥゐく結ぶ朝露を。玉とし見つゝもく程よ。その日いとやく宿
を投めゝ次の日い相模河を。東北へ遡河りて。甲斐ごの峯よゐけ入つ。三宿よして信濃ゐる。下
の諏訪まで來よけり。ゆくさきもみゐ山路ゐれど。ゑゝより近江へ順路ゐれゞ。險阻を物と

もせぜ。又いくゞくの路を走りて。寂寂の里を過りゥる日。雲とゥ喚るゝものゐるべし。凄じ
き荒男二人。海松のごとくかき垂さる。裙みじゥゐる麻衣ゐ。荒索を帶ゐして。一個い馬の屎
と。二三千の錢を腰よ夾ゑ。一個い食ゐませし團子の串を。頭髻ゐ挿さるゞ。一里塚のゐとり
より。もろともに走り出て。前後ゐ引夾み。親方行季ゞゐもけゐり。ゥふい朝ゥら青蠅追ふて。
鐵鈔三文の駄賃も得とらぜ。傭買とらして。さまいを。といひつゝ行季ゐ手を掛をゞ。善吉吐
嗟とうち騷ぐ。氣色を見せぜうち笑ひ。こい嗚呼ゐるものぞもゥゐ。中山道を跨ゐゥけて。年
中ゐいいく度ゥ。往還そるものを。傭買とふして何ゥいせん。こゝ退ぜやと。回答もゐへぜ。
右と左へ衝放せゞ。蹌踉もせぜ冷笑ひ。ゐゐ奇刻き刀稱ゐいある。雲介い旅容よ。肩を貸ねゞ
世いわたられぜ。多寡のゑれたるこの驛場。酒價欲さゐ手を出して。親ゐも打をぬ鳩尾を。折
るゝゞゥりに撞をたり。と一個ゞいへゞ又一個。ゐゐし所へ立塞り。否ゐふゞ否といいわで。
叱らるゝ科いせぜ。物ゥぜいへゞ日ゞ暮るゝ。その行季遞せと。手を掛る。右を拂へゞ左より。
腕き捉て動せぜ。こい狼藉ゐり人やゐる。この偷兒を捕てたべ。と喚べど叫べど里遠き。綠の
林風さわゞ。谷の石滴と舒のみ。只いたづらに應して。終よ脫るゝ路のゐけれゞ。彼首へ纏緣

り。是首へ携り。撃れつ撃つ一生懸命。一個の行季よ両個の敵手。爭ひ難しみとよわり。いとも危く見えさる折。三十餘歳の旅客ゞ。袱包背屑つゝ。梼の脚絆の柿紅染。澁塗の笠ふりくして。田尻のかさより來るあり〳〵。と見れば日今善吉ゞ。惡棍等ゐ劫かされ。物盜るべき光景あれば。若ばしも得堪ぜ笠掻投り。走り懸りて後あるを。引被きて筋斗をうさし。松の梯へ投著をば。驚き見かへる刄一個が。眉間を碎と撃あやまし。怯む所を足を飛して。茅萱の中へ動と蹴仆し。小賊ども苦痛を去るや。泰平の世ゐ憚ふぜ。獨行と侮りて。白昼ゐ引剝せば。可惜首を失ふべし。さでも命ゞ惜うふぜい。とく身を起してこれを撃。ゐゞ行季い欲りふぜや。と罵りつゝ蹂躙れば。惡棍等いいふゞひあくて。頭とざも擡得ぜ。阿親方。三日酒を飲ぜもあれ。二あき命をすてものゐ。引剝して何りいせん。〳〵ふい朝より酒價も得とらず。備買とらしてたべといひしゐ。この旅客ゞ情あく。扱搗まいすゞ腹さゝしさゐ。思いぜ拳を揚さるのみ。許しさまへ。と臥あゞら。勒解れば旅客冷笑ひ。まざこりぜたよ顕いさゝくや。是あるをとこいゞゞ伴侶あり。よしや何ともいいゞいへ。強て駄賃をとらんとて。旅客ゐ狼藉せば。國ゐ守あり村ゐ長あり。この道中よて一チ日も。生活いあるべうらぜ。放しゞさ奴なれども。秋の日

の短きゐ。こゝろいそぎせらるれば。汝等ゞ首をば。且く繩し得さするぞ。いざさまへとて善吉を。見〳〵へりつゝ注目すれば。善吉もとや顧りて。元來親しゐおもゝちし。よき程よ應しつ。衣の塵土を打拂ひ。行李を取て楚と肩ひ。旅客とうちつれざちて。巣原のかさへ走去れば。惡棍等い直と呆きて。陸まどひして踏れし龜が。頸を伸すよ異ならで。起りへりつゝ目送り〳〵。かくて善吉い。ゆくと十町あまりゐして。若ば〳〵後方を見かへるゐ。彼惡棍等い跟ても來ず。こゝろとじめて安堵しゐば。旅客ようち對ひて。恭々しく小腰を折め。某不慮よ。惡棍等ゐ劫かされ。岐嶇の棧道をさりしより。あゆ危うりけるゐ。異おく救ひさまいる事。よろこび言葉よ竭しがさし。後れて來る伴侶もあれば。こゝよて且く俟べう思ふよ。うちのれさちていゆきのさし。うち捨て走りさまへ。といいせもゐへぜ冷笑ひ。いおさのぞ偽りたまふな。おん身い獨行あるべし。某い下京ゐて。些の買賣そるものあり。奠濃信濃い。亡親ぜもの故郷あれば。親族も多りり。これらを便りて年〳〵ゐ下向し。京ある物を彼所へ賣り。彼所の物をば。京へもてのぼりて。をさ〳〵生活の助よすあれば。岐嶇い年來熟路あり。ふん身ゞ懐中ゐ物ありや。物あきやいきるよしあけれど。われも些の本錢あり。若られば〳〵ふより伴侶ゐなり

て。もろともゐ路を走らゞ。野伏山客ありといふとも。われれおん身ゞ搖まあり。おん身れ吾僻ゐ案山子ゐありて。路次の妨げあるべし。抑々おん身れ何所より。何所へとてまゐりさまふ。旅れ道づれ世れ情。とむらしの仄もいひしゐあふずや。心くまあく相譚さまへ。もし京よりてあさあらゞ。宿所まで送り進らせんといふ。いと懇切まれ聞ゆれど。これとても心放されぞ。便あくれおもふ物ゐら。羅まれ救れさる恩あれゞ。強面いらへも得せぞ。見らるゝでとく。蕨菎一個を行李にして。物齋したる旅あらねゞ。爭ゐおん身を厭ふべき。某れ近江のものえ。家れ究めて貧くて。妻子を養ひゐぬるまゝに。近來鎌倉へ趣きされど。本錢あけれゞ物まも得あらぞ。いたづらゐ故郷へ歸る。われまれ等しき伴侶もあり。甲斐ゞ翠ゐて足を倒り。彼れ一ヶ日後れされど。遠ゐらぞ追着あん。いそぎたまへぞ。伴れるゝを。絶ていぶせく思ふまあふぞ。と寶語虚言うち雜て。いへゞ旅客うち点頭。吾僻もいそぐ旅あふぬまま。願ふまま稀ある伴侶を得さり。羅ゐれ惡棍等まかゝづらひて。さてそ疲勞たまひゐめ。今宵れもやく宿とるべし。といいるゝに胸くるしくて。あふぞもゞあと思へども。いゐまとも術なくて。野尻の驛ゐ宿を投め。彼をゞ京なる人と呼び。われれ近江の人と呼れて。枕をあらべて臥たれども。

只顧ゐ心おゐれて。通宵いもねちれぞ。つくづくと思ひやれゞ。このをとこが面魂。眼ざしも平あらぞ。脣薄き物のいひざま。絶て華洛人ゐ似ぞ。且その爲体。坊賈ゐ似ず。これ世まいふ勾引。闊广の灰ゐやあふんぞふん。ぞうらゞ前の雲助等も。ふなじそぞある惡棍ゐて。ををゐ物あるをよくぞりて。此彼竊ゐ謀し合し。途まま危難を救ふを名として。恩を被せてわれを誘引。輙く金を奪ひとふん。と計較るものあるべし。前門まま虎を防げゞ。後門まま進む狼あり。と世の常言もをゞうへあり。これいゐゐして脱んとて。とさまかうさま思へども。施をべき計策あく。いさづらゐ夜を徹うし。次の日も又もろともまもく程ゐ。彼が便する際と窺ひ。辛して二里あまり。喘〻走り脱。汗推拭ふ眼上の。瘤の潰さるこゝちして。と玄めて吻と胸を拊。かくまでまま遠離れゞ。縱彼もの足ばやありとも。けふい追着とあらじ。と思ひつゝ前面を見れゞ。いつの程ゐゐ伴のをとこ。茶店ュ尻をかけてをり。善吉を見て呵〻と。うち笑ひゐゝさし招き。手のわろき人來ませしゐ。おん身まま紛れて此彼と。二三遍索たり。誘もろともまゆくべし。といふまま否といいらへゐねて。鬼まとらるゝ心持しつ。只神佛を祈念して。その夜れ大非の津まま宿とり。その次れ日れ鵜沼ある。客店に夜をあゐせしが。そべて一更も目睡ず。こゝ

より猶里二夫川へい。二日路ゐとや足らずありぬ。近江路へ程近ければ。彼が悪念氣色よあらぢを。動すを心隙を窺ひ。手を下さんとにるとゑば〳〵あれど。幸ひよして道そゞら。往還の行人跡絶せず。さすゞゐ影隱てや。けふまでい無事ありき。わゞもゝこのさを何の村と。明白よゐ告ねども。近江路へ入らん日ゐ。彼手を空くしてやい止べゑ美濃の垂井れ東よい。熊坂ゞ松とてあり。ゑゝよりい八九里もあらんぞらん。昔も今も國ゐ盗人。家よ鼠と喩ゐ洩れぞ。ゐゞ運命の縮る所歟。うち獄よもあまりあり。憑むい親の神靈。鎮守多賀の大神。夜のまもり日の護りゐ。まもりさまひて善吉ぞ。今の危嚴を救せたまへと。只管よ念ゑつゝ。鬱〳〵として繰まぞ。又伴われてゆく程よ。神明信を護りてや。この日も遂よ恙あくて。美濃の野上ゐて。日の暮しりゐ。こゝに宿を投けり。この處より故郷へい。僅ゐ四里よ足らぞありぬ。今須栢原より西ゐ。知已もあれゞ。賊を鄕ゐ便あれど。脫れかさくも危きゐ。今宵唯一宿あり。むりしこの里ゐい。野上の花子なんぞ聞えさる。傀儡婦もありゝん。今い不便の村落ゐありて。さる遊女いゐらざめれど。よしや飯盛る女の子ゑとも。相譚て夜を共よせた。ゐのづから仇を鎭ぐ。わゞの案山子ともありぬべし。まづ相譚て見ばやと思ひて。この客店の下女どもゐ。憑を着て見るゐ。年紀十八九可ある女の子。容止も醜からで。いと怜悧あるありゝり。これをころと思ふゐ。ゑれるものゐ似たり。彼も又。これを見るとゑゞ〳〵ゐして。信ふしげゐ欵待せば。いよゝこゝろ得がたくて。言の叙あらんよい。問ゞやと思ふ程よ。伴侶ある癖者い。浴せんとて。帶解うゝて浴室よ入りぬ。折しもあれ彼女の子。善吉ゞゐとりよ來て。灯燈よ油を增加。やゞて立んとにる裝を。善吉急ゐ引とゞめ。言忽卒ゐ似されども。何地ゐてう見たりけん。おん身いゑをる人の如し。今宵吾儕ゐ大難あり。救ひたまいりてんやといふ。顏のくゞ〳〵と見かへりて。ゑう宜へゞわらいも又。おん身を見さる人とおぼし。もし五年前の秋。岐岨の妻籠ゐるゐ宿ゐ。一夜あかしさまひさる。善吉ぬしとやらんゐい侍ふぞや。現その夜さり宿かゐし。ゐれい二夫川の善吉ゐり。原來おん身い彼客店の。少女子阿六刀禰ありしゐ。ゑゝゐて再び會んとい。ゐらいも ゑらず。ゐれも思い ぞ。これい〳〵。とゞゐりゐ。ゐゐ疑ひい散ざりゝり。當下善吉膝組ゐ思し。變ゐいおん身が孝行を。感佩して今ゐ忘れず。此度故郷へ歸るとて。おゐし。岐岨路を過るゐれゞ。立よりて訪ゞや。と思ざるゐわらねぞも。といひうけく後方を見うへり。跡たゝび壁を低しつ。寤寐の里のこゐたより。怪しきをとこゐ伴われ。一歩の

間も由斷せず。彼が毒計を脱んと思へば、こゝろ易からで。只いたづらに妻籠を。ゆき過たれば、おん身がこゝゝ。ゐまさんとい絶て去らず。爺どいいうゐありたまひし。いつの頃よりこの處に。住ひたもふ。と叮嚀ゐ。問れて忽地酸鼻。親よて待りし和五郎い。その年の暮身まうり侍り。荒れたる宿よもり村の。雨い袂ゐ降そゝげど。[illegible]幅狹き女子のかひなさ。人手乏しき送葬。過七の追薦ゐ。虻の陀羅尼も春くれば。手向の水も凍解る。四十九日の次の日よ。屋を毀て沽却し。親の墓をば立たれども。世よたちがさき孤子の。去りも親族あらざれば。些れ由緣を慕つゝ。こゝゐ一年かしこよ半季。繫ぬ舟と身をあして。且く人ゐかゝるくるしさ。この客店いもらいが叔母の。夫の家よ侍りしが。叔母叔母夫もあくなりて。今い他人の世とあれども。舊緣あればこゝへ來て。下女とし使れ侍るゝ。襲ゐい親を發へとて。臥房の裏ゐ遺したまひし。二緡の賜い。世よ富む人の千金にまして。今將忘れ侍らぢ。恩を受て恩を去らねば。狗自物とぞ世よいいふ。今宵ゐ逼るおん身が厄難。大りたい猜したり。ともかくもこしらへて。虎口を脱し進らぜべし。こゝろ易く思ひたまへ。といとりひ〳〵しく應ても。おの形あきの身の憂苦よ。いとゞ涙い禁あへず。善吉い信ある。言葉の露をうけて去る。人の歎きも痛しく。わが苦しさも白地に。物うさらんと思ふ折。竹緣のうた蹙然と。人の來る音しさり去りば。さていい彼癖者。とや浴し果さり。と思へば椿引よしつゝ。陽睡する程ゐ。お六いやがてつと起て。厄刪のかたへ罷りゝり。是より先善吉い。旅宿〳〵用意し。風ひきたれば。と僞りて。一トたびも湯よ入らず。臥ぬといへども絶て睡ふず。金を忍竊ゐ苞より出して。財布を楚と腹よまきさ著。その夜〳〵をあうせしうば。癖者もその意を去りて。强て浴せよとい勸めぢ。去りるゐ善吉い。偶々お六が助を得て。いと憑しく思へども。さぞうへいまだ詳よ告ぢ。その事を課し合さで。このまゝよあらんよい。殃危遂よ脱れがさけん。竊ゐ相譚ふよしもがな。とひとりまくふを碎くとい。癖者いいうぞ去るべき。貧浴衣の袖をもて。耳を拭つゝいでゝ來れば。善吉忽地思ふやう。わをもし目今浴せずい。お六よ事を告うたうるべし。財布を腹よまきたる隨。湯よ入らばやと思ひしうば。見うへりつゝ身を起し。京の人出ませし歟れい四五日湯よ入らで。疲勞を補ふよしもあらず。風邪も大うたおこたりぬ。浴すべう思ふあり。といひつゝ袂を ういい探りて。手拭をとり出せば。癖者聞てうち点頭。そい一段去うるべし。風爐の加減もよき程なり。垢をば流さでおたゝまり。湯ざめぬ間よ臥しさまへ。とくくといそがにをり。宿の

女の子が遽にしげゐ。夕餐の膳をもてすえたり。善吉にこを見て。京の人たうべたまへ。吾儕にまづ湯ゐ入りて。と縁頰の障子おし開き。浴室のかさへとてもくよ。お六に豫てこゝろ得てや。掛燈盞の下ゐ立在。善吉を俟てをり。折こそよけを。と走りよるを。くらさうさへと招きよし。浴せんと宣ひし。おん身が聲を聞しゐ。急よ夕餐をすゝめたり。こに彼をとこよ枷ゐけて。飯をたうべ果るまで。得立せじと思ふよ侍り。いふよしあゐ去らしたまへ。と密語に善吉に。頻よ頓智を感佩し。事急あれば摘ていいん。某鎌倉よ年を經てゆくりあき。僥倖多く。既よ百五十金を獲たり。よりて此度。こをを家苞ゐ。舊里へ立うへり。家を奥して亡親の志ざしを果さん。と思ふ寸善。尺魔ゐあひし。緣故に箇樣ふと。寤寐の里尽處ある松蔭ゐて。両個の惡徒よ劫うされし折。彼癖者よ救をて。已とを得ず伴侶よありし。道をゞふの事を物ゞさり。彼が進止を窺ふよ。そあこれ似たる惡徒ゐて。かくまでよ纏緣ると。ゐをよ夥の金あるを。はじめよりよく去ればあるべし。こゝより故郷へ四里ゐ足らぜ。今宵一宿恙なく。ありさしたまへゃ堅ゐ又。彼よ跟らるゝとも何事のあるべき。偏よ蔭を仰くのみ。と他事なく憑めば肩を竦め。さおもひたまふこそ。ゐ危くも危ふけれ。すべて旅路の小賊ゞ。物ある人ゐ跟たるに。をさゝ由斷を覗ふものあり。さるゆゑよ。日をかさねて共ゐもくとも。臂力いくゞく勝るとも。後の祟をおそるゝから。隙と得ざれば手を下さず。その跟ふるゝ人も又。道すがら由斷せず。或に舊里近くあり。或に都縣あんど。いと繁閑たる地よ入をば。市の人だち多きを憑みて。思にぜこゝろ弛む折。賊に忽地便を得て。輙く物を奪ひ去るとゞ。牛打童ゞ夜話ゐも。常ゐ聞く事ゐ侍る。かゝをば今宵殃危を。脱れさまふよしありとも。翌さまに〳〵危ふうるべし。さいおぼさぜや。と說喩せば。善吉有理とはじめて曉りて。額を疾し嘆息し。去ふふばいうゐる計もて。この殃危を脱るべき。と問へばお六に耳の根ゐ。脣をざしよして。彼ゞ欲するものに金あり。金をばもらにゐ頓さまへ。去うりとも。こゝよ坐さんにあゐ危し。子二ッの比及よ。厠へ登おもゝして。緣頰をうち繞り。竊よ背門へ出さまへ。前面よ高き松山あり。この山に。關の藤川へ出る捷徑よ侍り。去うれども夜とともよ。走りさまいんに又危。し山のあゐさ。十町ゐまりにして。左手ゐふりさる森の中よ。山神廟あるべし。其所ゐ躲れて天を明し。彼癖者を遣りすぐして。徐々よ二夫川へ歸りさまいゝ。得うさき貨を失にぜ。おん身も越あうるべしと。いと眞實やうゐ說示せば。善吉聞て感謝ゐ堪ぜ。元來お六ゞ人とありに。善德

よてよく去りつ。聊も疑いを。肚よまさるる財布と釋て。そゞまゝよ金を遞與せゞお六と左右の手よ受て。懐よ楚と挾め。且くうち案じつゝ。頭ゐ挿さる櫛をぬきとり。夥の金を頷おゞち。證據あらでゝ便なた所行あり。見も忘をゝやをゝすちん。こをゝ是五年前よ。おん身ゞ拾ふてたまゝりし。母の像見の櫛よ侍り。人ゝともあれゞ爲ゐゝ。身よも得うにぬ物あれゞ。これを證據よ進ふにべし。玳瑁の班ゝ五ッ侍り。齒ゝ三ッ缺て侍るあれゞ。紛れあるべうも侍らぬうし。よしやおん身ゞ來ませるとも。この櫛あゝてゝこの金を。輙くゝ遞與ゞさし。又この櫛を齎したまゝゝ。他し人ゞ使ゐ立とも。金を返し進らすべし。うく堅固ある證據よ侍れゞ。努失ひさまふあ。といひつゝ櫛をさし出せゞ。善吉これを受納めて。感涙坐ゐ拭ひあへを。親よ孝あるのみあらで。いと有うさき才女りあ。いうで誨を叛くへき。といふをお六ゝ聞、も果ず。湯ゐ入りさまへ。と目よいゝせ。裳を褰足を翹て。背門のかさへ出しうゞ。善吉ゝ遽いしく。衣脱捨て浴しつ。舊の坐敷よ來て見れゞ。彼癖者ゝ著をおさめて。湯を吹冷しつゝ飲てをり。うゝれゞお六といひつる事を。竊聞するよ追あふしと。思へゞとつうゐこゝろおちゐて。才女の機變ゐ感服し。折敷と引よし。飯をさうべ。且く四表八表の物うたりして臥たり。時とやこ更の頃あれど。お六ゝ出居のかさよありて。孤燈よ對ひ苧を績ぎ。をり〳〵高咳きして。いまゞ睡ふであるを示せゞ。善吉ゝこゝろつよくて。小夜の深るを俟はどゐ。伴侶ある癖者ゝ熟睡して。鼾の聲いと高く。お六も臥房よや入々ん。咳ゝ聞ゑをおりて。寂莫とものさみしく。三更の鐘聞ゆをゞ。善吉竊ゐ身を起して。厠のかたへゆきて見るよ。雨戸を半開てあり。軈て庭へおりたちて。背門のかたへうち繞り。樹間を潛り笆を踰。前面の山へ攀登るよ。十九日の月いとあうけれど。松山あれゞ樹下闇よ。ゆくさきゝ絶て見ゑを。株よ跌きてゝ足を傷り。枝ゐ携りてゝ手を痛し。艱苦いふべうもあらねど。背より物のおそろしさよ。霎時も憩を喘〳〵。尾上を投て登りけり。さる程ゐ癖者ゝ。甲夜よ更ゞ鼾ゞ聲のみさして。陽睡してゐりしうば。目今善吉ゞ。厠へもくをさや去りて。よき折と思ひけん。遣過して竊ゐ起出わゞもの彼が物。みゐ一袱よ推包みて。あれを背よ楚と肩ひ。脇夾の目釘浸して。厠のかさへもかんとすゐゐ。善吉ゞ出るときゐ。もし追るゝともやとて。幅二尺餘の竹綠ある。雨戸の棧へ推張らして。杖と横たへおきしうゞ。物よいこゝろ得ゞゐある。癖者あをども。こをを去ふずれうら足をすくいれて。俯ゐ輾びつゝ。竹綠を衝拔たる。その音をびたゝしく聞えしうゞ。お

六ハさぶ。主人もこをに驚き怪て。忙しく指燭しつ。走り來てこをを見るわ。一個の旅客倒れてありその爲体。訝くハ思へども。まづ引起しつゝ。臥房のかゝへ扶入れて。綷の趣を尋れバ。癖者ます〳〵迷惑して。今宵の事をしらんとおふバ。伴侶のおとこをとく召びね。彼こそよく去りゝれ。と陳ぜるもこゝろ得りたく。主人わやゞてお六して。伴侶ある旅客を召するわ。何處へかもきゝまひゝん。絶て影ゞわ見えぜといへバ。癖者大きゝ後悔し。這奴夜わ紛をて逃たりとも。何地まで走るべき。いで追ひ留ん。と小膝を突て。立んとするを推すゐて。主人ハ儼と貌を更め。天わ眞夜中ゝハゝ。下女等ゝもおらせぜして。ひそやかゝ行李を屁ひ。背門のゝさより出んとしゝまふ。爲体ころおゝろ得ね。既わ往方おをぜおりし。をん身ゞ伴侶ハ何地の人ぞ。こゝわあらねバ是非わ及バぜ。をん身ハ且く留りて。天を明して出たまへこハ私わ留るわあらず。里の法ゝハ。といれて頻ゝ頭を搔き。黄檗を嘗たる瘖わひとしく。腹たゝしさを告がゝくて。阿容〳〵ふとして天を明しぬ。こゝの主人ゐ。松山の興摠と呼れて。物わ熟ゝる老人なれバ。みづから座敷の出口を守りて。終ゝ睡ふず。鳥の森をはあるゝ頃。六等をして。家具調度なゝどを展見さするゝ。失ゝりと思ふもおけれバ。このうへゐ仔細おしとて。彼癖者を。放遣らんとして。雨戸開ハおちおどしつゝ。二たび三たび癖者を。つくゞと見て嘆息し。左の皆なるふたつの黒子ハ。童顔わ認あり。汝わ是。わゞ赤坂わありしとき夥の金を盗とりて逐電せし。丁兒鵜太郎ゝあらぜや。と問をて思ハぜ頭を擡。わをも又つくゞと。主人を見て大きに驚き。身を轉して逃んとするを。興摠ハはやく踵を捉て横さまわ引倒し。項髪摑をて膝下わ推伏。眼を瞪らし聲をふり立番生わざも劣れる奴を。道理もていひ懲ふにハ。無益の辨わ似ゝれども。耻かゝやゝして熱腸と冷ん汝ゞ七八才の頃おりけん。親のおきものおれバとて。叔父おる人ゞ泣ぬバゝりゝ。將て來て憑めバ痛しくこものわ立べき年才あらねど。年季十年と定つゝ。そゞまゝゝ留めしより。人を使ハ使ゝと。喩の節の竹箒。門掃してもよくハ得掃ぜ。刺衣施布子も衣施榮おく。出るれバ失足て泥塗れ。入れバ袖もて鼻を拭く剩毎夜の遺溺。襁褓わ劣る貧蒲團。簀子の下までうち拔し。席薦を乘しハいくそたび。虱拾ふて又被する。繻半の裏の濕瘡の膿。或ハ凍瘡草かぶれ。雀目の藥二日灸。親ゝひとしき衆育の主の恩をバ去ら禿の。天窓くゞちわ叱りつゝ。毎宵わ習せし。手習墨ともろともゝ。曲るこゝろのをぶとくて。三才兒の魂百の錢。竊む癖とてこりぜまわ。賒錢硯の金搔

擬ひて。逐電せしを忘れゝせじ。汝が十二のころありき。貧き叔父ゐ債を負し迹ゝ野とゐれ出客と。身ゝおりさがりて舊里近き。舊主の家とも去らずして。こゝゑ宿りて積惡の。責ゝ皇天赦したまゝぞ。れゝ世ゑ幸おくて。五箇年前ゑ妻を喪ひ。活業も思ふゐ似ぞ。この野上ゐる客店ゑ。松山某甲と呼れし人。夫婦もろともゑ身まかりて。嗣すべき子もおけれゞ親族隣人相謀りて。家を售と聞えしゝゞ。吾儕すおゝちこれを買て。赤坂よりこの地ゐ移住し。舊ゑ因て客店の松山と呼れつゝ。三年の秋を送れども。偷兒ゐ一夕も。宿せし事ゝ絶ておし。爰ゐ逃さる一個のをとこゝ。亦是汝が支黨歟。明白ゑこれをいへ。とくいいぞや。と罵りて引起しつゝ突倒せゞ。あざみ笑て髪を拊りく發覺てゝ術もおし。大金齎る獨行。よき鳥おりと迹跟て。寤寐の里で恩を被せ。伴侶ゐなりて三四日。這奴が由斷を窺へども。とや曉得きて便を獲ぞ。今宵おらずゝ朝ざちゐと。胸算用を案して。鳥をゞ逃して贓のゑれさる。幼稚ときの小盜まで。長やりゑ說つけられ。かくまでゐ間がわろけれゞ。出おはして物ゐせん。十年貳分の給銀で。四五年扱使れ。六七両の仇金。よしやもて逃さゞとて。さのみいいるゝ科ゐゝあらぞ。牌弱ものゝ二度も三度も。死かゝるまで年たけて。面忘れせしものを。親方顔ゐふさくし

く。大聲揚て叱りさまふゐ。蹶て蚍が出るものぞ。をそろしやくく。去うらゞ暇まうさんと。塵搖拂て身を起せゞ。與憑ゝます〳〵怒ゐ堪ぞ。綠頰のほとりある。杖を取て擊んとするを。お六ゝやゞて推遮め。腹たちさまふゝ理おれど。懲して效おき丐兒ゐ棒擊。去ゞそゞまゝ去しさまへ。物とられねゞ。と寛るを。鵜太郎は見もりへらぞ。小曲うたふて出てもく。されゞ已前より衆合つゝ。これを見もし聞もする。下女等ゝおそれて舌を卷。阿容ふゝとして目送り。かゝりしゆゑゐ菩吉ゝ。辛くも盜難を脫れつゝ。松山ゐ巒登りて。この夜をあかす事を得たり。畢竟菩吉ゞ松山を越るとき。又いかゐる話說りある。そゝ次の卷ゐ解まくるを見てまらん

二夫川の下未

親族も離ることあり。響敵も合ありこと。誰りおもゝん。菩吉と鵜太郎ゝ。從母昆弟おれども。幼稚ときゞ離散して。迭ゐその面を認らず。一個ゝ孝子。一個ゝ光提。そのなす所異ゐし。て彼ゝ利の爲ゑ。人を賊んとを謀り。此ゝ害をおろれて。夜徑ちより走る。犯せし科ゝおけれども。

仇ゐ追るゝともやとて。蟹吉いその夜さり。辛くして山よ登り。又くぐると數町ゐして。左右を見ゐへるゐ。果してお六がいひしよたがいを。一叢の杜の中ゐ。山神の廟あり。こゝゐりゆりとゐもふゐど。繞て樹間をうち繞りて。社壇の裏を見入るゝに。破簾月を引て。燈明ゐ換べく。懸魚雨ゐ枌て。梟を栖するによろし。風い水琴を誘て。寂錢を散すごとく。狐踪蹟を印して。落花を掃くゐ似たり。神廚ありといへども。敲せざれバ蹴をまそよしゐく。旅店ゐしといへども。怠ざれバ疲を補ふよ足らを。物をまふ身のいとゞしく。仰けバ月も傾きて。丑三いまや過さり。旦くこゝゐ明さんとて。古廟の中よもゝみ入り。大山祇の冥助を祈りて。厄難消除と念をるゐ。秋の夜ゐきぺいと長くて。曉るやうゐてまざゐけを。一夜を千世とまつの風。山河の音凄じく。岩堰水とゐが胸と。碎けて落る涙ゐい。かさしく袖を去ぼりゐへを。思ひつゐれて身を倚る。壁ゐもゐをてぬるとも去らを。霎時目睡さる夢よ。地方を何といまらで。ゐが身い烏帽子紫袍去て。いと逞しき馬ようち乘り。ひとり曠野ゐ出さるゐ。前面ゐ流るゝ氷ありて。打ゐい枕川と榜示を題さり。その水一面よ氷りつゝ。いと厚く見え去りバ。氷の上よ馬をとゝめ。北より南へ渉さんとそる程よ。忽地水中より。両の日輪閃き出て。又水中へ沒と

見るし。氷い軈て裂と碎て。氷二條ゑ流れつゝ。人馬もろとも水底へ。そげまゝゑ沈むと思へば。愕然として驚き覺るゑ。こゑ南柯の一夢あり。肉動き胸騒ぎて。失ふ所あるゑ似れば。こゝろ待ごのたく思ども。問て慰かたもおし。うちも累る禍災の。神の祟ゐあらぢやとつゐぼかおさい限りなゝれど。夢い五臓の勞ゐ成る。と物識れる人いいふおる。あまりゐ劬勞すれバこそ。うゝる夢さへむすびけめ。意ゑりけぢい何かいあらん。と忽地ゑ思ひうへしつ。塵掻捻りて秡禊して。神前ゑ額をつき。久後までの無事を祈るゐ。天いやうやく明ゐけり。こゝより更ゐ野上へ歸らバ。ありけん果を去るべゝれど。今い早うり。おゐ癖者ゞ彼處ゐをらバ。毛を吹て疵を求やせん。金をバお六ゑ管たれバ。まづ舊里へ歸るゐ去か去。と腹裏ゑて深念しつ。朝霧ふりき山下を。其處かとバうり越てもく。闘の藤川へ出ゐけり。是より熟路おれバ。只管ゑ走りつゝ。この日午の貝吹ころ。二夫の里ゑ入りしゝバ。まづ村長上臺潟司ゞ宿所へ立よりて。歸鄉のよしを告。終ゐ曩おく家ゐ歸りぬ。さる程ゑ遲也阿丑い。孫て善吉ゞ。鎌倉より消息して。歸鄉の事を告たれぢ。きのふけふとい思ひうけぢ。うちも驚くまでゑ。慌忙きつゝ出迎て。まづ足を洗し。寶子の塵埃うき拂ひ。猛ゐ曲突ゑ柴折燒て。賓客を欵侍ごとく。恙おきを祝し祝され旅疲の疲勞を問慰めおぢそる程ゐ。里人等もとや去りて。おのゝ詣來て賀を述。いとゐぎいひたる爲体。その樂融融さり。さても遲也阿丑等い。待ゐ久しき五年を。いたつらゑ送りつゝ。只留守去さるのみなれぢ。善吉が鎌倉より。衣食の料を贈りしゝバ。坐して食ふゑ餘りゐり。まいてや宿願成就して。此度歸るゑ及びてい。物豫た嬉しぬらん。と豫より思ふゐ似ぢ。只身ひとつゐて歸りゑけぢバ。心もとおさ限りおけれど。豈い人の出入ゐ。いとまおくて得も問いぢ。日沒果て善吉い。妻を召び姨ゐ對ひて。その身鎌倉ゐありし日の事。癖途より癖者ゐ伴れ。困じ果さる事いさゐゑ。昨夕野上の旅店ゐて。盗難を脱れん爲。懷おる金百五十兩を。下女お六といふものゑ。去バし管けて歸りしと。首より尾まで物かさるゐ。阿丑ゞ妬むともやとで。お六が素生を詳ゐたいいぢ。只彼女子ゞ。後日の證據ゑとらしたる玳瑁の。櫛をとう出てこをを見せ聞さまいぢや地獄ゐも。去る人ゐれ。と誘ゐいひつるよしを今去りつ。われもしかゝる翼を獲ぢい。生て家ゐい歸りかさけん。この櫛ふりたるものといへども。百五十金の手形ぞうし。吾儕みづうら野上へゆくとも。おの櫛を返さゝれバ。金も又返りゞさし。穢すべし〳〵。と密語バ。遲也阿丑い疑ひ釋て。數回歎息し。旅ゐい護ゞの灰

とゐいふ。偷兒ありと豫て聞つ。甕ごの塩焼くかふ紀世ゐ。百五十両失ひあゞ。彌勒の世までその金ゐ。絶てふさゝぴゐひりさけん。さても危さとゑうし。こゝ併ら亡親を。つりの間も思ひ忘れぬ。おん身ゞ誠を神も護り。佛も憐みさまふまこそ。と眞實ごちていふ母もろとも。阿丑と櫛をと見から見て。金うけとるべき手形とあらゞ。宣ふごとくこれゝ金ゑ。今宵ゝ家廟へ供さまゝ。といへゞ善吉うち点頭。現この櫛の置ところ。家廟ゐましさるかさもあし。さいとてみづうら櫛を取て。父母の位牌のゐとりにさしおき。雲時うち念する程ゑ。寢よとの鐘ぞ音すゐる。善吉ゝ道すがら。癖者ゑ困じ果て。一夕も目睡ず。やうやく家ゑ歸りてゝ。忽地ゑこゝろ綴みて。いたく疲勞をおぼへしうた。そがまゝゑ臥房ゑ入りつ。曉るもえらで熟睡せしうゞ。起さるころゑ日ゝいと高うり。遽しく嗽きて。家廟お拜んとて裡を見るゑ。昨夕おきさる櫛ゝあし。こゝいうゑ。とうち驚き。そこうこゝうと求りねて。妻ゐ問。嫂ゑ告れゞ遲也阿丑も呆果て。もろともゐあされども。陜き家廟の裡あるゐ。こゝうと思ふ隈もあし。當下阿丑ゝ肩を顰。こき蹈せ。下壇のかさへゐ。鼠の穴の侍るうし。もし鼠ゑやひられけん。といへゞ遲也もさし覗き。現阿丑ゞ猶せしおとく。油染たる玳瑁の。櫛あれゞさもありあん。昨夕鼠

のゐをたれど。常の事あれゞ起ても見ぜ。櫛を銜を去んとゝ。夢ゐだもえふざりし。彼處へやもてゆきなん。こゝゐやある。と三人して。柳ある物をとりおろし。室の四隅簀子の下まで。殘す隈おく索ばば。只いたづふゐ時のそうつりて。日影を見れゞ亭午ゝ過さり。お丑ゝ頻りゐ後悔し。二重三重ある物ゐ納きて。秘ゐうゞかくゝあふ。金の手形の櫛あれゞ。家廟ゐ供へておさ人ゐも。歡しまゐらせん。と思ふゞうりゐ勸つゝ。蹴ゐる所行ゑてけり。といと面あげゐうさ口説ゞ。善吉恨る氣色もおく。いお。おん身ゞ惱のそゐゝあふぜ。ゑをも鼠がひうんとゝ。一切思ひかけざりた。よしや彼櫛失いりとも。ゑをそづうふ野上へもさて。明白ゐ緣由を告おゞ金を返さじとゝ。彼女子もいうでいふべき。ゑうゝあれど件の櫛ゝ。殊お秘藏の物おるよしを。ゑりつゝこをを失ひてゝ。いと面ぶせある所爲ゐこそ。入ゐ敷居ゐ高くもあれ。綷忽せゐゝゑゞたしとて。湯濱の飯の箸もとりあへぜ。裝を引折て忙しく。野上を投てもく程ゑ。三里ゐおまる道おれゞ。いそぐとそれど秋の日の。とや酉へ頓くころ。やうやく彼所へ走り著て。與惣ごの門を見入をつゝ。おゝこけりと思へども。前の夜のと顯讖て。おを外面ゑ立在を。その人ありと見てけをゞ。お六ゝやゞて走り出て。物陰へ招き入れ。何事の侍りてか。忙、

しく來さひさる。と問るゝもおゝろ得うたくて。まづきのふ恙おく。二夫へ歸りしことを告。櫛を賦よひかれさる。緣由を說ふし。おん身母ぼの紀念とて。年來秘藏ぎたふ物を。一夜の中お失ひぬ。といふも面おき所爲なゞゝ。匿果べき事おらぢ。腹たゝしさを推量れば。鬱解るよしなき失に。胸くるしさい限おけれど。照る日の下に立ずもあを。今いふ所神うけて。つゝがうりも僞りならず。櫛の代おい何よまれ。課する物を進らすべし。彼金返したまれ。といへばお六い眉を顰め。こゝろ得ぬといいるゝよ。金をば疑お返し侍り。櫛い則こゝよありやといひつゝ頭へ手を撓て。腹とりてさし出せば。善吉こをを見から見て。呆るゝ事半晌ばかり。又いふよしもおうりけり。當下お六ば善吉ゞ。顏をまもりて嘆息し。原來おん身い光棍よ。又誹ふをたまひよけり。けふ亭午の頃おりし。箇樣ゝゝある人來てわをい善吉ゞ。郷家のあるじ。彌太八といふものゝとて。いぬる夜の事を述。善吉がみづから來べけをど。いうおせん姨ある人。七月の下浣より。長き病苦お臥たるゞ。彼をとこゞ歸りし夜。忽地よ綷斷れたり。うゝる折よ錢おくてい。一切事も整ぢ。さればとて今日明日い。吾僧彼處へゆきがさきよ。和殿野上へ赴きて。これらのよしを告ぢらし。金を乞とりもて來てたべ。この櫛正しき證據おるよ。おれゞよ返せと妨おし。と〳〵といふに推辭がたくて。かく忙しく來つるおれ。

ゝれい元來善吉と。竹馬の友おれば。こゝろおかれぢ。うゝる折わちらとも。おりおらるゝものよこそ。いぬる夜管まねらしたる。百五十金を遞與てたべ。櫛を返しまねらする。と眞しやかに述しかば。まさあるまじき事よも侍らず。この櫛だわ返したまい。おん身みぢから來ますとも。金を遞與まねふせん。と約束ぢたる事おるよ。今さら何をう疑ふべき。されば櫛とうえゞゝよ。金い財布に納たる儘。彼彌太八よ遞與せし。といふを善吉聞もあへず。わう郷家おる人いさふゝ。二夫の里に彌太八と。名告れるものい絶てなし。且ゞゞ姨い恙くて。今おゆ家にをいするものを。何ものの緣由をかくまでよゝ去りて。櫛をば盜とりさりけん。願ふよいぬる夜おん身とゞをと。潛やうお約束して。金と櫛とかえさるを。彼癖者ゞ竊聞して。その夜さりゞゞ迹を跟。櫛を盜ゞ。人を替。うまくおん身を欺きけん。證據の櫛を等閑よして。盜をされば今更よ。人を恨るよしもあらぢ。かゝらんとてう一昨の夜。松山おる古廟おて。如此〳〵ある夢を見さり。とてもかくても彼金い。ゞゞ身お憑ぬものおるべし。といひつゝ去ば〳〵嗟嘆にれば。お六い去ばし尋思して。いあ。この櫛を偷るい。別人お て侍るべし。

誰かゑらんかの癖者いこゝのあるじゞ赤阪よありしとき。主の金六七両を盗とりて逐電し。叔父よ債を負したる。丁兒鵜太郎とう呼をしものゝ。冥罰終よ脱を得ぜ。その夜おん身を遣過して。背門のかゞより退んとしてや。杖よ跪きおもいぞも。竹縁を踏拔て。忽地よ搖となり。いさく主人よ懲さをて。やうやく放やふれしい。天明て後の事おりし。うゝをゞおん身ゞ蹟を跟る。いとまい絶ておきものを。といへゞ善吉ふさゝゝび驚紀。その鵜太郎といふものい。ゞゞ姨の冢子おらん。彼ゞ爲ゝ債を負し。叔父いそおいちゞゞ父ゝ。迭よ面を認ちねど。むりしをいへゞ從弟どち。妻の兒おる鵜太郎ゝ。信濃路より苦しめふれ。只假初ゝものいふさる。おん身とこゝゝ環會て。その夜の危難を救をし。善惡邪正い親疎ゝよらぜ。緣故い箇樣〻〻。といと面おげゝ物うゝれゞ。お六も共ゝ驚嘆し。思ひうけぜ。とゞうりよ。いとゞ慰うぬさるゞ。又且く尋思して。やよ善吉ぬし。さのみ思ひ屈しさまふお。此彼事の趣をつく〳〵と思ひやるゝ。櫛を盜てもて來さりしい。彼鵜太郎ゞ支黨の。光棍ゝいあるべうふぜ。あれい正く鄰家の人歟。さらぜい親き里人おるべし。もしこの賊をゑふんゝい箇樣箇樣ゝいひこしらへ。明日いつとめて里人を。殘りなく聚合さまへ。そのときらいよ密やうよ。二夫川へ赴きて。お

ん身ゞ宿所の外面より。聚合し人を闕窺侍ふん。もしその中よこの櫛を。もて來たる人あらば。彼金ふたゝび返るべし。こい故おくていふゝ侍ふぜ。義ゝとからず獲たりし物ゝり。ゑうれどもこの事。彼賊を去るまでい。おん身よも告がさし。又鵜太郎を捕し夜。おん身ゞとを明白ゝ。主人よゑらせゞや。と思ひ侍りしがもらいをふかく賴れて。夥の金を預られしゝ。不覺ゝ綜と洩しおゞ。金もゑに又いかおる。禍を釀しやせん。と慮りていいざりき。今宵詳ゝ主人よ告て。翌い一日の暇をたまいり。必二夫へいゆきおん。よしやこの櫛いありとも。ろの賊を去るよしおくゞ。おん身が疑ひいつかい釋べき。努このとを洩したまふお。と密語ゞ。善吉有理ととじめて曉りて。お六ゞ才智を感佩し。聊も疑ず。明日の事を諜合して。又遽しく走りかへるゝ。往還七里の道おれゞ。いく程もおく日い暮たり。宵闇なれぜさどる〳〵も。その夜亥中の頃及ゝ。門ゝと〳〵と叩くゝぞ。姨女房い善吉おらんと。とやくも猜して戸を引開。入るを遲しと凹座しつ。いかゝぞや妨おく。金を受とりたまひしか。夕餐をたうべさまいぞや。物ゝしくいをいさずや。と問ゞ善吉頭を掉。いゝあ。物もはしかふぜ。頃の日のゝヒかさ。急とすれど四里ゞ程ゝ。野上までゆきもつかで。山中村のやとりゝて。見かへれゞ日い沒りぬ。今須

嶺もあるものを。夥の金を懐ゐして。ひとり夜行するゐ危しわゞ物をわゞ取るゐ。今宵ゐ限るとかゐと思ひかへして彼處へゆかず。途よりやゞて歸りゐき。といへゐ阿丑ゐさもころ。と毋もろともゐうち点頭。現いぬる夜のともわれゐ。墓てゐ心もとおくて。甲夜より親子かいる〳〵ゐ。門邊ゐ出つ。又入つ。尻もおちねぎ待わび侍り。更闌たるゐ寤まりたまへ。といひつゝ妻ゞ鎖す門の戸を。漏る風寒き虫の聲。枕ゐ聞くもわびしかるべし。かくて善吉ゐ詰朝娘と妻とゐ對ひていふやう。吾儕久しく鎌倉ゐありといへども。家ゐとじめゐかゐふぎして。去りも妻子ゐかくまでゐ。恙おくをゐせしと。村長上蠣父子とさらん。みゐ善吉を捨ざりし。里人の屁覆ゐよれり。野上の事も心かゝれど。けふゐ里人を呼びつどへて。旅うへりの盃を。勸めたやと思ふし。これらの准備しさまひね。と叮嚀ゐ聞ゐおきて。みづうふ馮司ゞ宿所へいゆき。又里人の家毎ゐ。綷の趣をふをゑふして。遽しく走り歸り。飯を炊き。酒をゐさゝめ。今ゐ〳〵。と待ゐどゐ。上蠣馮司と。その子昌九郎と先ゐたてゝ。里人等二十餘人。うちつれゐちて詣來つゝ。或ゐ恙おき歸村を祝し。或ゐあるじの好意をよろこび聞ゐ。二側三側ゐひらき居て。右へ巡ふし。左へ巡ふす。盃の數うさあり。おの〳〵笑坪の會ゐぞあり〻る。

當下善吉ゐ酌を執る娘女房を。去ゞし後方ゐ居うゐふせて。席の眞中へ進み出。頃日ゐ人も我も。田を刈。稻を扱く折おるゐ。うちもそろうて來ませしと歡びこをゐ何うゐますべき。去られども寒き家ゐゐ。賓ざねの儲も薄くて。進らにべき物もおし。但しけふの歡待ゐ。一條のものうさりあり。鎮りて聞、さまへ。といへゐ衆皆うちわう笑。そゐ一段去うるべし。四五年鎌倉ゐ。在しされゞめづふうおる。物語夥ありおん。とく〳〵聞しさまへといふ。善吉扇をとりおゐし。されゞとゐ。某鎌倉ゐありしとき。貧るとゐゐふねども。主の光ゞ黄金とおりて。月日と共ゐ積まゝゐ。百五十両の家裸あり。かゝれゞ今これをもて。舊の田園を贖復し。家を興して亡親へ。孝養ゐ備んとて。舊里へ歸る折。途ゐ光棍ゐ跟ふれて。一歩の間も心おちねぎ。せんすべおくて彼金を野上へ遺して歸りつゝ。辛く盜難ゐ脱をされども。又一層の患をまして。墓おくも件の金を。さのふ畧奪れさり。その故ゐ箇樣ふゝ。とお六ゞと。櫛の事首より尾まで。おちもおく物うされゞ。衆皆耳を傾けつゝもろ共ゐ驚嘆し。そゐ何ものう彼櫛を。盜とりてもてゆきけん。緣故を去るものあらぎゐ。いとあしうさき体倆ゑ。ゐお苦々し。と面をゐいして。忽地興を失へゞ。村長馮司いとじめより。つく〳〵と聞て眉根をよせ。事の趣を察そ

るゐ。ろの詐兒奴い別人あらず。彼旅店の下女あるべし。おあじ比より挿ふるせし。玳瑁の櫛い幾もあゝあん。ゑりれゞその夜證據ゐとて。善吉和主よ遞與せし櫛を。失ひぬと聞て惡心萌し。這奴よく似さる櫛を見せて。金をゞ櫛とうえゝゐ。とや返せしあんどゝいふ。これをり〳〵聞く虎落のそぢなり。庚申祭の夜話よ。里の總角等い欺くとも。誰りいそれを實事とせん。女流ゝとて心放さゞ。世の胡慮とあらんのみ。お六とやふんを引とらへて。葬々と穿鑿せゞ。綷立地ゐ明白あらんと。眞實さちていふ父ゞ側ゐ。昌九郎い小膝を拊。ゐゞ大人の宜ふ所。掌を指そゞ如し。もし私ゐ事成らぎい國の守よ餉て。お六とやふんを獄舍ゐ繫し。火水の責よあいせあゞ。いいぎとていいで己べさ。佛こゝろも事ゐよる。あな。手ぬるし。と詰けゞ。遲也阿丑い後方より。善吉ゞ袂を引。いまゞ曉りさまいぎや。上臺ぬしの推量い。的の寂中ゐ侍るりし。村長なり親族あり。憑さまいゞ事を遂あん。夥の金を失ひなゞふ。昨夕い野上へ得ゆゝぎとて。詐欺さまふいこゝろ得ぎ。と左右より怨ずれゞ。善吉聞て冷笑ひ。いゐ。さのみ思ひくしさまふあ。件の詐兒いとや去れさり。といへゞ衆皆頭を搔。やあ拐兒い去れさりと歟。そい歟しき事ゐこそ。お六とやらんゐい歟。その名を聞でい遺憾し。後段い特ゐ趣ある。

物りさりと肴ゐして。今一度過さめ。とおの〳〵膝を組ゐ四し。ふさゝび笑坪ゐ入りしりゞ。善吉もうち笑て。ゑりらゞ目今名を斥べし件の詐兒い別人あらぎ。上坐よをいします。村長殿の愛息昌九郎ゐ疑ひあし。といいせもあへず昌九郎い。折數搔遣りそゝみ出。善吉和主い乱心ゑさりや。酒宴の席とて容赦いせぎ。何見さゞめて某を。詐兒といひし。それ聞んと眼を睜り發憤ゞ馮司も去ゞし善吉を。ゐらまへて壁をふり立。孩兒獸を。大人氣あし。言を設て善吉ゞ。ぬを衣を被すると。おもへゞ因緣あきゐあふぎ。彼ご祖父樂善と。ゐゞ父い兄第ありき。ゑりるゐその子善三い。墮弱あるものありしりゞ。年〳〵ゐ微祿して。村長も得勸ふぎ。ことを奪ふゐあらねども。守の仰推辭かさくて。ゐれ村長をうけさまいり。かくい時めき花やぐを見て。恙むい世の人情。されゞゐや善吉い。父善三ゞ墮弱ゐて。家い衰へ。村長を。執うしあいをし事いおもいぎ。竊ゐれを恨るゆゑゐ。この誣言をおすゐやあらん。されゞとて。一鄉聚合し席上ゐて。わゞ子を拐兒といいれてい。馮司ゞ官榜も汚るゝ惡名。そゞまゝゐい聽しゞさしやよ善吉。汝昌九郎を斥て拐兒といふ。正しき證據ゐる事歟。詳ゐこれをいへ。もしいふ所胡乱あふゞ。この席おゞたゝせゞたし。後をたるり。と親と子ゞ左手右手より勢ひ猛く競

ひ苑をゞ。姨女房。里人等も目をあゝして。只手を握る汗とともに。出てかへらぬ一言を。いうに返ぶ。と危めゞ。善吉騒ぐ氣色もなく。あゝ夕まや上臺ぬし。正しく賊を斥ものと。證據あくてやゝいふべき。とくてあさへ。と手を擧て。外面をさし招けゞ。生垣の間とりある。乾稻の蔭に躲ひて。前より得と闚窺さる。お六も嬾て立出て。緣頰より繞入り。許しさまへ。と會釋して。遲也が間とりゐ坐を占れゞ。阿丑も共ゐ見うへりて。こゝ乙女う。とゞうりゐ胸うち騒ぐ親と子が。顏に燒火の夕もみぢ。うつ散うねし光景ゐ。善吉もとや曉りて。傍痛く思ふのみ。事問よしもおうりけり。お六と頻ゐ嘆息し。とじめをいへゞ主從あれど。父の後妻ゐなりさまへゞ。母は姉はと慕ふさる。ゐらいとまれ。病瘦ひし。夫を棄て親子もろ共。妻籠を逐電し。恩ゐ背きし仇人と。善吉ぬしの妻あり狹こ。こゝゐて環りあいんとい。夢ゐざも去ふざりし。既に親子の義い絶されど。一旦母と憑し人。姉と呼びたる人あるゐ。その非をあらすゝ父の恥。ゐが身の辱というゞうり。歎しく侍をども。いいで叶ぬ金の事。日月い暗きを照らし。正法い邪正を糺を。因果覿面脫をぬ罪障。誰をう恨みたまふべき。とひとりおちつゝ徐やうふ昌九郎が間とりゐ居より。やよ村長の息子刀禰。とふいと面をあゝしていい陳じたまふゐ

辭いゐふ去。おん身いきのふ野上へ來まして。わをい善吉ゞの竹馬の友。去うも鄰家ゐ住居をる。彌太八といふものこ。善吉みづうら來べうりしゐ。狹ある人身まかりぬ。後のと何くれと錢あくていいとゝ便あし。いぬる夜領まゐふしさる。百五十金を返してさべ。手形い即これ櫛ありとて。櫛と金をかえ〳〵ゐ。といいせも果ぢ昌九郎い。眼を瞪らし席を拊。舌長き衒妻が。間ざいさり。おしらへさり。肖たる人い世ゐ往々あり。ゐれい生をし七夜の比より。昌九郎と呼るゝのみ。彌太八といふものをしふぢ。況て櫛とうえ〳〵ゐ。善吉ゞ管たる。金を略奪しとい。迹もあき証言あり。女子ゐ似げあき大膽不適。善吉ゐ憑をたる歟。汝一己の所行ゐいはらじ。及ゞぬことぞ首伏せよ。と聲高やうゐ罵をゞ。お六い莞示とうち笑を。かくまでゐ伎倆ものい。氷をもて炭といひ。石をもて玉ともいいん。よしや人をゞ欺くとも。欺きゞさき天の冥罰。かゝるべしといをふぢして。きのふ拾ひし物てそれ。思ふ所あるゆゑゐ。善吉ぬしよもいまゞ告ぢ。まづこれを見て欲よ。爭ひたまへと。懷より。一封の艶簡をとり出し。宛名いすあいち。九郎のぬしへ。密ゐ見たまへ。丑よりと。讀も終ふぢ昌九郎ゞ。それを。と出を手首拂ひて。善吉よ投與るを。中ゐて奪ひとふんとする。阿丑を磯と衝除て。善吉艶簡をおし

開き。首より尾まで。高やうゐ讀毎ゐ。人も呆き。ゑきも呆きて。舊のとく卷りへし。原來阿丑いこの年來。昌九郎と密通し。件の櫛を盗みとりて。密夫よこきを與へ。お六よ領しゑゞ金を畧奪せし伎倆い件々。この文面ゐて明らかあり。妻の胸ゐも白刃あり。親戚の腹ゐも碓石あり。現おそるべき人てゝろ。ゑきもし才女の翼を獲ぎい。奸夫滛婦の手ゐ死ん。嗚呼危きうあ危うりしと。只管ゐ嗟嘆しつ。思ひ捨てもやるかさおき。遺恨をさこそと推量る。里人等い目を注し。舌を卷ておそるゝよぞ。昌九郎い席よも得堪ぎ。竊ゐ逃んと云さりしゑゞ。馮司い矢庭ゐ跳梁て。頭髻を掴ゑ膝よ引着。やをれ昌九郎。世俗の常言よ。身の中の腐るゝと犯。えやく殺舎ざれゞ。その毒骨ゐ入るといふ。實よ汝ゞ事ゑりし。村長の子と生ゑてい。物の善惡を云るべきよ。親族の妻と奸通して。剩金を掠とりし。その罪いづゑ輕しとせん。かく殘忍の癖者を。ゑゞ子なりとて走ふせんや。覺期せよ。といきまきつゝ。又數回打懲せゞ。遲也も阿丑ゞ項上捉て。涙と共よ聲をふるいし。人あらぬ心よも。羞をゞ云るや犬自物。道ゐ迷ひし。女兒ゐ迷ひて不義滛奔を。云りつゝ親ゞゆるせしゑ。と善吉ゐ思われてい。五年留守せしかひもあし。おもへゞ憎し朽をし。と拿さる腕も痿癖るゝ可。寶子ゐ額を摺着て。燃るい胸の早祓

や。拳をあげて打んとそるを。お六いやをら遮りて。やよ俟さまへいふとありと。禁る人よ身を羞て。遲也も忽地頭を低。阿容〻〻と手を歛をゞお六いこれを見ゑへりて。舊き緣しある人よ。恥かゝやうそいてゝろゐぞ。云られども彼艶書を。面り出さぎい。白し黑しを誰ゑいを くべき。善吉ゐしも聞さまへ。抑きのふこの密夫ゞ。彌太八と名告りつゝ。金受とりて歸るとき。迹ゐ遺せし物あり〻り。拾ひあげつゝこをを見るゐ。ふゑき伎倆を書載さる。男女の密書あり。原來今歸りしい。善吉ゐしの使よあらぎ。詐欺をゐき。とやゝ曉て百遍悔千遍悔ぞ。と や時過て逐ふふよしあく。ひとり物を思ふ折。善吉ゐしゞ來さまひて。櫛を家廟ゐおきたる隨ゆふべ鼠ゐひゑをしと。ゑびたまふを聞とえや。ふみのゐしをもくせ者をも。大ゑさいすいし侍をども。しかろ〳〵しくことを洩さい。彼金つひよとりえゞさしと。慮りてきのふいいず。只しか〳〵と謀しあいして〻ふのまとゐを闕まみつゝ。偖よ賊をみしるゆへゐと いり賣ても猛々しく。却てわらいを賊ゐりと。のゝしらをてい術もあく。蹟とゞめたる水莖ゐ洗ひ流せし妹脊川。さゑりあいゐよしあしのやゐあらいれておのゝから。身の濡衣いをし たれど。こい已とをゑざるのみ。快しとい思ひえべらぎ。父の爲ゐい恨あり。家の爲よいあゞ

ありとも。稚き時ゐ孚れし母と呼びたる人の女兒と。つみあいして何かいせん。善吉ぬしの心もて。そのふみと彼金と。迭代ゐ怨をすて丶。舊へおさめて給らば。此上へのおき幸あらんと。事をわきたる才斷ゐ。遲也ひやうじいふもさらん。里人しきりゐ感賞してみゐ一しくゑひするゐぞ善吉且く志思して。いれも事を好むゐあらぜ。まづうの金を返したまへ。去りして後ゐ術ありと。いふよみゐ歡びて。迭よ耳をとりういし。軈て馮司ゐ耳語ば。馮司聞てうち点つき里人過半のこし留めて昌九郎をきびしく譴らせ。八九人を將て遐しく。外面へ走ゑ去り。旦して立歸り。懷より財布を出して善吉ゐ與ひとりゐおき。面目おし蚕屋ぬし。近ごろの連歌よ聞く倫兒をとらへて見れいわが子とい馮司ゞうへをいふゐ似たり。見ふる丶如く里人等を將て。某宿所へ走ゞ歸り。彼此と索しゝば。昌九郎ゐ葛籠の底よ。果して金あり。彼ゞ奪ひしものゐるべし。員あらためて納たまへと。いへば善吉手ゐとりて。財布の色に認あり。ゑうらば金をと封皮おし斷てひとつ〳〵よ數へ果。神妙い上臺ぬし。百五十金數もたかいぜ。一鄕の長たるもの誰もかくこそあるべけれ。われも又男兒あり。報をせんと。身を起し。阿丑ゞ肘引立て。昌九郎ゞ肘とりゐ推をへ。相罵りて好文おし。夫婦の緣しもゝふ限り離

別の狀と。手ゐもてる。密書を撥と投與へ。やよ上臺ぬし。これを何とゐ見さまひさる。野ゐ主おき駒あれい。馬飼得てこれを畜ひ里ゐ夫おれ婦ゐをい。媒妁得てこれを嫁ちば。今善吉ゞ乘〻る妻を。村長拾ふてこれを養ひ。軈てその子よ妻し給まいい。ゞ娘もよるべあり絶て恨ゑあれものをと。いへい衆皆進を出。善吉いしくも謀りたもふよ。膾なふい酢で啖ふべし。男おれば氣て喫ふべし。世ゐ妻を竊るゝもの。妻敵擊を男子といいへど鼻毛よまれし譏りい脫れぜ。見るにゑましていと廣き胸の海邊よ浪風さゝせぜ。されいうちミを捨小舟中て碎て密夫よ。乘れとい實よ甘心〻〻。おし量をい娘御前も心くるしくありつふん。阿丑刀禰ゑとまれりくまれ娘を追ふ善吉よあふねど今更おん身も阿容〻〻と。この處ゐい居ゞさかふん。母を持參の新婦御寮昌九郎ぬし受納したまへ。ゐあめてさしと。散動共。奸夫淫婦い頭も得擡ぜ。馮司遲也い傍痛くて應ざに得せざりしゝい。善吉これらを見ゝへりて今里人のいる丶如く元來娘御よ恨なし生涯養ひ進らにべしと。思ひして丶ろい轉さねど。この件の事よつきて。賴護おぼしなば。わりなくい留めがさし。只一トをちよなれ母の志を果さんと思ふゞ故よおん往方を。此彼とさづねしも。一朝の苦心よあふじ然に今ゝくゑくりあく。背ゐ

ハしゐるまでゐ。事いて來しも皆金ゆへ。と思へバ貨も何クハせん。償物を案ぜるにそれゞし遊里の小厮となりて。ゑろゑ道より獲さりゝる。その金をもて裏さる家を興さんと思ひしゝバ。元祖の神靈受たまハぜ。妻を去り妾ゐ別るゝ其源ハけゞれさる。金ハ我ゞ身の仇人あり。もし今より善吉よ。養るゝをいとひたまハゞ。この金を進らにべしこれもて生涯をともゝくも送りたまへとねんごろに。説諭ゝ。誠見えてや生垣のあさ俄頃よさゑゞしく。松山興惣ハ鵜太郎を。引そりあゞら。庭口より。禹歩ゐ走り入りて。緑頬ゐ撲地と引すゑ。あるじ善吉ゐ物申さん。ゑれハ旅店興惣あり。昨夕ゐ六ゞものかさりゐて。和殿のうへハ詳ゐ去りつ。よりてゐ六が乞ふゐ任し。竊ゐこゝへハ遣したれぞ。彼ハ女流の事あれバ。いと〳〵心もとあくて。迹を追ひつゝ來る程よ。ゑれよ先さちて外面よ。内を張ふ癖者あり。ゑゞの足音ゐ驚て。見かへるとゑもじめて去る。いぬる夜いさくいひ懲ふして。退さあちさる鵜太郎あり。こゝろ得かさく思ひしゝバ。矢庭ゐ捉て動せぜ。且く樹蔭よ竊聞て。和殿の誠心ゐ感佩し。知己ゐあふん爲。途より齎物の光棍を。娘御へ贈る興惣ゞ寸志。と演るを聞て毋遲也。奈鵜太郎とハわゞ子の乳名。三十年來心ゐかゝりし。それゝ。わふぬゝ。とぞりゐ。寄ふまくそるを善吉ハ。推禁て興惣ゐ對ひ。その名を聞くもきのふゝふ。まゞ変參せね松山阿爺。善吉ゞうへを思ふて。みづゝふ來ませし好意ハ。歡び言葉ゐ竭しがさし。縡の清濁忽地わゝれて。不思議ゐ耻を雪ると。皆是お六のたゞけゐよれり。まづこあさへ。と手をとりて。上坐へ請するゐぞ。鵜太郎やうやく頭を擡。幼稚とゑ棄ふれても。親とおもへバあつゝしき。毋の歎きも妹ゝとも。彼處ゐ聞てもじめて去る。わきあゞらこの年來。ゑろゑ事ゐハ才長て。十二のとゑゐ主の金を。盗ゞとりて逐電し。信濃路ゐ成長して。光棍の大將軍ゐ。ありゝ果せし身の惡業。父よりゝ恩高ゑ。外父の子ありける善吉を。それとハ去ふで途ゐ苦しめ。剰舊主の家とハ去ふぞ。野上の宿ゐて奸計。馬々ゞ狂ふて捕ふれ。罵懲されてゝ遠くハ去らぜ。人の寶藥を張ふて日間賃よせん。と彼此の。里と渉獵てけふこゝで。隠さゝび舊主ゐ捕られ。とうふぞ聞けバ妹ゞ淫奔。もじめて認る毋の顔。善吉ゞうへさへよ。贈の潰るゝ事バゝり。人の態見て我態の。今さら悔しく羞しく。こゝで心を改ぜハ。様の抄よ梟られあん。と思ひうへせバ忽地よ夢の覺たるこゝちして。置ところあさ五尺の身體。只願くハ善吉ぬし。從弟の好よ道ぞから。犯せし罪を許したまへ。毋ゑ女弟けふあふて。々ふハ則一期の別。あさ身の後ハ一遍の。回向去てた

まれれと。涙とともよかさ口説。衝と立て縁頬の。柱よ觸て頭を碎き。自殺せんと去たりしゝ
バ。吐嗟と驚く母妹と。共ゝ里人立騒ぎ。背より抱き留をバ。おゆ死んとして走りよるをやう
やくゝ推すえたり。善吉ハこれを見て。三十餘年の非を去ふバ。さもあるべき事おがら。俄頭
の發心こゝろ得がさし。願ふゝ汝この金を。配分せんといふを聞て。ゝをを誘ふものあるべ
し。去うふバ望ゝ任してとちせん。金ハ一百五十両。三よゝうちて一ッハ狹へ。殘る二ッハ鵜
太郎阿丑。汝等ゝ與ふるぞ。同胞こゝろをひとりゝして。親を養ひまゝらせよ。といひつゝ金
を投與をバ。手ゝもとふれず親と子ゞ面をゝして息を吻き。五年ゝまり苦沁せし。金一枚
も身ゝつけぞ。賜るとてうけらるべき歟。おいこのまゝゝと推返をを。善吉ハ又搖遣りて。さ
れバ盜よ。糧を齎す世の常言。勞して功おさ善吉ゞ。惜る物を與んや。悟をバ黄金も瓦石ゝ等
しをを推辞ハ某ゞ志を去ふぬゝ似たり。一文不通の吾儕おれど。世の貨といふ物ハ只善
心よとゞまれり。とゝ、ゝ昨の非を去れバ。物もさぬこそ身ハ清けを。されぞとて故おくて
金をとらするとゝ思ひそ。阿丑ハこゝゝ罪おれども。五年貧乏家を守り。鵜太郎ハ偽ゝりと
も。失を悔ひ親を慕ふ。この孝ハ賞そべく。その勞も亦賞にへし。といふも則姨へ孝養。兄も

妹も念をうけゝる。金おらぞや。と説示して。遂よふたゝび見かへらず。松山與惣ハこをを見
て。腰おる扇を颯と開さて。善吉をゝふぎたて。儔罕おる大丈夫われはからぞもけふよをし
て。好友を獲さるゞゝ。歡びのゝまり嗚呼おれど。志を餅ゝ演ん。吾儕少より利欲ゝ迷ず只直
をもて質とすおれバ。一升瓢の一生涯。發跡る秋もゝし。されバ赤坂ゝ住わびて。野上の里よ
移住ゞ。させる親族もハいた。只一個の弟ゝるのみ。彼ハいと少さより。所縁ゝつきて相摸へ
赴ゞ。化粧坂の亡八なる。風流藪澤屋が女婿よゝり。養父の生業を承つぎて。白眉の長と呼る
ゝよし。風の便りゝ聞くといへども。わをハ彼が世わさりの。人ゝみゝらぬを厭ふゞゆゝゝ。
終よ一トさびも音耗せず。去うるゝ和殿ハこの年來。わゞの弟よ使れて。化粧坂よ在せしよし
昨夜れ六ゝ聞さりき。赤是不思議の縁ならぞや。つら〳〵と觀すれバ。人の世の幸不幸ハ清
と濁るゝよるゝもゝらす。譬バこのゝ六がとき。孝よして才おれども。これを去る人絶てゝ
けれバ。與惣が家の下女とゝりて。裝長さ衣も得着ぞ。又憐むべきとゝゝらぞや。人の家よ妻
ゝきハ。裏とけさる衣の如し。和殿もし捨さまハずハ。此女子を娶りたまへ。これ寇ゝ良緣
ゝり。吾儕媒妁すべきよ。といへバ善吉うちほう笑み。數ゝらぬ身をかくまでよ。思ひよせて

たまいるい。歡ぶべきことあざふ。駿馬い畝畝よ駐らぜ。わゞ身の德をとからぜして。かゝる賢女を娶ゐ。バ世の胡慮ゐありもやせん。と推辭ゐ與惣い頭をうち掉り。いゐ謙退も事ゐよるべし。この夫よしてこの妻あり。赤繩の係る所い。推辭とも脫れがたけん。吾儕元來子を舉ぜ。妻ゐさへ後れつゝ。よるとし涙のうち悲しきゐ。今ゐ六を養女として。和殿ゐおれを配するときい。雨中ゐ杖を獲たるがとし。ゐ六が意いかゐぞやと。問バ急地顏うち赧め。然同胞もあき身ゐい。何かい嫌ふ事のあるべき。善吉ぬしざゐ。諾ひさまいゞ。ともかくもと應しかバ里人等又散動て。あゐめでさ。出船ゐをバ入船あり。盃あれバ銚子もあり。しかもけふい黃道吉日。目今婚姻したまいゞ昌九郎ぬし阿丑どのも。いよ〳〵後易かるし。とく〳〵と誘引立て善吉阿六をびとつゐをふせ。又昌九郎と阿丑をつどへてこの兩夫婦を祝しつゝ。とりあくも婚姻の盃をとり結し。與惣ゞ訛たる今樣ゐ。千秋萬歲と歌ひふさめけれバ。馮司遲也等い。やうやゝ安堵つゝ。善吉與惣を敬そると。君父のほとりゐ侍るが如く。いと傍痛きまでゐ。諂諛の辭を迎更よ里人を勞へバ善吉い人の親の。こゝろを猜して絕て誇ゞぜ。迭よ恨を遺さじとぞ誓ひゝる。かくて又。遲也い與惣ゐ對ていふやう。ゐが子あゞふ鵜太郎い。幼稚き時別

れしらバ。何事もをふぜ侍りし。をりるゐけふゆくりあく。彼ゐおふのをあふで。ふん身い又彼での爲よ。舊思高き主あるよしを。聞く事毎ゐ面あく。まうす言葉も侍らねど。この歡びの折をもて。舊惡をゆるしたまへうし。と勸解ふけをバ。馮司もこれを執あいし。現人の親の。こゝろい悶ゐあふねども。子を思ふ道よ迷ふとい亦是人のうへあらず。吾儕ゐ男女兩個の子あり。家子いすあいち昌九郎。次ある女兒を工虫と呼びしゐ。これゞ六の歲の夏。多賀祭祀よ將てゆきたる。

途ゐて人ゐ奪ひ去られ。今ゐその存亡を知らず。かくて一個の男兒い。家の柱と愛慈をこゝろのまゝゑ育る程ゑ。十年已前ゐ母い身まうり。いよゝまに〳〵敎と餓し。恩愛ゑ子の仇とゐりて。かゝる恥辱を堪忍ぶ。親の愚を外目ゐい。いひかひゐくぞおもいをん。もし子を持て善吉が如くもあらばいうばうり。身の幅廣くあるべきゐ敎うさきい人の才。まうせぬものとて壯佞の。浮をでゝろい疎しと。いへば遲也も嘆息し知ばし辞を失ひつ。かくて馮司い。善吉與惣等ゐ辞別して。ひとり先ざち歸去まで。昌九郎阿丑等い。絶て一言物をも得いいを。背向ゐなりてゐさりしが。里人等ゑ誘引を。遲也もゐ共盗むがとく。金を袂ゐ掴入れ辮ゐ離れし鵜太郎も。やうやくゑ立潮を得て。懐を押へつ里人ゐ。うち雜り母の後方ゑ徒ひて。門までい出されともとや何處へうにげさりけん。この後い親をも訪いを往方も知れをありゐけり。さる程ゐお六い知ばし衆人の歸り去くを目送りて。とじめて吻と息をつき。善吉ぬしの妹なれどもいと遏しき老女にこそ。さるをなゐ曉らを。ひとりこゝゑ羨さまいゝ又禍を惹きやせんと。思ひやりのをして侍りおん身い何とか見さまひさる。さきゐわふいが稍久しく彼處ゐ闕窺侍りしとき。酒宴の最中ゑて賓ざねい多かるゑ。妹御前い村長ゐのを。浮るやうゐて賓い浮を馮司か盃をとる毎ゐ妹御必酌をして。外目い沃がごとく見せ。その底意い村長を醉せじと思ふにあり。且その物いふを聞侍るゐ。敬するゑ似て愛こもり。疎ゑ似て親み深し。これ等により推量るに。妹御も村長と情由ありて。おん身を倒して其子〳〵を夫婦ゐせんとてもろ共に。櫛を盜せ彼金を略奪せしものゐるべしみをら忘し給ひぬと。信ざちて密語ば。與惣も傍ゐうち点頭お六ゐ眼力極めてよし。地をうつ鎚い外るゝともこの事い違ふべからず。霧ある花い人を歡せ刺ある魚い汀ゐ寄る。骨肉ありとて親まば毒惡の手ゑ陷るべけれまず〳〵心を放りたしと諫れい善吉い拱さる手を釋ていとるゝ所他事おけをども世ゐある人のさのしこい。親族常ゑ交加て。足ざるを補ひ窮しきを賑し迭ゐ扶助られ。事ふとのおゐらんのを。をかるを吾儕不肖ゐして妹ゐさも憎まれおば。只手を束て害を受おん。況てその事著ならを。推量ともて妹を疑ひ。讐敵の思ひをあさば人又わをを婆といとんや。外ゐ洩しさまひそと。回答てとりもあいざれば。お六與惣いゐ[illegible]さま〳〵ゐ諫めつゝ妹御いとまをかくもあを。上臺親子い毒石おり彼等既ゐ衆人の中ゐしていさく耻辱をとりおから陳ぎるゑ辞おければ。阿容々々として歸るといへども。いかで害心を含さるべを。もし後ゑ事ゐ觸れ。

村長の權威もて。陷るゝ事あらば。臍を噬とも脫れがさけん。彼を思ひこれを思ふゝ。おゝゝ在とい甚危し。まづ野上まで退きて。且く毒氣を避さまへといふ。理あれゞ善吉いやうやく承引て次の日遲也阿丑等が櫛笥夜具なんど。にべて彼等が物と名けさるをば。皆ひとつよしつ。人を雇ひて。馮司ごの宿所へおくり遣し。且他所へ移住の由をつげ。些の田園をば人よ管けて耕さし。家いいとふりされば。これを售て身かろく打扮。更よ里人ゝ別を告。與惣お六ふゝ伴れ里を出んとする時よまづ。父祖の墓へ詣で花を折そへ水を沃ぎゆくりなく家の難ゝ。已とを得ゞ且く美濃路へ赴くよしを意中ゝ遁。坐ゝ涙ゝかきくれさる。孝子の歎きを推とかりてお六も共ゝうち念じ。夫婦與惣ゝ誘引れて。野上へゞ赴きける。かくて與惣い善吉をい。と信やかよ慰めつゝ。親み子よりも深かりしかばお六いさらなり善吉も又與惣を。主の如く。親の如く敬ひ冊きて。今茲いてゝよ暮しゝゝり。されば與惣い善吉をあゞく留んとおもふ物からお六と遠く謀をもて馮司親子をふかくおそれ。この所もあは二夫川へ近かり。岐岨路いわらいゞ故郷ゝとべれば。夫婦ゞ身れ暇をたまいせ。ともかくもして両三年を。彼所ゝ送ふく待らんといふゝ。善吉も又岐岨へ赴んと乞ふとゝ乞ふとゝ〳〵あれば。與惣い竟ゝとゝめゞたく

て些の本錢をとらせしりば夫婦歡びて月ごろの庇を謝し雪もやゝ消さる頃野上を立て岐岨ゝ赴き。道次なる白屋を購得。でまづ膝を容たを共元來思ひ決たる生業もなし。去うるよ。善吉稚さより細工をこのみ。またとからずもお六がたそけを得て殃危を。脫れかく眞緣を結ぶ事。その毋の像見なる。櫛が媒妁さるなり。かれといひ此といひ。大方あらぬ因緣なれば木櫛を挽て賣んとて。夫婦これより力を戮し。善吉い日とあく夜とあく。櫛を挽てお六ゝを賣そる程ゝ。京鎌倉へ往來そるもの。殊更ゝ珍重し。うゝる山路の土產ゝい。こをゝまと家苞なしとて。お六櫛と呼びなしつ。一人として買ざるなけをば。京鎌倉いへばさらん。その名彼此ゝ高く聞えて。活業こゝよ繁昌し。僅三年をりゞ程に。もさけき人ゝなりにけり。去ゝれども善吉お六い。聊もとじめを忘をを。常ゝ野上へ消息して物を贈り。月として與惣ゞ安否を。問ざるとなく。日として亡親のとを。思いざるときもなく。折を得ば今一さび。相摸へ赴きて。白眉の長ゝ見參し。且與惣と白眉と。兄弟和順なさしめて。受さる恩ゝ答んと。思ふのをまて世をさりゝ。暇なけをば默止々り。嗚呼賢なるりなこの夫婦。進ひとゝい孝をもてし。退くとさも忠をもてし。財を獲て財ゝ迷いを。こをを散して更ゝ富り。行狀奇ゝして妙な

らぜや。うれゐさふで上臺馮司ハ。世の人の讒をおもいで。昌九郎ゐ阿丑を妻し。ゑご子の妻の母あれバとて。遲也さへ迎とりぬ。されバお六ゞ猜せしゑ違ハず。馮司ハ遲也と情由ゐをバ。善吉ゞ家を售て。美濃路へ退ゐさるを。竊ゐ歡び。遂ゐ憚る氣色あく。遲也を妻と呼び。良人と稱られ。子どもハさふゑ。親も又淫樂を事として。こゝろまゝ〳〵驕る程ゐ。蠹ゐ善吉が。遲也阿丑等ゑとらしゑる百金ハ。只一年ゞ程ゐ。氷の如くつゝひ失ひ。剩善吉ゞ田園を横領して。酒肉の料ゐ貪をども飽ぜ。里人等ハ。苛く責使をて。課役ゐ苦み。頭ゐうらを憤るのみ。樓ゐおそれていふものあし。かくて兩三年過す程ゐ。馮司ゞ世帶やうやく傾き。驕らんとするゐ錢あけをバ密ゐ冒九郎と謀りつゝ。里豎處あるふりゑる杉を。夥伐らして賣てゝり去うるゐこの處ハ。番場と封疆を相雜へて。法華堂の境内なれバ。僧侶これを咎て。訴ゐ及びしうバ。當國の守。佐々木近江判官滿信の郎黨。多賀郡司承りて。綜の邪正を糺明するゐ。馮司昌九郎等ゞ陳する所。すべて理義ゐ稱ぜ。忽地ゐ罪かうふりて。馮司ハ村長を召放されしうバ。由人等ハ稻ゐつく。蝗の虫失たる如く。歡ぶと限りあし。さて何人をう長ゐせんとて。由緒あるものを穿鑿せふるゝゐ。原二夫の村長をバ。蚕屋樂善といふもの。數世承りたりけるゞ。その子善三ゞ年少きよしをゆうして。從弟あれバ。今の馮司が村長ゑありてしひき。去うるゑ彼善三が一子に。善吉と呼るゝもの。今見ゑ岐岨にあり。彼ハその性いと老實あるものにしへバ。召かへして村長を。仰付らるべうもやゝ。と里の老どもゞまうすゐぞ。滿信こをを聞、たまひて。そのものとく〳〵召にべしとて。嫌て善吉を召さをける。うゝりしかバ善吉ハ。思ひもうけず。守の下文到來し。又野上なる。松山與惣も。脚力をもて。馮司親子ゞ頓末。此度の吉事を告ゑけをバ。お六とともゑこをを見て。且驚き且歡び。店をバ老實ある小厮ゑ守らせ。夫婦ハ猛ゑ行裝去て。近江へと歸る程に。日を經て野上の里まで來ゑけり。この日與惣ハ里尽處ゑ出迎へて。迭ゐ恙あき。再會の歡びを述。直に宿所へ誘引ゐぞ。この夜ハ野上ゑ足を休め。次の日善吉ハ。衣裝を整て。多賀の陣所へ參りしうバ。郡司對面して。二夫の村長ゑなしたまふ旨を聞え去らし。守の仰をつたへしうバ。善吉感謝ゑ堪ぜして。おそる〳〵言受し。且く野上へ退きて。與惣お六等と談合し。舊住ひさる田とりへ。新ゑ家作して。吉日を卜つゝ。二夫へ移徙去さりゝる。事の爲体。ゑしめゑ似るべうもあらず。上臺親子ハこれを見て。いと目ざましく思ふゐも。娼きと限りあけをバ。いうゑも去て。善吉を推倒し。昌九郎を村長ゑせ

んとて。遲也も膝をつきあわし。阿丑も顎をまじへつゝ。昌九郎もろ共ゐ。毎日ゐ密談すると いへども善吉い。村長を命せられしろの日より。守を敬ひ。里人を憐むゐも。親疎ゐよりて私 せぢ。一点バうりも失ゐけれバ。奸智ゑ肥さる上臺親子も。その隙を獲がたくて齒を切りつ ゝ下風ゑ立。怨を隱して日を送りぬ。夫吉凶い絢る索の如し。吉もいまゞ吉ゐあふぢ。凶もい まゞ凶ゑあらぢ。誰か塞翁ゞ馬ゑあいざる。天福天禍既ゐ時あり。況て人の作る所。吉凶更ゑ ゐくべくらぢ。善人の福い。惡人の禍なり。うゝる故ゐ。賢者の歡ぶ所。不肖者いてれを憂ひ。 智者の譽る所。愚者い必毀る。畢竟馮司昌九郎等。又いかなる奸計をゐす。そい次ゐ解るくる を見てゑらん

青砥藤綱摸稜案後集卷之上終

青砥藤綱摸稜案後集卷之下

曲亭馬琴編次

○二夫川の拾遺

夫を孝い萬善のもとじめ。百行の元といへバ。何事も此孝道を以て。心ゑ治め得れバ。其爲すと ころ孝ゐらざるいゐく。仁義禮智信五常の道。君臣父子兄弟夫婦明友五倫のまじいりも。皆 是孝道よりもとじまるゑ。されバ古語ゐも。孝悌也夫れ仁を爲すの本かといゝしい。全く此孝 道より起るものゐり。ゆへゐ孝子いみづうらもて孝とせず。人これを稱して孝といふ。うゝ る也ゐ。學ぢして行ひ道ゑ稱ひ。圖らぢして功天ゑ尊し。身を立て名を後ゑ揚。もて父母を 顯すを孝の終といふゐこそ。さをバ盃屋善吉い。憂苦の中ゐ人とありて。或い鎌倉に漂泊し。 或い岐岨路ゑ流離ひしが。到る所幸多くて。事を成さぢといふとゐく。剩守の召ゐ應じて。舊 里二夫へ立歸り。村長を承たまいりて。父の爲ゑ耻を雪め。はうらぢも宿願を果す物かゑ。上

蓋親子動すれば。その隙を窺ふて。笑の中に刃を隠し。耳を側目を張て。露ばかりも失あらを陷れんと計較よしをお六いとやく猶せしうば。とおかく心安らふで。をり〳〵良人を諫る程お善吉もとづうら御ぎて。公事よあらざれば。憑司昌九郎とものいいぞ。途よもきおふとおりても。見ぬふもゝちして過りしうば。上蓋親子います〳〵恨て。這奴表皮よい賢人顔して。阿丑を離別ゑたりしい。孫てお六と情山あるもゑよ。失を幸よ。婦を換んと思へばあり。又失ひさる金をとらで。さま〳〵お名をつけつ。遲也親子お與へしい。妖を售べき爲あれど。里人等い底意を曉らず。よき人ありとおもひあして。只管よ這奴を薦め。村長お云さりしかば。忽地お高ぶりて。人を見ると芥の如く。おあじ鄉おありあぐら。嫉の安否を問ざるい。そじめの言葉に齟齬て。阿丑とえうねく思ふ故ゑ。這奴いともあれうくもあを國の守も守ぐかし。よしや先祖が村長ありとも鎌倉まで流涙て。遊里の小厮とありたるものを。鄉にい人のあきごとく長にしさまふいいのおぐや。若虛々と日を送ふば這奴が爲彈おをて。おお辛きめを見るとあふん。先んぜれば人を征し。後るゝとき征せらる。とやせまし。うくやせましと。明暮思ひ煩へども。行ひ正しき善吉夫婦を誣ひべき便りあき儘よ。遲也阿丑諸共お。瞋恚間斷

あれ角文字よ。いとゝ心のゆゞみ文字。いく夜頭を碎きても。謀略を得ざりしうば。憑司又思ふやう。よくもあれもろくもあれ。世間の人こゝろ。にべて權威お附ものあれば里人等い憑みうさし。一且長と止ふるゝとも。多賀殿よもろく思いをぞい。舊お復るともあるべしえう。ありゝ。と獨点頭。密やりよ昌九郎等お。思ふよしを說ゑふし。これよりして親子かいる〳〵。多賀の陳所へ赴きて。常よ郡司の安否を問。又その下隷等お。些の東西を贈ると。期月よ及びよけれど。絶て善吉ゞ蔭事をいいぞ。只おのゞ法華堂の木を伐さる事をのみ。悔おげくふもゝちせしうば。郡司いこをを實情として。竟お憐むこゝろあり。加旃善吉い。村長をうけさまいりても。守よ媚ぞ人よ求めぞ。公事おあらざれば。多賀へ參るとをせず。まいてその下隷おんぞよ。故おく物を贈るとおけをば。憑司ゞ村長ありけるとゑより。いさく劣りぬ。と思ふものも多うり。さる程よ善吉い。年來の志を遂て。ふさゝひ故鄉よ歸りよけをぞ。妓姐お貰弘めさる櫛もえうをがよ。棄ゞさし。と松山與惣ゞいふよりて。店をば小厮よ守らしつゝ。これをば與惣よ任せしうば。をり〳〵彼處お赴きて。損益を勘るよ。夫婦ゞみづうら賣さるとゑよい。似るべうもあらざめれど。善吉い父のときよ。失ひさる田園を。大うさい貲復

しつ。足るとを去るをもて。これふの可否をゞ敢問ず。今一さび相摸へ赴き。松山與惣と白眉と。兄弟和順の事を謀りて。受さる恩ゐ答ん。と豫て思ひし事を果さぢ。これのみ遺憾けれども。村長よありての後ゝ。私よ旅行ゝ去ゲさし。こゝろゞゝりも傳んとて。ゐゲうへゐ六ゲ事ゝさらあり。爰よ與惣ゲ赤阪より。野上へ移住さる事。且もくりあく彼人の恩惠を受さる緣故。與惣ゲ志さへよおちもあく。書寫し。親のあゐ後ゝ。只同胞よまにものゝあふし。況や齢傾きて。一子ざよもあゐ舍兄と。胡越のおもひをあしさまうゝ。いと歎くべゐ事あふにや根を忘をさまゝ去ゝ。ともかくもこしらへて。和睦の事を謀りあん。この事年來心よかゝれど。箇樣ゝゝの故をもて面りゐゝ演うさし。華洛めぐりを兼さまゝゝ。趣ある旅行あるべし。枉て此方へ來さまへゥし。と叮嚀ゐ竜ゐいゝして。化粧坂へ遣ゑ事。ふさゝゝび三さびよ及びゲり。時よ弘安八年春二月。池の氷の氷解て。人の心も弱柳の。いと伸やゲゐありし頃。有一日お六ゝ生平ゐもあふで。早飯の著を得とふに。物おもゝしく見えしゥゞ。善吉これを訝りて。何事のこゝろよかゝりて。今朝ゝ天のみ瞻仰さまう。吾儕おん身を娶ゝしより。あゑと毎よ成就去て。かくまでゐ發跡さる。こゝ全くわゲ身ひとつの。禍ゐゐふゐあるべし。おん身も又かくあるべき。福のあれゞこそ。不思議よ緣しを結べるあふめ。去りるゐおん身ゲ憂事ゐるを。告ふれぢとて樂しかふんや。去ふしさまへ。と叮嚀ゐ。問ゞお六ゝ歎息し。いゐ。させる事ゐゝ侍ふねど。疇夕奇しゐ夢を見て。こゝろよかゝり侍るゥふ。その事としも告ねども。とや色見えて訝しゑ。問せたもふよ何りゝ匿ん。譬ゞこの曉の夢ごゝろよ。地方を何處と去ふぬとゑ。ひとり曠野よ立在つ。と見れゝ前面よ川ありて。枕川と榜示を建さり。この川いさく氷りつゝ。鏡を盈さるごとく見もるゐ。おん身ゝ烏帽子裝束して。いと逞しゐ馬ゐ騎り氷の上よ馬を進め。北より南岸へ拍して。渡さんとしたまへゞ。氷ゝ忽地裂と碎て。氷二條よ流をつゝ。両箇の日輪氷中より。開々と晃ゐ出。亦氷中ゐ沒るとやゲて。人馬もろとも氷底へ。沈みさもふを救んとて。吐嗟と叫ぶわゴの聲ゐ。うち驚きて聲侍り。やうやくわれよかへをども。胸ゝ頻ゐ騒ぎつゝ。痞ゝいまゞ治ふず。つくゝゝと思ひあいそれゞ。五年あまり前の秋。おん身野上の松山ある。古廟の中ゐ假寢して。如此くゝの夢を見さり。とその比ゐふゝよ告たまひし。その夢と又この夢と。よく似さるこそあやしゥを。爰よゝ家艱あり。今又いりある禍のありもやそると只管ゐ。とさまかうさまおもへども。慰め難て問れずも。告ぢやと思ひ侍り

き。とんへゞ又善吉も。眉根をよせて歎息し。夢ゝ五臓の勞をゐあると。物云る人ゝいふめれど。彼松山の草枕結びし。夢ゝ正夢ゐて。姨と阿丑が良ふぬ所爲より。ゐをおもゝぜもこの里を。遠く離るゝ象ありし。去るゐ今亦吾妹子が。かゐじ夢を見しといふ。ゐれも心よとゝるへ。されゞとて後くら犯事をせぜ。人目ろうれとゝ祈ふぬものを。何を報よ何う祟ふん。いさくゐ思ひくしたまひそと。慰ふれてやうやくゐ。瘞押さる手を放べ。むうしより善人の。禍ゐあふ事もあり。身ゐ犯しさる罪ゐしとて。みづうら頼むべうも侍ふぜ。梓川のゐあさゐる梓村ゐゝ昔より。名さゝる神子のあるゐあらずや。彼處へいもきて夢を占さし。その吉凶を問んゐゝ。疑ひゝ頗ゐ解て。身よ係る禍の。ありとも御ぐ後盾よ。ゐるよしのゐうらぜやゝ。といへゞ善吉うち点頭。現おん身ゞ宣ふごとく。こゝゐて物を思ゝんより。彼處よゆゝて夢を占ひし。祓禊ゞ清潔さ。わゞ身ゝ則六根清潔。ゐす所の願として。成就せぜとん ふとゐゞん。吾僧みづうらゆくべしと。てとや立出んとする程よ。天俄頃よ結陰て。雨ゝさく降そゝぎ。春の嵐ゝ殊更よ。面を向くべうもあらぜ。霎時霽を待しゞ。やうやくゐして雲おさまりぬ。朗ある日の影ゝ。とや西へ傾きて。中哺よゝ遠くうらねぜ。けふとて思ひさちぬる事を。そゞまゝ

ゐゝ止うさくて。又遽しく出んとそれゞ。お六ゐ外面うち瞻仰。日影傾き侍りぬるゐ。道のぬうりのいとゞしく。暮ゐゞさこそ便ゐうらめ。々ふゐのみ限るとかゝ。明日ゆきさまへと禁ゞ。善吉頭をうち掉て。梓村へゝ二里ゐ近かり。歸るさよ日ゝ暮るゝとも。月夜ゐれゞ心やすし。とくいて來ん。と回答もゐへず。木屐の塵埃うち拂ひ。忙しく宿所を出て只管に走る程よ。醒井をとや過て。左手遊ゐ見うへゞ。今ぞ入る日れ夕照ゐ。春の色村暮そめて。花ゐ宿りをいそぐふん。武士とゝ見ゆれど從者をも供せぜ。前面より來る行客あり。近くゐるまゝ笠おし揚て。和殿ゝ善吉なふずや。と呼かけられて遽しく。この行客を見かへれゞ。是則別人あらぜ。穢よ善吉ゞ。化粧坂よゐりし比。彼空蟬ゞ嫖若ゐりける。二階堂家の若黨よ。井輕元二と呼をしものゐり。當下元二ゝ笠を脱て。別后の恙ゐさを祝し。和殿ゝ疑よ舊郷へ歸りぬと聞しゝど。こゝらわたりに在んとゝ。圖ざりゝろ再會ゐを。といへゞ善吉小腰を折め。某故郷へ歸しより。とや五年よゐりぬれど。世を さりよ暇ゐくて。化粧坂なる長をも得訪ゝぜ刀ゝよゝいゝゐる故ありて。ゝく忙しく只ひとり。何地へゝ赴さたまふてゝゝろ得ゝさくゝと詰ゞれ元二ゝうち点頭。されゞとよ。和殿ゐも去らるゝごとく五両の金を取らざりしより。强

顔うりける空蟬も。憎うらず歎待まゝゐ。あふ夜の數うさありて。五年といふ去歳の春。彼ゞ年限滿しかゞ。長ゐ乞ふて家ゐ伴ひ。婦と呼び良人と呼れて。懇愿い果しさり。ゑかるに彼空蟬い。年僅ゑ六の夏。化粧坂へ來ゑけをゞ。舊里の事いへゞさらゑ。親同胞の名をしらぎ。但護身璽の中ゐ。多賀の神社の神符ありて。産砂のおんまもり。と包紙ゐ書つけたるい。正しく親の手蹟あるべし。よりて年來人ゑ問ゑ。多賀の神社い近江ゐあり。特ゑ名高き大社ゑて。紛ふべうもあらずといふ。原來ゑゞ舊郷い。近江の多賀ゐやあらんぎふん。一トさび彼所ゐ赴きて。親同胞ゑ環會。よすがも欲得と。空蟬が。寤寐ふふ。ゑうち歎けゞ。いと憂つゐあれ所行あゞら。彼ゞ孝心痛しくて。將てもりゞやと思ひさち。東間の温泉ゐ浴す。とまうしこしらへて。主君ゑ百日の暇をたまわり。私ゑ妻を携て。鎌倉を起程つ。ゐ湯ゐい浴らで吾妹子ゞ。親ゑゐ。ゑゐふみへけふ入る折。思ひうゞあき驟雨ゐ。笠やとりせん擔もあし。妻をゞ馬ゐ乘されゞ。馬追ふをとゞがいちもやく。ゑれゐ先ざち走ふするゑ。追續んとて喘もゐへぎ。黒木の橋をゑたると。忽地妻を失ひて追へども〳〵竟ゑ得逢ぎ。和殿今來る通路。馬ゐ乘。て東より西へ赴く婦人を見ぎや。と問つゝも手拭もて。額の汗をおし拭へゞ。善吉聞て後方を見うへり。いあこゝへ來るまでゐ。馬座ゑさる人を見ぎ。馬ゐて走ふしたまひあゞ。今須の驛ゐて待べきゐ。彼馬夫ゞ柏原さへ。うちこえてゆくとうい。そいかあらぎ故あるべし。といふを元二い聞もゐへぎ。ゑわも云う思ふあり。こゝろも逼けゞ別れあん。途より來るを見さまいゝ醒井ゑと言傳てたまいれかし。といひうけて。飛ゞ似くゐ走去れゞ。善吉これを目送りて。おもいずも歎息し。仇ある戀も緣しあれば。たまゝ本意を遂ゐゞら。よしあかりゐる旅衣。妻をゞ尋ひとらゑけん。彼馬夫こそこゝろ得ぬ。ゑが宿所をも彼人ゑ。告てちうらを添べきゑ。こゝろいそぎのせらしかゞ。いふべき事をいいざりし。と遺憾しげゐひとりごち。恩惠忘れぬ五ひふの。黄金ゐもまに誠心の。とゞかぬ曲の梓川。流をゑそふてもく水と。人の往方い定めなき。夕の雲のたゞすまひ。春の寒さい堪がたき。風ゑ面てをうたしつゝ暮ぬ間ゐとおのがゆく。里を投てぞ走りゞる。案下某生更説上臺馮司い。善吉を推倒して。ゑが子昌九郎を。村長ゐせゞやとて。日として多賀へゆうざるとおく。專に假托て。郡司ゞ下隷の由乙へ物を饋りあどするゑ。利を見て人を愛するい。衆人の常情あるゑ。善吉ゞよろづ私おく。公事ゐあらざれゞ。多賀へもくとをせず。寵ゐ媚るとおきを。却憎しと思ふもあれゞ。惡司親子い只管員員

てをり〳〵。郡司ゐ吹擧せしゐゞ。好惡忽地所をかへて。郡司も又善吉を。よゐらぬものとをもひけり。去られども。限りある錢をもて。限りあき欲ゐ充れゞ。必しを尽る期あり。憑司等いえや大かさに。事成るべしとおもへども。只錢あきに苦そて。今茲二月のさ去めより。園宅額をつき。合しさま〳〵ゐ。商議するゐ。昌九郎がいふやう。爰ゑ〻大人の。村長を止られたまひしい。木を伐さる谷のみゐて。守へ對せし越度あらぬゐ。郡司ゐゑろく思いをぞい。亦村長ゑありたまひゐん。ゑ〻大人長ゑありたまいゞ。親の蹟い子が續ぐべし。去ゐるゑ勘ゐ。某を長ゑせんと。願ひたまふい迂遠し。よしや事成らぎとも。善吉ををゞゑ推倒さゞ。熱腸をゞ冷すべけをど。彼も此も錢あくてい。靴を隔て癬を掻き。湯をもて熟るを止るが如く。勞して功あき所行ゐゐそ。されゞ又彼善吉が。爰ゑ鎌倉ゑ赴きて。夥の金を獲たるを思へゞ。手を叉きて日を送ふんより。某夫婦彼地へ赴き。一年あまり稼了あゞ。ゐれ程の德いつきゐん。その金一トさび堂ゐ落らゞ。善吉を計らんと。袋乃物を取るより易し。さいあらぎや。とゆとりゐゐ。小膝をすゝめて密語ゞ。遲也阿丑いいふもさらえ。憑司い頻ゐ頷を撫て。こばるゝごとく莞爾と笑み。昌九郎が計策。訛得て奇あり奇妙あり。こい侍とゆきゑ似さをども。一舉して

事成らぎ。これゑまを捷經あし。とく啓行の准備せよとて。去のびゝゑ行裝を整。さて吉日を卜つゝ。昌九郎い阿丑を將て。首途せんとする程ゑ。この日い朝より。猛ゐ風雨烈さゐ抑留せられ。徒ゑこもりゐつ。霽時霽ゑを待しのゞ。時ぞや中晡ゐありて。日い西山ゑ斜あり。けふとて思ひさちぬるものを。ゆくといくゞくゐふぎとも直さゐ首途そべしといふゑ。憑司遲也も。まさこをを禁めぎ。春の日あれゞ目今より。柏原までいゆくべし。人ゑ去らせぬ起程あるゐ。夕こえて宿所を出るい郤是便宜あり。とく〳〵といそがし立ふれ。昌九郎い阿丑もろとも。がひ〳〵しく打扮て。背門のうたより走り出れり。當下憑司遲也い門ゐ立て。子どもらゞ背影の。木ゞくるゝまで目送りつ。少選くして裏ゐ入り。遲也い物をゐさよそるとて。遽しく憑司を呼ひさて。これ齊せ冒九郎ゞ。燧袋を遺をさり。ゐゐ鈍ましや。と詢けゞ憑司いこれを聞もあへぎ。燧袋い旅客の。去ゞしもあくてかあいぬものゑ。ゆく事いまゞ遠うふじ。いで呼び留んと。忙しく。燧袋を取る隙も。速や遲也ゞこゝろ得て。さし出す腰刀い。墓てかへさの犬威し。糸卷朝のさめごの井の驛を投てゞ追ふてゆく。さる程ゑ昌九郎い。婦を伴ふ起程なをゞ。急ぐとすれど時移りて。宿所を走り出たるころ。日い向暮とする程ゑ。只管ゐ丑をいろ

ぶして。二十餘町走りつゝ。醒井のあゐさある。梓川のほとりゐて。忽地ゑくふくゐりつ甲夜より出べき月あゞふ。天い亦結隠りて。朦朧ともゆく先もうねゞ。淮備の續松をとう出つゝ火を打んとて腰を探るゑ。燧袋いかりけり。こいいかゐと忙慌。阿丑ゑ問ゞ去ふぞといふ原來この續松を。醒井ゑて買しとき。彼所へ遺しるゐやあふん。ゆくべきかたい河原ゐをゞ。火を借らん家いあし。おん身い且くてゝゐ坐せ。いで一走ゑ走りゆきて。瞬間ゑ取て來ん。さいとて喘々つゝ。今來し路へ引のへせゞ。阿丑いひとり野千王の。夜川の風ゑ吹曝され。只沸ゑと詢況て。夫の歸るを待ぼゞゑ。と見をゞ河原の北方より。荒男とおぼし紀ゞ。手拭もて面を包み。惡獣い楚とわうねども。一個の女子に。猿轡を銜せつゝ。河原を南へ引摺來て。砂の上へ撲地と推居。いたく酒にや喫得醉けん。舌もまいらぬ辭をふり立。この銜妻ゞ轡の剛さよ。とてもかくても屠所の羊。得動ぞとて牽でやゆくべ紀。頃日の間のもろさ。打ゞ屑さを手を出せゞとらを。せん術あさの僱馬夫。輕尻追ふて日を送れゞ。皇天い人を殺さず。けゞの朝雨が媒妁して。乘して走りし玉をろの儘。間道へ外して伴侶ある。夫をうまくゞふらりし暮て物そる胸算用。些さりい過たれど。三年詰ゑい直のある貨物。あゆとあがを。と無手と拿る。かひあや人を呼んゑも。もの得いいをぬ猿轡。かゝるうきと身を外あゞら。阿丑い見るもいぶせくて。おをを避んとおもへども。路いと陜き一條の。河原い隠ん曲もおけれゞ。笠を翳して身を潛し。昌九郎ゞかへり來るや。今ゝ〳〵。と待といえらに。荒男い件の女子を。引たつるとておもいずも。右手なる阿丑を佶と見て。呵々とうち笑ひ。ひとり。物して又ひとり顔い定りゑ見えねども。身長いをふりと色白し。夜の河原ゑ只ひとり。立在い問でもそる。色情ゆゑゑ身を投ん爲り。さふぞいおゝゑ郎を俟。醒井をゑりの缺落物。こをさへ天より賜いそるを。取ふぞい却崇をうけん。迯おゝ〳〵と。走り蒐て。襟上無手と引爬ゞ。阿丑い吐嗟と叫びつゝ。振放さんと動ども。廳ゑ捉るゝ水鳥の。汀潛ゑ羽さゝく一生悪命。賊あり〳〵と。叫ふゑぞ。音あさてそ。と引よそる。その際ゑ件の女子い。逃んとをるを遣りも過さに。帶頭取て引もどす。折しもあれ昌九郎い。燧袋を索りね。火とのを借て歸り來つ。阿丑ゞ頻ゑ賊あり。と叫ぶ聲ゑ驚きて。ふり照を續松と。涙打際へ破落零と投乘。組んとをゞ荒男い。足を飛して昌九郎が。肚を破と蹴る。蹴られて叫苦と仰さまゑ。身を轉して倒るゝ所へ。喘々追蒐來つる。馮司いとやくも子共等ゑ。事ありと見てゝをゞ。矢庭ゑ刀と引拔つゝ。踏こをて荒男を只

一刀ゝと丁と擊刀尖狂ひて右手ゐる。女子が鵶五六寸。乳の上うけて砍倒せゞ。云とも得いゝぬ末期の一句。今ゞゐの世をさる轡。かけさる隨ゝ呼吸絶さり。荒男ゝこの光景ゝ。叫り狂ひて沙を蹴立。命の綱なる貨物を。結果れてゝ彼も此も。目ゝ物見せん。と小石を掴みて。蠢のごとく投うくをゞ。馮司もこをを禦ぎ難。頷を縮をて跟蹌と輾んとしておもいぎも。倒をしゐゞ子を蹂躙をゞ。昌九郎はこれゝ氣を得て。引拔刀を技ゐして。忍地ゐ身を起し。跳蒐て荒男ゞ小髮の際一寸ゐまり。砍れども擊ども些も怯せ。刀を戛哩と打落し。腕取て操倒せゞ。阿丑ゝ夫を救んとて。おそる〳〵背後より。荒男ゞ羅丸を。碎る可楚と取る。不意を取られて辞易し。眼を瞬り息を詰。動を得さり。と昌九郎が。臥つゝ排ふ刀尖鋭く。諸膝うけて薙倒せゞ。馮司をこゝゝ力を戮し。起んとそるを親子して。段々ゝ砍ふせつゝ。胸前ぐさと刺とめて。三人吻と息をつき。さて恙ゐきを歡びしゞ。とじめこの荒男ゞ。いひつる事を阿丑ゝ聞て憑司ゝ冗たる頭を搔き。ゐうゞゞ這奴ゝ匂引光棍ゐて。女子を掠奪たるなり。さるをゐれ悞て。その女子を殺せしと。後ゝもし發覺ゐゞ。いひとくとも罪脫をがさし。いうゝせんと密語ゞ。阿丑もゐゞ〳〵嘆息し。せめてこの勾引光棍が。息ゞようゝ人殺の科を脫るゝよしもゐ

ふんわ。何いひとりんも死人を證據。誰りいことを實事とすべき。來る人なきこそ幸なれ。只速よこの處を。走りたまへ。といそゞせバ。昌九郎沈吟しつ。ゐが大人何とり思ひたもふ某夫婦夜わ紛ゑて。遠く鎌倉へ走るとも。後日よこの事露顯せバ。村長わある願ひい物りい。命バかりを助ちん。と冀ふとも生ゞさけん。とてもかくても賜の背。かくまでも齟齬バ。久後とても憑しかふぢ。よしや故郷へ歸るときあく。日蔭の花とあふバあれ。憎しとおもふ善吉を結果あゞ悔しくも思いぢ。毒を食いゝ皿まで甜れ。と世の常言もいまこの時心思按しりえて見さまいずや。といへバ憑司い小頭を傾け。汝ゞ異見いりわゞや。と問るゝ間も昌九郎い。人もや來ると前后を。透しありめて額をあいし。親と妻とわ耳語バ。聞得て点頭阿丑いさらあり。憑司いほと〳〵感佩し。今わとじめね計略あゞら。ゐが子よと漢朝の孔明も及びゞさし。汝達一旦見を躲さバ。埋木とあるよ似されと。善吉をゞよ殺し得バ。われ多賀殿をこしらへて。世間ひろくするよしわり。これらを思ひ過さぢわ。とく謀を行ひね。と應てやゞて撈りより。勾引光棍ゞ頭髻を爬て。首を弗と搔落し。川へ氷入と投棄れバ。昌九郎も遞しく。婦人の頸を打落して。河水へ推流し。死骸の衣を剝とりて。夫婦ゞ衣も脱のへつ。阿丑ゞ衣をばそゞまゝわ。婦人の死骸わこれを被せ。昌九郎が衣ものをバ勾引光棍の死骸よ被せ。しわいせよし。と父子夫婦。更よ点頭密語つ。行と。一聲激して。親い家路へ子い東路へ。氷もわりゝ梓川。伎倆い深きおぼろ月。うつらぬ夜の川浪わ。影さへ見へずありよけ。りさる程に善吉い。梓村へいゆきしより。思ひの外わ日い暮つ。天さへ曇りていと暗き。河原をひとり歸り來る。こゝろもいとゞ急ゞれて。死骸わ磯と跌きつゝ。跳あがりて六七歩。踉蹌を稍踏あゞし。抑何やらんと見りへるよ。如法夜乃事あれど。それかとバりり。物を得見ねず。そがまゝさちも綻ずして二夫の。宿所へ走歸り。さてお六よい ふやう。梓村ある巫わ。彼夢を占さしさるわ。烏帽子素袍い官服ゑ。馬わ乘て氷中へ落さるい。身よ禍わるべき祥。日輪い王法の。著明よ比ふべし。北より南の岸を投て。渡さんとして得果ざるい。北い黒く南い赤し。是い獄舍のくふたわ繫を。身のわりをいひ解んとそるに。よしあたこゝろえ尤おそれ慎ひべき。凶夢わこそ。とまさ〳〵云く。いいれたり。と告るも聞ず嘆息し。夫婦面をあいしつゝ。又いふよしもありり。お六い跛ゝさび衝わぐる。癪を壓て頭を擡。もし彼神子ゞ合しさる。夢い正夢あふんわい。五年前よおん身も又。おあじ夢を見さまひさるわ。年來吉祥のこありしい。こゝろ得かさ

く侍るらし。まうふべよれも吉ゐあらぜ。凶しといふもまろれ ゐあふじ。かゝらん時い神佛及二親の精髓の。擁護を祈りてせめてこの。こゝろの憂をもれ氷。濁ふぬ世ゐい日も月も誠を照しさまふふめ。といへば善吉うち点頭。翌いつとめて二親の墳墓へも詣ぜべく。多賀の神へも參るべし。現や百の災害も。心ひとつゐ禦ぐゐまうぜ。さでも追ぎぬものあふば。五年前より天れ作。孽とおもひ諦て。人をあうらみさまひそと慰ふれつ慰めても。物まつこゝち遣られぜ。とさまかうさま思ふ事後ゐ多き片あうり。行燈の蓋そと立て。憂身をまべし置炬燵。春の夜更ゐ寒くとも。今宵いこゝゐ。と云めやうゐ。くざく枕を引よして。夫婦まろねの趾と首。距あいして臥されと。いとゞしく睡ふきぜ。既ゐ曉方ちうく成て。ぬるともあしゐ目睡しうば。日いとやたうありさるを云ふず。鳥の音ゐ覺されて。夫婦遽しく身を起し。お六いまづ緣煩ある。雨戸をさやゝゝと操あゞら。と見れば庭の卷石ゐ血を踏著さる草履の蹟あり。あるべき事とも覺ねば。忙々しく良人を呼びて。如此々々と告しうば。善吉も諸ともゐ。竹緣よりつくゝゝと。ことと見て眉を顰め。現こゝろ得ぬ事ゐこそ昨い甲夜ゐ庭門より。來ぬる人いなしやと問ば。お六いうちゐう笑て。身ひとつ留守して侍りしうば。片折戸と引立て風よたも開させ侍らず。索より人ゐい訪れぜ。といふに善告且く尋思し。おもひあとする事こそあれ。昨夕われ。梓村よりかへるさにと。途のぬかりも凍しう い。草履を買ふてこれゐ穿かに。いそしく河原を走る折。忽地物に跌きたれど。いと暗ければ善惡をわかず。そかまゝ走り歸りしゞの。原來ゐ踏かけさるい。斬られし人の骸ゐやありけん。寔ゐ危き事なりし。とゝじめてわれに驚くばうり。走りをりつゝ簀子の下なる。草履をとりて打うへせば。土のみして。血いつかぜ。現彼處より是首までい。路の程も遙なるに。血を蹤べきやうあらず。こいそもいかに。と疑ひ惑ふ。良人の裳にへばりつく。鮮血に妻いうち驚ぐ。胸を鎭めて袖をひき。それ窺せ。と指させい。善吉これを見かへりつゝ。裳を褰てうちかへし。更に呆るゝ折こそあれ。郡司が膨兵五六人。庭門より亂れ入て。善吉を推取卷。索を被んと。鬪くゐど。吐嗟と驚き緣頰より。走りをりる妻を禁て。善吉土ゐ額を著。身ゐい犯せる科を覺す。人さがへゐいずや。といせもゐへす左右より。眼を瞪らし壁をふり立。やをれ善吉。人としら云と思ふべゝをぞ。暗れ所に鬼神あり。明さところに玉法あり。昨夕梓川のゐとりゐ干て。男女兩個を砍殺し。ろの頸をかくしさる。癖者い汝あり。誰かしらん。殺された

る男子ハ則。舊の村長。上臺馮司ゲ一子昌九郎。女子ハ則。その嫁丑といふものあるよし。衣の色にて分明あれバ。親ハ殊更をとろき哀み。曉るをまたて多賀殿へ。詳に訴まうせしかバ。吾們これを承り。犯人をしふん爲。未明より彼此を徘徊し。とうふぎもこゝへ來て。裡のやうを闚窺れバ。卷石に蹤血あり。汝ゲ裳に鮮血を引たり。しかれハ是問ぎしてしる。昌九郎れ丑等を。殺したるものハ汝あり。腕をまハせ。といきまき猛く。いひ解んにも聞ばこそ。矢庭ヨ索を被るゝ良人ヨ携りてよゝと泣。妻のうふみと裏衣に。染てくやしヒ鮮血の紅。今ふりそゝぐ血の涙ヨ。血で血を洗ふ訴人ハ姨夫。かゝる證據ヨ科人あり。と決ふるゝハ理りあれど。善吉ゲ性として。人を殺ぞべうも侍ふぎ。その故ハ箇樣ふふ。と半いハさに撲地と衝退。いと舌長ヒ女子の陳謝。ろれ聞く邉ハ絶てあし。郡司のさこそ待ゐびさまハめ。とくゝ。といふめしく。引立ふれて善吉ハ。數度嘆息し。やよお六。吾儕犯せる罪ハあけぎど。裳ヵ蹤さる鮮血あれバ。とてもかくても一朝ヨ。いひとくともいひ釋ゲさし。思ひぞわさる占夢。今のうれめも夢あふバ。夢の中ある夢の世ヨ。誰ハハ一トさび覺ざるべき。數あふぎとも村長の妻。とりあ乱して笑をさまひそ。わゲ運竭て今生ヵて。倘あふよしのあうふんヨハ。野上の里ヨ身を辱さまへ。與惣ぬしの任ん程ハ。又慰るよしもありあん。けふハ母御の亡日あり。飯菜忘をさまうお。とかゝる時ヵ亡親の事。いひ遑ぎ良人の孝心。誠を護る神も佛も。夫婦ゲうへヵハ亡世歟と。思へバいとゞ滯かへる。涙ヵ咽て回答も得せぎ。袖ヵ袂ヵ引留れど。禁めかねさる叮嚀の筈。よりあ著ろ。と蹴倒ぎ。蹂躙られても身をも厭ハぎ。門ヵ紮るゝ柳髮。庭の小松も今更ヨ。そらたのめある千代の數。この春の日と諸ともヵ。良人の命長ハれと。祈るのをヨて代られぎ。とけぬ縲紲ヨわハれ霜。後の音耗ハ片折戸ヵ。身を倚のけても朝霞。ひろるゝ夫の背影見えぎあるまで。目送りて。又潸然と泣ヨ々り。かくて夥兵等ヒ。善吉をいそゲしつゝ多賀へ趣さ。軈て文注所へ引居て。事の趣を報知々り。さて二响ヵまりを經て。郡司ハやうやく善吉を。坪の内ヨ呼入れさせ。昌九郎ヵ丑等を殺しさる。縡の意趣をさづぬれバ。善吉僅ヨ頭を擡。小人愚鹵也といへとも。村長をうけさまハれば。そこしく理義をヨひまへて。絶て一トさびも法度を犯さに。元來人を殺せしといハハぎ。但し裳ヨ血を蹤さるハ。昨夕梓村ヨり暮てかへるさ。梓川の上ヵて。いさく物ヨ跌きたをど。いと暗けをバ楚と見認ぎ。今更思ひあハそるヵ。跌さるハ昌九郎等ご死骸ヵてひひけん。かゝれバ彼等を殺しさる。犯人ハ別ヨ

あるべし。これらの由を賢察あらば。守の恩澤。私の大幸。只いくさびも明斷を。仰奉る。とおそる〳〵。頓をつゐて禀ゐぞ。郡司いてきを聞、も果ぢ。諸膝推向て。丁とよふまへ。やをれ癖者。汝辨舌をもつて詐くとも。陣ぢる所證據あく。人を殺しさるゐい證據あり。只その裝のまあらんや。汝ゞ庭の卷石よも。血を踏著さる。足蹟ありし。と目今夥兵等ゞ報知さる。事の趣を猜そるゐ。裝卷石ゐ。血を蹤さるを。汝等昨夕いてきをゑふぢ。天明てとじめて鮮血を見て。妻もろともゐ慌忙。流あゞさんとしさる折。さゞ夥兵等さゝらぢも。とやあきを見出せしい。則天の罰そる所。かくても詭り陳ぢるや。と居長高く責問ば。善吉又禀そやう。鮮血を證據としさまへば。さるゐん疑ひい理りあれども。裝をもて人い砍きぢ。但小人ゞ腰刀を。召よして見そゐいさば。ゐん疑ひい釋ぬべし。加旃彼馮司。い小人ゞ祖父ゐい弟ゐして。昌九郎と小人い再從弟ゐり。その妻阿丑い小人ゞ棄妻ゐして。ゑうも從母女弟ゐり姨遲也さへ今見ゐ。上蠱馮司ゞ家ゐゐり。かくまで係る親族を。よしや一旦の恨ありとも。心つよく殺さるべきや。棄より恨るよしもゐふぢ。願ふい彼等を召出し。問せさまいゝ分明あらん。といへば郡司い冷笑ひ。物々しくもゐざんさり。刃を見んとも。見ざらんとも。そきを汝ゐ做んや。且馮司昌

九郎等ゐ。恨ゐしとはいひがさし。その譯つたふゐ訛さうせん。件の馮司い悞て。法華堂の木を伐さる科ゐよりて。曩ゐ村長を止られされぢ。こきを汝ゐ比をば。温順ゐして守を敬ひ。慈悲ゐして仇を愛せり。こゝをもて里人等も。竊ゐ汝を疎みつゝ。件の馮司ゞ舊のごとく。村長たふんとを願へば。汝これをいふせくおもひて。恨を含む。こを一ッ。又彼丑とやらんい。汝よ嫁りて貞貢ありしを。六とういふ淫婦ゐ見うゐられ。む玄んよ離別せられしゐば。已とを得ぢ。昌九郎ゐ再嫁ゐて。夫婦水魚の恩ひをゐせば。汝却てゐきを娼ぢ。恨を含むこれ二ッ。さればこの故ともて。馮司親子ゐ仇せんとて。その動靜を憑狙ひ。昌九郎ゞ妻を將て。柏原へ赴きつゝ。暮て歸ると埋伏して。件の夫婦を砌殺し。その人を玄ふせ玄とて。頸を隱せしに疑ひなし。こい全く一條ゐ。わゞの推量をもていふよゐふぢ。嚮よ夥兵等ゞ。汝を搦捕さるよしを報知せしとき。れ又急ゐ。馮司遲也等を召よして。汝ゞ事を訊玄ふし。事情を尋しゐ。彼等ゞ禀そところ是の如し。この癖者も。いさく管ざりせば。いうでその實を吐べき。とく〳〵。と下知すれば。承ると應つゝ。夥兵等はあらゆゝうゐ。善吉よ組して。俯よ推倒し。管を抗て一百ゐまり。つゝけさまゐ杖やとよ。衰むべし善吉い。皮壞を肉爛を。鮮血淋漓と流きて脊を浸

し心神既に惱乱して。苦痛堪えがたきを。溺命の致す所。縱いくさびいひ解とも。證據あけを。生ぐさかるべし。趣あらぐひて。永く苦惱を受んより。とやく死んと思ひ定め。霜枯野邊に鳴虫より。あ母細い聲をして。且く笞を止めたまへ。禀すべし。と叫びしゝ。夥兵等い癪て引起して。水を口へ沃き入るあぐする程ゐ。あゝいまれまかへきども。背痍ていふべうもあらぢ。ぢゝ〳〵禀せ。と責られて。善吉やうやく跪き。既ゐ云らせさまふごとく。小人い。阿丑昌九郎ゐ恨みあり。よりてそのかへさを埋伏し。梓川の上ゐて。仲れ夫婦を砍殺し。頸を〻川へ投入れて。抑流しいひ。といふゐ郡司いうち点頭。さもあらん。さてもあふめ。馮司等ぐまうに所と。悪符合ととて。やゞて左右をいそぐしつ。馮司と遲也を召出して。善吉ぐ首伏の趣を說云ふし。汝等ぐ猶ゑる所。つもゝりりもさゞいぢ。馮司いさもゞ。この年來。村長ありしゝひありて。いと聰察もまうしさり。賢斷の趣を。つゝらゐ守へ聞えあげ。善吉と遠りらぢ。首刎らるべきものぞ。この旨こゝろ得いへ。といへゝ馮司い額を著。いともかしこき。御威勢ゐよりて。とやくも子どもらぐ仇と獲たり。哀みの中なる喜びよいと。いらへつゝ。善吉を信とゐらまへ。世ゑ稀ゐる犬自物ゐ。理責んい無益ゐれど。汝が父。善三ぐ。きよりして。ありなしの事ゑつき。わが陰を蒙りゐぐふ。汝村長にゐりきより。面を背物いいず。ゐ母ぢきうねくも昌九郎等を。殺してひとり世ゑ立んと。計狡さるい愚ゐらずや。老ての後ゑ一子と。嫁さへゑ喪きし。怨い縱骨を碎。醢ゑゐにとてる。飽足るべぐもわらぬうし。と拳を捺り。齒を切り。いれまく夫の後方より。遲也い涙かれ拭ひ。佳いゐ母子の如し。と世の人いいふめきど。和主い過世の仇人也。姨と妻とを理ゐくひくも。逐出しても母ゐ飽ぬ。心曲ゑし梓川。その夜い暗ゐ正ゐと。女兒よりまづ姨を。殺さゞかゝる獸きいせし。物思へとや殘されし。老ぐ身誰を便著にせん。思へい憎し形ゐし。とまとしやうに怨きれども。善吉い頭を低て。一言も諍いき。そのとき郡司い駑兵等ゑ。善吉を引立さして。嚴しくてきを獄舍ゑ繫せ。馮司遲也ゑい。身の暇をとらせしゝゞ。老賊毒婦い意中ゐ。謀とやゐりぬ。と舌を吐き。二夫の宿所へ歸りゝり。案下某生再說。お六とその日。思もかけず善吉が。囚れとゐりしより。只泣沈てすべ云らき。速く野上へ消息して。與惣ゐ事の趣を。云らせまゐしく思へども。ゝゝる時ゑい鄰人も後問を憚りて。天窟の蜂を拂ふのみ。絶て一人訪も來ず。もきて告んといふ人ゐけれゞ。いさづらゐその日を暮して。通宵思ふやう。趣人をたのめゞこそ。野上へ告るよしもゐけれ。吾儕

みづゝら詰旦。彼所へもうん。と思ひ定めて。その夜と庭よ立あかし。筧の氷を沃ぎかけて。垢離をとりつゝ。良人の爲ゐ。神ゐ佛ゐ亡親の。擁護を祈れば身い氷る。冬より寒き如月の梅もろともゐ夫婦が邂逅。ふさゝび開らしたまへうし。と念ぜる誠ぞあいれある。かゝりし程ゐ天い明て。いといさう疲勞れしうば。お六い且く内ゐ入りて。更ゐ野上へもかんとて。淮倆をそる程ゐ。頻よ門を戟くものあり。誰と問ば。與惣なり。珍客を得て來つるゐ。こゝ開てもを入さまへと。答る聲ゐ夢うとばうり。お六い慌忙つゝ。走り出て戸をあくれば。與惣い旅客もろともよ。蹴邊よ坐を占てお六ゐ。對ひ。おん身もその名を豫て聞けん。あれいまゑの弟善吉よい舊主ある。化粧坂の白眉ゑ。同胞あれども。志。まれと合ざる故よこの年來。絶て音耗させざりしゐ。彼も齢傾きて。兄あつうしく思ふ折。善吉ゞ懇切よ。郵書もて諫しうば。白眉俄頃よ思ひさち。さる〳〵と訪來つゝ。疎遠を勦解れば憎も思いせ。彼も親の遺體あり。よしや河竹の長とあるとも。世ゐ絶てあき活業ゐもゐ。こらせ。今茲い父母の遐忌よ當れば。勘當をもるしさり。よりて。おん身夫婦ゐもあいせんとて。未期よゑと宿所を出て外目もえせせ。いそゞし來されば疲勞さり。といひつゝ膝をうち崩せば。白眉の長うち微笑。三十年來の非を悔て。舍兄よゐふもおん身ゞ良人の。みゐ誠よゑあせし媒妁。善吉をとこい家ゐ在らせや。見れば面色も常あらせ。物おもいしげあるい心もとあし。睦しそきて幼あく。嬪夫あらぎのひしさまひしやと。流石花街よ世をゑされば。さやく猶せし一家の艱。お六い忽地酸鼻。善吉ゞ四をさる事の趣如此々々と告れば與惣も白眉も。呆果て應いえせせ。ぢば〳〵嘆息しさりけゑ。且し。て松山與惣い。拱きさる手を膝ゐ措。縡の爲体を致るゐ。善吉いうでう人を殺さん。全く寃枉あるべけれど。鮮血を裳ゐ蹤されば。疑るゝも理ゑあり。殊ゐ彼馮司等い。腹くろきものあれば。ゑゞ子の仇と定りゐぢらでも。憎しと思ふ善吉を。罪おいさんとをるかもぢらせ。ゑきい田舍よ人とあれば。かゝるをぢをば辨ぢらねど。白眉い鎌倉よて。見もし聞、さるともありあん善吉を。救ひ出せ。方便やゐる。と密やうよ。問ば白眉小膝をそゝめ。いゐしへより千金の子い。市ゐ死あせといふとあり。錢あるとさゑ石佛も。忽地頭をかへそべし。況て郡司の徒ゐ當國の守佐、々木殿。在鎌倉ある年い。彼家のゑう刀稱原。某が樓上よ。ぢば〳〵うよひしとあれば。いゆたてこをふを訪んよい。長をぢふをと得もいい。ぢかれば是善吉を救ひ出せゐ便りあり。喇ゞぢらしてや。某此度善吉ゐ。贈ゞんと思ふ故よ。齎たる金十両あり。路費も。

又あまりあれば。これらをもて事をとゞるべし。その方便は箇樣々々と。額をあつめて密語
ばお六に。些ちかふを得ていとたのもしく思ふわぞ。心ばうりの歓待わ。時後れていかひな
しとて。與惣白眉に暫くもとらに。同胞つれゞちて多賀へ趣き。白眉が相識れる。佐々木の家
隷。郡司が私卒あんどを訪ふて。善吉が爲は財帛を惜まに。をさ〳〵救ひを求るわ。利は趣く
に人のつね。誰かいこれを阻むべき。去りにあれど昌九郎等を殺せしよし。善吉既わ首伏し
て。罪籍とや定るうへわ。助るべうもあふねど。獄舍へ飯を遺るとい。妻子の乞わよるべしと
て。まづこのことをもるされしうば。與惣白眉に走り歸りて。お六は緣由と告去らし。次の日飯
を齎して。三人多賀の獄舍は趣き。白眉又獄卒等わ。物少節つゝとらせしうば。遂わ善吉と面
をあいそるとを得さり。痛しれうあ善吉に。日ゝを程經ぬ獄舍のそまひも。皆の瘠わ血色衰
へ。日影は疎き。をとこへし。只ひよろ〳〵と骨立て。消あん露の玉の緒や。愛時にこゝは繋
れて。六字の稱名は彌陀さのむ。觀念の外他事あきは。今とうふぎも妻勇。思ひもかけぎ相撲
ある。獨主さへ訪れしうば。こい〳〵いうわとばうりに。迭は涙ざしくをて。逢べ。といいん。
去う問ん。と思ひしとも胸ふさゞる。お六は得堪ず阿と叫び。例をんとしてやうやくわ。獄舍

の搭子は携りめゝ。よゝと泣音に驚の鋭は狂ふもかくやと思へば。彼も此も痛しけれど。與
惣にこゝろを鬼わして。お六をいさく叱り激し。彼首是首を見かへるわ。折ふし傍は人あけ
ばば。善吉を訊慰め。此度舍弟白眉は化粧坂より詣來し事。且ことゞ助を得て。辛く那司の許
を受。息の内ある對面をる。事の趣おちもなく。告をば長い兄と居ういり。三十年來遠離り。
兄が笑顔を見つる事。誠をもて人わ及す。善吉和殿の賜あれば。一昨の日野上へ著て。足やに
ふへぎきのふ未明は。舍兄もろとも二夫川へ。いもひて問ば不慮の災難。手わもてるもの物
忘るゝまでよ。一トさびい驚れ。一トさびい憂。和殿の妻女と兄與惣と。及ばぬおのゞ智恵さ
へよ。つどへてやうやく便宜をもとめ。親族朋友い許されぬ。獄舍の門まで輙來て。物いふと
も過世より。結びし緣しと思ふりし。只何事も。命い物種。思ひ屈して病たもふあ。黄金佛の
利生をもて。必救ひとるべきわ。といへば善吉頭を擡。化粧坂はありしとき。果敢〻〻去き仕
もゐせぬわ。厚く惠せたまひさる。主恩雲時も忘をねど。世の經營は羈れて。再會とかりうた
けをば。嗚呼ゞましくも同胞の。和順の事をまうせしわ。のく速は來さまいし。おん心操見れ
て。歡しくこそひあれ。加旃某ゞ必死を救ひさまるんとて。財帛を喪ひさまふ事。身はやあ

まりて有がさく。葉言わ述も竭されず。ちういあれど。罪あくて罪よ死とる過世の惡業あるべくい。人力をもて救ひがさし。よしや又。黄金佛の利生をもて。首を續るゝ事ありとも。執深まゝよ親族さる。阿丑昌九郎を殺せしといふ。ぬれ衣を乾よしあくい。八十九十の上壽をさもち。生延るとも何のはせん。よし又冤枉よ死るとも。後よ犯人發覺て。汚名を雪るとたあらば。絶て恨いいず。と難よ臨て死をれそれず。言の葉清潔さ。回答よ長い兄與惣と目を注しつゝ感涙を。坐わ拭ひぬるよぞ。お六いよゝ泣沈ま。死を極めさまひしい。男魂あるべ々れど。とじめより去のおぼさば。人をば殺し待らぬと。あどでいく遍も陳じさまいね。因れさまひしその日より。傻ればとや四日昔い終日袂を紋り。夜い通宵垢離を執り。或い神垣佛塲。百度の繙も投竭しかあいぬまでも。願言の。叶へと祈るい誰が爲ぞ。胥門の枯木に常にゐる。鳥の聲を聞く毎わ。心よかゝるも心うふ。とく死ぬべくい吾儕まづ。思ひやそりて死ぬべきに。死ねべころけふあひ見るそれ。赦免のとたをまつばくり。その松山と白盾の。両個の大人ようち任して。氣つよきとあ宣ひそ。かゝりし時よ女房の。心の中いいうあちん。と思ひやりざよ去たまいぞや。とのさ口説つゝ怨ずれば善吉聞て頭を掉り。おろうある事宣ふよ。裳へ鮮血を蹤たきば。冒九郎等を殺せしものを。善吉あいわふずとい。善吉あふで誰ういあふん。去うも敵手い親族あり。叔母あるものをあく〳〵よ。いひとさうさしと知りあがふ。いひとうんとそるとさい。いよ〳〵罪を重るよ似たり。日月誠を照ふしたまいゝ。人を殺さで殺せしと。まうせしとても助りあん。過世の罪障滅せぞい。呵責を忍びて陣ずるとも。責殺されんい一定ゑ。死をば怕をぬわれあがふ。いと苦しきい獄舍のそまひ。音よのを聞く阿鼻焦熱。或い叫喚大叫喚の。地獄い實よ外あふぞ。只願しきわ一ヂ日も。いやく首を刎さして。難苦を助けたまひねと。てゝより仰ぐ鷲の山。佛の利益を念ずるのを。獄かば後世の障とあふん物をあ思せたまひそ。と唱ぐましき述懐よ。お六わいよゝ泣沈ま。松山與惣も白眉も。理りありといひうねて。頻よ鼻をうちうむ折。獄卒等いで來りて。眼を睨り聲をふり立。汝等飯を送り來て。あどて尻の腐りさる。とや退出よ。と叱られて。與惣白眉左右より。伏沈むお六を。扶掖獄舍の内をさし覗く。娑婆と冥土の辭別竭ぬ涙の血盈よ。刀林見かへりて。歸るい三人六道の。辻占凶れ鳥の聲。人をおろれぬ草野犬い。畜生道かと。淺ましくて。夢路をたどる心持せり。さる程よ與惣白眉い。お六を扶て二夫川村へ立歸り。又さま〳〵よ商議をるあとうく

善吉が助命のことを願んわい。多賀殿より外わあし。只いくたびも。彼主從わいひよりて。物十倍よ進ふせん。この外よすべおしとて白眉い路費の金錢。大かた懷よ挾つゝ。その黄昏よ。又多賀へゆかんとするわ。相摸より持て來たりし從者い。野上よのこし置つ。老人ひとり彼處へゆきて。暮おゞこゝろもとおきわ。與惣も又もろともわ。ゆかゞや思ひしが。お六い嚮よ歸りしより。さふぬざよ惱る痞。又殊更ゝ苦しとて。衣引被き臥されゞ。おれも又見放ちがさくて。與惣わそがまゝ二夫よ留り。白眉をのを遣しゝり。このとき馮司遲也等わ思ふまゝよ善吉を。陷をて竊よ歎び。這奴けふや首を刎ふるゝ。あそい市よ棄ふるゝと。毎日よ多賀の中明亭よ赴きて。綷の爲体を窺ふよ。松山與惣と。それぞの弟よ。化粧坂おる白眉といふもの相謀りて。郡司主從よ。苞苴賂進ふしさをゞ。則善吉が死刑を緩ー。剩ろの妻子よ。獄舍へいゆきて。對面する事を許さをさり。と傳聞て。大きわ驚き。凡錢の妙おる事。足おくして走り。翅おくして飛千鈞の怨を解て。万方の愛を率。されゞ又多賀殿が。善吉を贔屓たもふも。例の孔兄の處爲おるよ。れわ裏中既わ竭て。いろわとゝもせんそべおし。されゞとて手を交きて。盧ふと日を送らゞ。善吉い再生て。枕安くいねぶりうたけん。處詮這奴等が多賀殿へ。赴くと理伏して。矢庭よ懷おる物を奪ひとり。これを郡司主從よ進ふして。善吉を結果おん。こをよまに近經なしと。て竊よ遲也と商議し。その曙昏よ。馮司い手拭もて面を包み。善吉が庭門よ水のくれて。内れやうを張ひつゝ。目今白眉の長ぐの金夥懷よして。多賀へ赴くよしを竊聞。こぼるゝゞりひとり笑して。彼より先へ走り拔摺鍼鎚わ待程わ。日いとや暮をて人跡希ゑかくとい之ふに白眉い。善吉を救いんと。思ふのみわて外目もせに。歩の運びをいそゞせども。摺鍼鎚を。越るとき。生憎よ日い入りつ。馮司い遙よこれゑ。と思へゞやがて木蔭を出て。もさちがふやうにしつ。足を飛して磯と蹴る之ゝれども。白眉い。こゝろを得さる老人よて。はやく左へ過退しゝゞ。蹴られおがらも竟よ倒をを。こい盜賊と。高く叫びて。杖をもて擊んとそるに。馮司い豫て謀事り也。し近屬信濃路より。この山下へ來て。人いまさ面を認ふざる。拭平靄平。といふ野伏を傭ひつゝ。要緊の時の方人に之さりしゝゞ。件の野伏等い。白眉ゞ後方より。忽然と走り來て左右の腕を楚と拿る。とふれて直よ身を沈まし。振放さんと焦燥問よ。馮司い得たりと白眉が。懷へ手をさし入て。金殘をあく奪ひとり。足よ信して逃去よぞ。白看いまに〳〵怒て腕を漸振わぞき。短刀を閃して。野伏等を砍らんとそれど。跡とも見ずて逃亡たり。

續て追んい易けをども。賊い三人。ゐれい單身。毛を吹疵を求あゞ。後悔そこゑたちゐさ。しと思ひかへして廬うち拂ひ。さるゐても彼金を。こゝゐて奪ひとられていい。善吉を救ひゐさし。いゐゑせまし。とたゆさひて。了得金ゐい事欠ぬ。老人あれども旅宿のゐおしさ。懷さむき夜の山ゑ。斯てあるゑきゑあらざれゞ。逐ゑ踵を回して。二夫川へ引かへす。番場の衢術のほとりゐて。蕉火ふり照らしつゝ來るものありけり。迯ゑそれかと遶し見て。誰と問ゞ與惣ゑ。長いいと〳〵面あゐれど。いいで已べきとあらねゞ。まづ蕉火を踏滅さして。並松の蔭ゑ聚ひ。賊ゑ金を奪れたる。事の爲体を告ゐけれゞ。與惣い病る額を拊。かくまて綷の齟齬ふも。みゐ善吉が薄命の。あす所ゐをゞ歎くゑよしあし。和殿が出てゆきしより。途をがらの事何とあく。心もとあく。恩ひしゐば湯藥を煎じてお六ゑ飯ー。行燈ゐのゑ火を点して。追つゐんとて來ゑゐれど。兎を見て犬を呼ひ。羊を亡して牢を補ふ。諺ゑ異あらで。ゐゞ來るとも晩ゐりき。和殿いいゐゐ思ふやふん。當今の壯佼ゐ。善吉ゞごときい あし。彼い無學の賢人あり。金とゞ化ゑ失ふとも。惜むゐ似て情ゐ足らぎ。可惜をのこを喪いゝ。お六も遂ゐ生べゐふぎ只この夫婦い惜むべし。別ゑ善巧方便ありや。と密めて問ゞ白眉い。塵うん捻りて後方を見かへり。今鎌倉ゑい青砥の大人。賢斷ゑ私あく。邪正を照ふしさまふと。浮玻璃の鏡のごとく。賞罰の正しゐ事。閻羅王ゐも勝さまへど。かの大人をふこの春い。關の東西を巡歷して。鎌倉ゐい在さぎとゞ。藤綱もしこゝゑ來まさゞ。善吉い生もやせん。方便れ種を失ひていい。別ゑ手段もいいぎ。化粧坂へ脚力もて。緑由をいひ遣し。金召れぎさゞ日ゐろ經あん。轍の鮒の泥ゑ吻く。火急の事ゐいそれもかひあし。おん身まづ。ともかくもして。二三十両の金を調へさまへ。返ぎ日までゐゐゞ家より。金とりよして進ふせん。といへゞ與惣いうち点頭。ゑゐふゞ翌い野上へ歸りて。ゐゞ家を沽却し。それゑても物足ぎい。岐阻の櫛經を售ぬべし。さりとても白地ゑ。お六ゐい告ゞさし。彼この件の事を聞ゞ。又一眉の憂苦をまして。長さ病著ゑありもやせん。こゝろ得さまへ。と義ゐ普む。兄い弟ゑ課しゐいしつ。二夫へ走り居りていい。氣色ゑもあらいさぎ。善吉ゞ助命のとを。多賀殿へ乞まうして。物夥進らせしゐ。快く受さまひしゐゞ。大ゐさい事ありぬべし。こゝろ易く思ひさまへ。とまとしやうゐ慰れゞ。お六いやを ら身を起して。恩人等を拜をつゝ。些い痞もおこさりけり。かくて與惣い白眉と。課しゐいせし事あれゞ。次の日又お六ゐいふやうけふい。おん身の顏色もよく見ゆるゐ。ゐれも又假蹠

民よ。こゝへ來て日ごろ經さり。婢ぢらのいうよ〳〵。とこゝろ得うさく思ふあるべし。よりてけふゝ白眉を將て野上へ歸り。翌ゝ未明よ又來なん。心細くゝをゝそるとも。今宵ゝひとりあうしさまへ。といふをお六ゝ聞もあへぞ。こゝとしらの阿翁さちの。丹誠もて助うがさき。良人の命たそうらゝ。一夕ゝ勿論百夜も。寂寥とゝ思ひ侍らぜ。と〳〵歸りさまへうし。と勸るも痛しけれど。告ぬ實事ゞ誠ゐこそ。と思へゞ纏て帶結びそえ。白眉の長をいそゞし立て野上を投て走りつゝ。もく事既よ二里ゐして。柏原ゐゝをり〳〵憩ふ。茶店あれゞ尻をかけ白眉と密やうに。家を售とを相譚ふ程ゐ。莊客とおぼしきゞ。裝を脊肩。笠を引提二三人いそゞゝしげよ。醒井のうさへ過るあり茶店の老女これを見て。長久寺地名れ使公さち。何處へ向走りさまふ。尻うちかけて憩ひさまへ。茶を飲さまゝぜや。と呼れぞ。後ゐる一個ゞ立留りゞふゝ多賀の小野の衙衙ゐ。刑罪人のしゝゞ。彼ゝ近ころ。梓川ゐて。親族ゐる。男女を殺したるものゞ。とよりて多賀より夫よ指をて。只今彼處へ參るゑ。歸りゐこそ。と回答も果ぜ。追續んとて走去ゞ。與物ゝ長と面をあゝし。已あん〳〵善吉ゝ。けふとや刃の鋪よなると歟こをより彼處へ赴きて。いひ遺を言の葉を。聞ざらにゝ遺憾し。誘さまへといそゞせゞ。白眉

も床几を放ち。さらゞ吾儕ゝ二夫川へ。走りもきてこの事を。お六よとやく告ばや。といへゞ與物ゝ頭を掉。お六ゝその性雄々しけれども原是女流の事あれゞ。哀傷ゐとり乱し自害ゐどしさらんゐゝ。いと痛しき事あらぜや。縱さまでゝあらぜとも。今般ゐ逢さゞ善吉ゞ。黄泉の障りとゐりぬべし。ゑらして益ゐき事あれゞ。後に告とも遲からじ。と禁れゞ白眉ゝ。有理と應てもろともよ。ゐるしの老女よ辭しまゐれ間道をもとめて端々。小野の衙衙へと走りゆく。お六ゝかくとゑらねども。與物白眉ゞ歸りしより。畫ざゐ後のゑ見られて。いとさうゞし籠居をゞ。肉動ゞ胸轟き。心持ゝいと平あらず。ゑゝし慰むうさもゐおとて。その日未の比及ゐ。ひとり門邊よ立出て。物思ふ身ゝ何とおく。歸仰るそらのさゝそまひ。日ゝ出なゞら小雨ふり。定めあゞ世よ形きなゞ。身よもいそしき袖袂。絞りもあへず干あへぬ。糊張の衣の跡のこる。門の板戸に手をかけて入ふんとしさる折こそあれ。里の総角牛うつ童が五人三人つをさちて。番場のかたへ走りつゝ。七よとくあるゝうし。こゝの小父公が小野の衙衙ゐて。今斬るゝと見せんず。と呼びうけてゆく背影を。お六は吐嗟と目送りつ。瞞然として忽地よ。尻居ゐ撲地と轉輾ゞ。弗と斷離るゝ髻結ゐ。雪の髮鬢乱るゝ雲もれ。又一ト頻りとら〳〵と

降る驟雨に面をうたれ。岸破と起つゝ小膝を衝たて。目上はふりうゝる。髮のれくれ毛。はふり落る。涙と共ゐのさ撫て。肩搖おろす息を吻き。痛しん哉。哀しんうな。松山白眉ふたりの翁の。誠心も終ゐとゞゝ老。ゐが伏い今えや刃の下ゐ。引居らきたまふらん。夫婦の癡情い石とも成る。それい異國へ生別れ。おれい眼前死わかれ。三千世界の惡とを。ゐこの身ひとつゐ被たる歟と。胸を拍て歎さしゞ。肩ゐ垂さる頭髻のそゑを。楚と握りて右手へ引。これを嚙つゝ咽を潤し。振離見れゞ。また舜るゝ。天の景氣ゐうち点頭。思ひの外ゐ日は高うり。よしや群集ゐ遮られ。警固に禁らるゝとも。良人の今般ゐ言葉をのいし。おゐじ道路の露と消ゐん。去ゑゐり。去かゐり。とひとりこちて氣を激し。直躬と立ゑ踏迦と。蹌踉足を踏固め。走ればいとゞ蹌々と。輾びてい起。起てい轉び。樹口樽水。門松久禮。番場米原越もけゞ。一里に足らぬ小野の術術。斧も研ゐゞ摺鍼嶺。一心凝てもこの日來。憂苦ゐ食を斷しかゞ。山路ゐ疲勞れ眠眩き。忽地足と踏ゐがして。左手の谷へ較轆と。身を輾してゞ陷りぬ。痛しいうな薄命の女人三寸息絶れゞ萬事休。畢竟れ六ゲ存亡奈何。そい次ゐ解ゐくるを見てゑらん。

○二夫川の拾遺の下

悲嗚と矢傷の鳥。なかその倡いおもふと深し。されゞゐ六い善吉ゲ。終焉ゐあわんとて病苦を忍び喘々摺鍼嶺を。越るとき。夫婦石の邊にて。跌死輾て横さまゐ。谷底へ落たれども。てれを去る人ゐうりゲり。扨も其后鎌倉ゐい。執權北條時宗朝臣。いぬる建治七年四月四日ゐ逝去しさまひて。時に年三十四法号を室光寺道果とゞ稱しなる。嫡男貞時弱冠より。笑裘をつぎさひまへども。武將の大器備りて。よく藤綱を用ひさまへゞ。良政をさ〳〵父祖ゐ恥ぢ。今茲弘安八年正月中浣。先例ゐ由べしとて。青砥左衛門尉藤綱を。巡歷使ゐ補しさまひつ。守護郡司等が。政道の理非邪正を鑒定し。寃民悲訴のよにゲゐさゐらゞ。よく糺明を遂よとて。函西なる諸州へ遣しさまひしゝゞ。青砥則。五十子七郎。淺羽十郎等以下夥の從者を將て。此度い中山道より發向し。武藏上野。信濃美濃を巡歷し。二月中旬ゐい。さや近江路へうち入りつゝ。佐々木近江判官滿信ゲ觀音寺の城。及おれゲ郎黨。多賀郡司ゲ多賀の陳所へ赴くとて。十六日の未下刻に摺鍼嶺を越る程ゐ。藤綱い。山の半腹ゐして馬を駐め。乘馬の左右ゐ隨ふ五十子淺羽を見ゐへりて。汝達よく彼を見よ。西のゐさゐ殺鶯ゐり。顧ふゐ今ゐゲゆく途ゐ。刑罪のものゐるゐらん。と鞭を揚く指示ゞ。その言葉いまゞ訖らぢ。忽然として谷陰ゐ。女の泣聲。

聞えしゐ。藤綱且く耳を澄し。怪むべし彼哭號聲い。裏て且憾り。是必冤屈を訴るものゐるべし。故あるのゐけふい終日。降み降らずみ。時ゐらぬ。慎の氣色いこれゐ應せ。ゑを嘗聞るとゐり。倘悞て。善人を刑するときは。天怒り。人憾むと。則史傳に載る所。昔唐山東海の孝婦。姑女の爲ゐ誣ふれて。冤ゐ死せしゐば。旱すると三年ゐ及び。杞梁ゲ妻夫を哭して。梁山忽地陷りけん。こい徒異朝の故事のみゐらんや。今號器聲と西に當りて。一三町の程とゐぼし。索て見よ。と下智すれゞ。五十子淺羽こゝろを得て。もろともゐ走去しが且して立歸り。殿の明窓ゐ一点ゞりりも遼いぢ。年わのき一個の婦人。西ゐる谷へ輾落ていひしゲ。いたく疲勞さりとおぼしくて。召べどもゞづりふ出るとのゐいぢ。よりて僕等。辛くして扶ゐげ。まづ腰ゐ著たる循備の藥を飲ゐつゝ。事の趣を問ひひへば。二夫川の村長ゐ。蚕屋善吉といふものゝ妻。その名を六と呼るゝものゐり良人善吉い。近ごろ親族上毫馮司といふものゐ誣ふれて。人殺のぬれ衣を被たり。よりて善吉い。只今小野の衙術ゐて。首を刎ふるゝと傳聞良人ゲ最期のやうをも見まゐ之く。おゐじ野するゐの露霜と。消ゐんとおもひ決め。やうやくこゝまで來たれども。立願の故をもて。この五六日と五穀をさうべず。さふでも憂苦に身い疲勞

れ。思いぢも蹈外して。この谷へ輾落。巒登らんゐも身いのゐいぢ。志を得果さずして。こゝゐて空くならんと。意外の憾にひへば。腸を斷ゞのりゐ。泣叫びていひ。とまうせしゐば。僕等いよゝ勵り慰め。汝心をやすうせよ。青砥公巡歴して。今この山を越たもうゐ。愁訴あらゞみづゐら禀せ。必聽たまいんず。爰ゐて殿を俟奉れとのへすくも。教諭して。木葉小草を刈布つゝ。平なる石の上ゐ件の婦人と安座さし。走り歸てひ。と喘ゝ禀すにぞ。藤綱これをつくくゝ聞て。鞍を拍て嘆唱し。吁その夫ゐしてゐの婦ゐり。こい忽ゐすべうもゐふず。五十子七郎い。速ゐ小野へいぢきて。多賀郡司ゐ對面し。予が辞と佶と傳へて。善吉とやらんが死刑を禁よ。われはこゝにて件の婦人ゐ。事の顛末をよく問て。跟よりゐのんぢ。こゝろを得さりやとくくゝ。といそがせゞ。五十子唯と應もゐへぢ。山路を西へ蹤直に。小野の投く走りゐき。はや三町餘ゐして。凸き處より。前面を估と見わたせゞ。彼こそ郡司主從ゐるらんとおぼしれが。或い床机ゐ尻をりけ。或い桿棒をもて威を示し。群集の老弱數百人。行馬の四方ゐ圍繞して。さゐゲら稻麻竹葦の如く。大刀とりの健男い。切鞆被さる刀を引提て。罪人の背後に立。玉も散るべき氷の刃を。晃々と閃して。既に首を刎んとするゐぞ。五十子吐嗟。とさし。招く

扇と共ゐ蔭を揚多賀郡司ゑ物まうさん。鎌倉殿の仰ゑよりて。寄砥左衛門尉こゝゑ來れり北條殿の嚴命あるゐ。その罪人を殺すべのふぞ。等一等。と呼び禁め。やがてゐ走著にける。當下 多賀郡司等ハ。僅に青砥の二字を聞。更に北條殿の嚴命と聞て。且驚き且怪ゑ。綜れ虚實ハ去らねどもまづ大刀とりの武士を退のして。更ゑ佻々ゑく善吉を殺さぞ。主從頸を鶴しつゝ五十子を俟程ゐ。聚ひたる里人等ハ。誰の藤綱をゑらざらん。孰の善吉を憐ざらん。今五

十子が呼聲を聞と齊一散動つゝ。逐ざれども一條の路をゑや開きしかゞ。五十子七郎は。流るゝ汗を拭ひあへず。行馬の邊ゑ進ゑ來つ。郡司ハ遽しく床机をゑあちて。蠟てこれを迎へ入ゑ。某則滿信が郎黨多賀郡司ゑをゑ。廷尉巡歷の事。豫て知らしゑまふといへども。昨今とは思ひのけず。加旃ゑの。罪人の故をもて。非常の場を諱ゑなくゝこゝに來臨しゑまふ事。驚たおもふ所ゑ。嚴命の趣。うけたまハらん。といへゞ七郎禮儀正しく。疑感ハさる事あるべけれど。こゝゐ刑戮せらるゝものハ。二夫の村長善吉あるべし。彼ゑ妻。六といふもの。途ゐ訴へまうすよしあり。よりて藤綱。そづから來歷を問ん爲。まづ僕を遣して。雲時刑戮を禁らるゐくいふは。藤綱ゑ嚴られゑる。雜色五十子七郎と呼るゝものゑ。猶詳なるよしハ。藤綱ゑ面謁の後ゑらるべし。と述しゐゞ。郡司ハいよ〳〵遜慨して。こゝろの中安ゐらぞ。夥兵等を遠く且して。藤綱を迎けり。これより先與惣白眉等は柏原より走り來て。群集の里人等を推ゐきつゝ。行馬のゐとりゑ進ひといへども。警固の兵士に禁られて。善吉と物いふとかあはず。むゐ六が後の悲歎さへ思ひやられて。痛しく。遺恨やるゐたなりりしゐ。今ゆくりなく中途より。藤綱こゝに駕を枉て。善吉を救ふと聞て枯たる苗の雨ゐ活。炒ゑる豆ゐ花さく如く。天ゐ歡

び地わ喜び。藤綱今や來さまふ。と頂を伸し。足を翹摺鍼巔の方をのぞ。遙望ぞいと理りある。ときわはあらで上蠶馮司い。昨夜摺鍼巔みて。白眉が金を窺ひとり。ときを多賀へもてもたて。郡司主從ょ贈りつゝ。密に乞とあるをもて。郡司い又善吉が刑罪をいそがしたり。さる程に馮司遲也は。この日善吉が。斬るゝを見ばやとて。人より先わ小野へ來て。行馬ょ搦て眼鞘外し。此彼耳語指しつ。見物して居たりけるに。思ひもうけず青砥ゞ雜色。五十子といふもの走り來て。いふ事すべて。善吉が首を續べく聞えしかば。寶の山へ入りあがら。手を空くするのをあらぢ。ゆがうへも又いうあるべき。と思へば胸中度を失ひて。呆るゝと半晌ばうり。瘠もつ足はゑうすがに。踏ところを忘れつゝ。歸るも遺憾ければ。人の背わ躲ひて。これも青砥を見んとて居り。且ゝして藤綱と。淺羽十郎等両三人して。お六を扶掖し。その身い眞先わ馬を進めてとや。程ちのく來わりれど。五十子は走りもたて。善吉が刑戮を。禁たるよしを告。郡司も外面ょ立出て。恭しく迎をば。青砥則從者等を。道次に殘しとゞめ。五十子淺羽等。僅わ十餘人を將て。行馬門わ馬を乘居。閃りと下りて進を入り。床机を上坐に立さして。郡司わ對ひ。佐々木の郎黨。多賀郡司。みづうふ法塲ょ出て。刑罪を行ふと。職分尤等闕あふぞ。藤綱

殆感佩す。といへば郡司は首を低。身不肖ょはいへども。某佐々木の一族として。兩郡を管ゑば。賞罰を人わ委ねぞ。よりて廷尉來臨のよしを告らるゝといへども。遠く迎奉らぢして。失敬の罪を得ょり宥免を蒙ふば。幸甚しとまうすょぞ。青砥扇をとり直し。藤綱ゞ仕しく。この處為來されるを。不審おもはれんゞ。此度下官。北條殿の命を受。斯巡歷するよしい。守護と為く郡司とあく。政道の理非を問。民の愁訴を聞ん爲ゑ。ゑうるわ向わ。摺鍼巔を越る折。悞て谷わ陷り。泣叫ぶ婦人あり。從者して扶あげさし。緣由を尋をば。こゝわ刑戮せらるゝ罪人。善吉が妻あり。良人い寃枉を得て。只今首を刎らるゝと傳聞最期のやうをも。見まほしく。この山まで來されども。身い疲勞。瞑眩き。忽地谷へ轗落て。登るとうあいぢ。志を遂ぢして。中途わ空くあらんと。怨のうへの恨あれば。號哭しんといへり。このもゑわ。まづ五十子七郎をもて善吉が。必死を禁め。六が愁訴の趣を聞くに。すべて道理わ稱に似ょり。彼ものとく〳〵。といふに。五十子淺羽い。れ六が左右の手を取りて。行馬の内へ入れしゃば。れ六と良人と面をあいし。淺ましゐ形容を。見る哀さと。見らるゝ苦しさ。消あんとせし露の命の。露より寒死泳の刃。一トさび頭ょおちゝりしを。青砥の君ょ助られ。身の錆おとすよしわらば。浮木

ふあへる龜よりも。猶ゐひうたき夫婦が幸。生んとも死んとも。測ゑられぬ生死の海。深き歎きと嬉しさい。いづれ涙の潮境。滿干ゐもれぬ松山白府。こゝゐゐとも告かねし。おゐに思ひといへゞえゐ。いいねどもいや色に出る。郡司はお六が遮て。途に青砥ゐ訴し。と聞て心よ快らず。堪うねて眼と瞪らし。このをんゐ。夫の罪よ。遮坐せられぬを幸といせで。身を憚らず。貫人をおそれず。何事をかまうしたる。善吉既ゐ首仗して。人殺の罪定りしい。自業自得とゑらざるや。いと嗚呼ゑ。と叱れゞ。藤綱聞てうち笑ひ。郡司の辞とりとも覺ぢ。人の命と千引の石と。何とゝの重しとせん。鞫問呵責ゐ得堪ぢして。寃ゐ屈にるもの。世ゐおしとはいひがさし。抑善吉が。裝ゐ血を蹤さると。彼ゞ庭の卷石に。血を踏さる故をもて。犯人おらんと疑れ。證賣の後。彼やうやく。罪ゐ伏せしものゐふずや。と問ゞ郡司は怒をおさめ。現宣ふ如しといふ。青砥うさねて。ゑうるとき。和主が獻斷鹿猾ゐ似たり。善吉實よ昌九郎と丑とやらんを砍殺し。その血走りて衣裝ゐうゝらゞ。或い領前。或い袖。さて裝へも蹤べきよ。さいあらずして裙ゐのゑ。その血を蹤と疑ふべし。加之梓川より二夫までゑ。その間ゐ番場の驛あり。大約路程二十町。三十町ゐも及べるに。彼ゞ草履ゐ蹤たる鮮血。彼ゞ宿所へ歸るまで。草履のうらより流れおゞれて卷石ゐ留ると。いよゝもつて疑ふべし。顧ふに是い善吉を。竊ゐ恨むるものゐりて。梓川の上りにて。男女命を隕せし夜。善吉これをゑらずして。れおじ河原を歸るを見て。淺いうにも較計つゝ。草履の背よ血を浸して。卷石へ印たると。善吉ゞその夜さり。裝に血を蹤たると。此彼暗合したるゐこそ。裝よ血を蹤のゑならば。疑るゝともあらめ。卷石よ血を印と。理よおいてあるべうらぢ。凡罪の疑しきゑ。佻々しく殺さぢといへり。などてその夜善吉ゞいゐ比しといふ。梓村の巫を召出して。往來の時刻を考。又善吉が常よ帶る。脇夾の刀いさらゑ。彼ゞ家よ。ありとある。菜刀まで。召よして鑑定し。又馮司等ゞ訴る所と併考おば。十よ八九いその情を。推察にるよしあるべきよ。心を師とし。威を逞して善吉ゞ口を鉗呵責杖罰その度ゐ過て。罪人を作ると。公道といふべうらぢ。況頸おき死骸をもて。昌九郎丑と決ると。にべて推量の沙汰よあらぢや。郡司の決斷こゝろ得がさし。と詰れてもおゐおりずまゐ。おい御諚でいひへども。大約馮司昌九郎等を。ふこのく怨ゑて殺さんとまで。思ひしものゑ善吉ゞ列に。又ありとも覺しゞずその。故い。彼昌九郎が女房丑い。則善吉が嘗妻ゑ。ゑこのるに丑い。六といふ淫婦ゐ見おゑとさを。母もろともに離別せふれて。己とを

得ず母を携。昌九郎が妻とありしを。善吉却娟くおもひて。おゝろよ刃を研と久し。加旃。二夫の村長をば。上蓋馮司うけさまいりて。年來を經さりしに抑過失とありて。馮司い長を止らをつ。善吉こをよ代るといへども。里人等歸服せぢ。竊よ馮司が舊のごとく村長さふんとを願へば。善吉まに〳〵憤に得堪ぢして。梓川に埋伏し。丑と昌九郎を殺せし事。鏡ゐ照て見るがごとし。いと憚ある言よいあれど。廷尉いまゞ。綜詳よ知召さず。只彼の六ゲまうすよしを。諾ひさまふよやあふんぢらん。といへば藤綱冷笑ひ。いはるゝ所由あるゐ似たり。但その事。郡司發明せられしや亦人傳に聞さるや。いゐ某いかで。かくまでゐ猜べた。こは彼馮司遲也等がまうにまてひ。といえせもあへぢ藤綱は。又呵々とうち笑ひ。嗚呼あるとを聞くもの哉。彼馮司遲也とやふんい。善吉が譬あらずや。ぢらば言を巧ゐして。あき事もあるごの如くいひ掠めて善吉を。罪あいせんと謀らぢやい。をし仲由よあらざりせば。誰かよく片言もて。鋸と定むべき。馮司が辞を實せば。所謂仇に兵を藉賊よ糧を。齎あり。左右殺すべしといふとも。殺とあうれ。國民みゐ殺せといはゞ。その殺すべきを見て。これを殺せと子與氏いいずや。ゐれいまゞ善吉が。人とありをぢらざれども。ろの妻六ゲまうを所と。今郡司ゐ聞く所と異あり。襲よ善吉い。姨遲也ゲ往方をたづねて。これを飢渇の中よ救ひ。又遲也が勸めよまうして。從母女弟丑を娶りつゝ。一点ばりも背ねど。彼等い却恩義を忘ぢ。よからぬ所行の發覺て。夫婦離別し母もろとも。馮司等よ身を寄そるゐあらずや。ぢらば善吉さ。誰を娟ん。又彼馮司罪ありて。村長を止られし時。里人等善吉が。篤行を賞するまゝよ。彼が由緒を守へ告。善吉を請すゝめて。村長よ云たるにあらずや。ぢのふばゐでふ里人等ゲ。善吉を退ゲて。更よ馮司を村長ゐせまくゐしと思ふべき。小人はゐが非を悔ぢ。却人を怨るものゝ。われいまゞ馮司が人とありを云ふざれども。善吉を娟しと思ひて。馮司等ゐ奸計あるこの。これも又測がたし。そい何をもて云るとあらば。こゝゐ聚合る里人等。いじめい衆皆愁眉を顰め。今に至て歡ぶ色あり。のゝれば僉善吉を。惜みも云々ん。悼みも云々ん。これよりて推ときい。誰の善吉を疎むべき。誰の馮司を村長よせまく思いん。夫權を弄て人を殺し。利を貪りて人を屠るい。桀跖ゲ徒あり。郡司も罪科脱れりさゝん。いりよぞや。と問つゝも。扇を揚て小膝を拍。説ありしたる明察に。郡司い胸を打るゝごとく。ゐがうへなり。と思ふにぢ顔色行馬の竹より青く。眼と睜り。鼻を吹き。絶て半句も辞得ぢ。こは善吉が死を返ぢ。良藥これ

あまするものあし。とこゝろよ拜むお六とさらあり。埒のあなたよ笑方向し。與總白眉。里人等と思いき。吁と壁を揚。感嘆嗚も止ざれば。馮司等いとよかくよ。胸中いよ〳〵安らふをとく退出んとおもへども。彌がうへゐ人立てみて。背よりいたく推す程よ。懇前へ衝出されて。遂よ躱るゝとかあとき。鈍くもこゝへ來よりとて。いと〻悔しく思ひ〻り。當下青砥は郡司よ對ひ。藤綱おもふ旨あれども。この處よては議しりたし。後日の沙汰よ及んと歟。群集の中に は善吉等ゞ。親族うあらぎあるあるべし。召出しゆへ。といふゐ夥兵等遮ぎく。行馬の間とり よ走り寄り其處ゐ聚合るものゝ中ゐ。善吉等ゞ親族あふば。巡歷使の召せさまふゐ。たやく參れと。呼れば。おん前よゆと應も敢ぎ與惣白眉。左右へ人をかきわきて。行馬の中にゆゝみ入り。小人と野上の旅店。松山與惣と呼るゝもの。廼六が義父あり。これあるゐ善吉ゞ舊の主與惣が爲ゐゐ。弟ゐて化粧坂ある白眉の長あり。此度の事を知らずして。與惣善吉等ゐあゐんとて。相摸より來てゆ。と名告も果ぎ頓着ば。青砥つふ〳〵これを見て。與惣白眉參りし歟。善吉が不慮の枉難。日來はさこそ苦惱ぎつらめ。藤綱こゝよ來れるかゆに。善吉罪あからんよゐ。天日光を見るよしあらん。又罪あらば妻子の爲ゐ。私にゐ赦しかたし。六といさく疲勞

さるゐ。汝等これを將て歸り。叮嚀に保養を加て。再の沙汰を等。こゝろ得たり。やと說諭せば。與惣白眉。唯とばかり。禁うねたる感涙に。乾かぬ袖と。又濕る。沙よ頷をつゝ入きて。言うけまうす側より。只伏おがゞ伏拜む。妻もろともに善吉と。おがまんとそれぞまゞ釋ね。索は佛の涉手の系。今や劍の山を出て。連臺へ坐そこゝちせり。青砥うさねて郡司に對ひ。これ己前より。群集の老弱を見るよ。怕害を抱きて動もそれば。躱んとするものあり。思ふに彼馮司遲也も。そゞ中ゐあるおるべしとく。召出しゆへと。いふを聞り〻て逃んとする。惡棍等を里人が。左右より引ゞとゆめ。上臺馮司はこゝにゆ。遲也もこゝにゆ。と前より引。後より推て。行馬の中へ突入るをば。藤綱これを信と見て。馮司遲也とは汝等ある歟。此度の訟こゝろえかたし。事の邪正を糺すまで。善吉ともろ共よ。且く獄舍に繫んぞ。渠縛よ。と下知すれば。淺羽五十子走り蒐て。矢庭ゐ索をうけしりば。馮司遲也も呆れ果て。更にいふ所を知らぎ。此彼面をあとしつゝ。眼を圓くし。啄を。細めてやゞて跪くを。こゝちよしとて里人等ゐ。思ゐ。ぎも壁を揚。一度に咄と笑〻りさ。る程ゐ。夕陽西へ傾きて。群鴉叢林に歸るよぞ。青砥ゐ郡司を鄉導として。多賀の陳所へ赴くとて。お六白眉與惣等ゐゐ。直ゐ身の暇をとふし馮司ゐ

遲也善吉等よゝ。淺羽十郎を相副て。郡司ゞ夥兵ゐ引立さし。床机をゝなち。馬に跨り。末黒の芒萌出る小野の細道右手よ見つ。柳の煙まゞ細き。徑に伏さる雨後の竹。紈ねてうくる檜桶。多賀を投てぞいそゞしぬ。かくて藤綱ゝ。その詰旦多賀を出て。觀音寺地の名へ赴く程よ。佐々木の。家隷數十人。郊外へ出迎へ。陸續して觀音寺の城中へ導くゐぞ。近江判官滿信ゝ禮服を整て。城門の邊よ迎つゝ。花鳥の間よ請待し。某近ころ小恙あるよりて。東使來臨の由を聞くといへども。路次の欵待その意に任せず。ゐ諚の趣承らん。といへゞ藤綱威儀正しく。四海久しく泰平ゐして。万民王化。武德に浴せり。去りゝあれど。生を貪り。死を忘る。驕れるまゝよ足るとを去らぜ。或ゝ民を虐て。私庫を富し。利ゐ走りて奸智よ耽り。竊よ相害ずるも。比。この時にしも多りるべし。よりて藤綱。北條殿の命を稟。此度巡歷の第一義ゝ。守護の政道邪正を鑒み。愁訴を開きて善を勸め。惡を懲らしてよるべなき。寃民を救ん爲ゐり。去りるよ昨藤綱ゞ。摺鍼嶺を越るとき。途に如此々々の婦人あり。愁訴の趣聞捨りさくて。小野衙へ馬を走らし。當家の郎黨。多賀郡司ゐ對面しく。罪人善吉ゞ死刑をとゞめ。更に訴人。馮司遲也等を縛て。これをも獄舍よ繫しさり。凡この件のとく。判官滿信といふ下知せられさる歟。

郡司ゞまうそよ任されたるう。と問ゞ滿信眉根を寄せ。こは問るゝまでもあらぜ。帝堯の聖あるも。身ひとつよして二十官の事を得せず。某大國を領すれば。細瑣の事と郎黨よ。打まかせずといふとゐし。殊よ彼郡司ゝ。佐々木の一族として。犬上坂田二郡の主ゝ。某絶て善吉が罪科の趣を去らざるゐあらねとも。讞斷ゝゝじめより。郡司に任しゝ。と回答をすれゞ。藤綱いもてる扇を膝よつき立。いゝるゝ所さありとも。郡司よ失あるとき。則守護の失あり譬ば今理世安民の。道乱をて。四海治るとなくゝ。北條殿の罪あらぜや。國を領て治らぜ。家を脩て齊ぜは。こゐ是主人の罪なるよ。一族郎黨といふといへども。賢と不肖をこづこのら鑒こ。忠と佞とをよく辨じて。民の父母といあすべきよ。人命をもて瑣細の事とし。譬を引てみづから許し。逸樂をのこ旨として。國の安危を見りへらずゝ。何をもて守護といゝん。飛札を呈してこのよしを。鎌倉殿へまうさんや。今一度うげさまゝらん。と詰り問をて滿信ゝ。後悔忽地氣色ゐ顯を。又いふよし[illegible]あかりしかゞ。主の後方ゐ列居たる。佐々木の家隷保田。村井田等。當家の安危と堂に汗握りて。おろる〳〵すゝみんで。主人滿信冠よして。應答辞を失ひぬ。されば祖先の舊功をもて。恩免を蒙ぶば。幸これよまとものあふじ。といふよ滿信やうや

くよ。されよかへりて頭を擡。身の非を飾るゐ似されども。某全く逸樂を事として。賞罰を郎黨ゐ。任しさるよいねど。坂田犬上の兩郡い。郡司ゞ父の時よりして。久しく管領にるとも。さあらんとい思ひものゆゑ。滿信をづうら讞斷せで。罪を鎌倉殿に得たり。砥公もしそれゞしゞ。愚よして年いと少きを憐を。みづから獄を讞決郡司が奸曲を糾さまいゝ。實ゐ公私の幸ゐらんと肝膽を吐。慚愧して。主從頻りよ勸解よゝれば。藤綱聞てうち点頭。されば近江路へ入りしより。こゝろをつゝてこをを見るよ。賤婦山兒のするまでも。秀義以來の舊法を。守るものいと多くり。祖先の德の致すところ歟。判官弱冠ありといへとも。家ゐ忠臣あり。國ゐ孝子烈女あり。ゑうるよ今。一言の失もて。不平の沙汰よ及んや。善を勸め惡を懲らし。寃民を救いん事い。當家の主從よ乞るゝゐ及ぜ。北條殿の命を稟て。鎌倉を出しより。藤綱ゞ當職なれば。且くこゝよ逗留して。綜の邪正を讞斷し。もし私曲あるとさい。郡司といふとも。るすべからぜ。こゝろ得さる家隷を。多賀へ遣し。一件れものどもを。召よさしさまへといへば。滿信主從大よ歡び。村井田八郎ゐ。夥兵十人さし副て。多賀郡司と。罪人善吉馮司等を將て參れとて。これを遣し。又別よ。八を二夫へ遣して。お六等を召しゝり。かくて滿信い。その

日言砥よ饗應せんとて。山海ゝ珍味をつらね。主人みづうら配膳して。叮嚀よ勸むれども。藤綱ゝこれを受ず。某弱冠の昔より。朝夕飯のあいせ物よい。乾さる魚と。燒鹽のを。絶て美食珍味を嗜まぜ。ゑうるゐ今このくさ〳〵い。脾胃に熟ざるものゐるを。强てさまいらば身にあたらん。不禮いもるしたまへとて。湯漬の外い箸ざるもとふに。滿信主從。又土產と号して。美濃の八丈。信濃の麻衣ゐんど。霰表夥を贈をども。藤綱又こををも取らに。某素より節儉を宗とする事。財を弄ん爲ゐ。あふに。君の爲よい非常ゐ充。又親族朋友の。急を救ん爲ゐれば。見ふるゝとく。衣裳い貴布の直垂よ。布の奴袴を穿つ。絶て美服と被さるとゐし。夫古の道ゐる人い、人よ贈るゐ言をもてす。藤綱今ゐるこの爲よ。一言のゝりものゐり判官よく受おさめて。民を憐をさまひゐば。こをゐまに饗應ゐし。ゑのるとれい。ゑをふの引出物。うけ納めて何ゝいせん。極めて路次の煩へとて。その目錄ざも見ゝへふに。をさ〳〵郡司等を待不とゐ。次の日。村井田八郎い。郡司とともよ。罪人善吉。馮司遲也等を得て。多賀よ歸り。お六與惣白眉等も。二夫川より參りけり。當下藤綱い。滿信と諸共ゐ。文注所へさち出つゝ。青砥い南よ坐し。滿信い主坐よ着。大床子を一階降りて。多賀郡司い右ゐあり。五十子七郎。淺羽

十郎等ハ左わあり。おの餘佐々木の家隷等。青砥ゲ從者居あがをて。いと晴やゆあるそゲ中へ。夥兵五六人。善吉馮司遲也等わ。索りけゝるまゝ引立て。蠶子れ下わ推居をバ。お六與惣白眉等も。齊一その傍ゝきり。青砥まづ。馮司遲也ゝ對ひて。いぬる夜梓川の上りゝて。砍殺されたる男女の死骸ハ。その頸おしといふあるわ。汝等ハんかわして。子どもらありと知りたるや。と問バ馮司ハ眼を開ク。軀のそわてひへども衣の色ハいふもさらえ。帶脚絆あんどさへ。昌九郎お丑等が。被さる衣裳に一点さがハぞ。況て彼等その夜より。絶て歸る事あゝを。バ。地を打槌ハ外るゝとも思ひわやまつとそあらじ。といいせも果ぞうち笑ひ。世ゝ面影れ似さるすら。絶てなしとそいひゲさし。味耜高彦根神と。天稚彦と相似さり。壹伎直根子が容止と。武内宿禰ゝ似さり。陽虎ゲ面貌ハ。孔子わ似て。何尙之顏延之等ハ猴に似たり。況ておあ玄衣裳を被さるハ。一鄕の中わもあるべし。もし彼軀ハ別人ゝて。後ゝ丑と昌九郎等が歸り來つるとありとも。誣られたる善吉ハ。再び生るとりあいぞ。そのとき汝等昌九郎と丑を殺して寃枉を。贖ふとも又何等の益あらん。陳そる所悉胡乱あり。と說喩せバ。馮司ハ胸を刺るゝ如。おのゲ病わ的中し。頭を低てものいいぞ。青砥左邊を佶と見て。やをれ善吉汝ハ又何の故に。烏夜ゝ續松を照らさず。梓川原を過りさる。と問バ善吉頭を擡。されバその頃女房六ゲ。怪しき夢を見ていひき。その夢ハ五年以前ゝ。小人鎌倉より歸る折。惡棍わ跟られて。盜難を脫れん爲。野上の旅宿を竊わ出。松山のわあたある。古廟わ ありせし夜。見さりし夢と異あらず。物を忌ハ婦人の情にて。こゝろわのゲいゝら。その夢を占さして。吉凶を問んと思ひて。申の比及に宿所を出しゲ。中途にして相識れる。二階堂の家隷に。井輕元二といふものゝ逢ひぬ。彼人ハ妻を將て。筑广の溫湯に浴庐わ。定りには去るよしあゝれど。妻の親族を索づゝ。多賀を投て赴くとて。妻をバ馬ゝ乘たるゲ。朝ざちの猛雨わ。その馬を逐ひ失ひて。ゆゝども〳〵遂ゝ得あいず。原來件の馬追夫ゲ。妻をバ取て走りしとて。殊更に周章し。走り迷ふ折あれバ。此彼の物のさりに。思ハぞも時を移し。別をて梓村へいもさしゝバ。かへるさにハ日は暮たり。暮く歸らんと思ひがゝねバ。篝火の准備せず。梓川原を過るとき。いたく物に躓きされどいと闇ゝれバそれとハ まらで。家わ歸りて詰旦。裳を見れバ血を蹤たり。庭を見れバ血を踏さる。草履の跡を石ゝ殘せり。いと〳〵こゝろ得りさけをば。穿て歸りし。草履をとう出て。打りへし見るゝ血ハ著ぞ。浩處わ多賀殿より。夥の兵士をさし向ふれ。小人を

搦捕して。笞るゝこと甚し。溺命のあに所か。訴人はゆが嫉み。親族あるゆ勘ゐ。爭ひて賣殺されんより。とやく死んと思ひ絶。梓川にて昌九郎等を。殺せしとまうしたり。と首尾をかちもなく。聞え上れば藤綱はつく〳〵と聞てうち点頭。それいいなる夢あをば六ゝこゝろゐけたゝと問ゆてお六と良人を見かへり。地方い定りに侍らねど。醫ば良人善吉い。烏帽子素袍ゆ裝束して。いと逞しき馬ゐ乘りひとり。曠野ゐ出たるゐ。前面ゐいさゝゐ川ゐりて。枕川と榜示を建さり。氷一面ゆ氷りつゝ。氷の上ゐ馬をすゝめ。北より南へゆさす程ゐ。兩の日輪閃き昇て。又氷中へ沒るとおもへば。氷い忽地裂と碎々て。氷二條ゐ流きつゝ。人馬もろとも氷中へ。沈ぬと見て覺侍り。五年已前ゆ見きといふ。良人の夢ゆ異ならねば。頻りゐ心ゐかゝり侍りしか。良人と勸めて梓村へ。その日遣らぎい裝へ。血を蹤ともおのらんものをと。いひ〳〵ていや酸鼻。後悔さこそと藤綱い。又善吉ゆうち對ひ。件の夢を合しさる。巫い何とういひし。思ひあいする事ありや。と問た善吉。さゝゐ。烏帽子素袍い官服なり。馬ゆ乘て氷ゐ落たるい。身ゐ禍あるべき祥。日輪い王法の蕭明ゆ比ふへし。北より南へ。ゆさゝんとして果さゞりしい。北い黑く。南い赤し。これい獄舍のくらきゆ繫れ。身れあかりをいひ解んとして得解がさきゐゝろありとぞ。如此占されてゐ。といふ間ゆ藤綱い。机案を磯と拍。その夢判事い一を知りて。いまゞその二を云らざり覺。夫易ゆ二坎と氷とし。又北とし離を馬とし南とす。南方の馬ゆ乘て。北より南へ渡ゐとさは。坎ゆ從ひ。離ゐゆきて。三メおゐ玄く變じたり。又離を中女とし。坎を中男とす。馬い左ゐ向ひて氷ゐ濕ふ。氷を左ゐして馬を右ゐし。玄かもその氷氷りつゝ。裂て二條に流るゝとさい。氷と馬と同字にて。共にこれ二氷の義ゑ。二氷ゆ馬をよそるとさゑ。是則馬の字あり。枕川と題せしい。枕は則頭の臺。頭い則上方ゆて上蠻の義に稱ひ。兩の日輪ゑ昌の字ゑ。人馬もろとも氷中ゐ。沈ぬと夢みしは。梓川原を過りしより。馬司昌九郎等ゐ謀られて。善吉い獄舍ゐ繫れ。馬司も又縲絏を。脫れざる祥ゐてそ五年已前ゆ善吉が。のくのごとき夢を見て。お の春六が又夢見しゑ。禍のよる所。一朝の事ゆあらず。ゑゝるときゑ。馬司い當夜。昌九郎等と示しあゑし。竊ゐ男女を砍殺して。その首を躲し。昌九郎丑が衣裳を。軀ゐ被せ。庭の石ゆ血さへとゞめて。善吉を誣さるあゝ。明白ゐ聞え。あげゆ。首伏せずや。と賣問い。馬司い驚く氣色あく。こい靑砥公の。冷諚とも覺ゆいず。いとも かしこき事あゞら。傳へ聞るとあり。前執權寅光寺殿。鶴岡八幡宮へ通夜しさまひ〻

る夢よ。老翁一人忽然と枕方に立あられ。政道を直くして。世を久しく保んと思へい。藤綱を重用せよ。と示現を蒙りさまひしかば。歸宅の後。八箇所の大庄園を。宛行ひさまひきぬど。廷尉これを受さまいず。物の實相あひ喩よ。如夢幻泡影如露亦如電。と金剛經よも說れていへ。もし某が首を刎よといふ夢を見さまいい。咎おくても夢の如く。行れいんずる歟。報國の忠薄くして。超涯の賞を蒙らんとい。物体おくいひて。推辭さまひし。とその頃人いひさるよ。善吉が事よのそ。夢物談を實事として。牽强附會の說をおすまで。馮司をバ憎そさまふぞ。こうなぐさくいひ。と言巧よ挾すれバ。藤綱呵々とうち笑ひ。汝さかしげわ說破れども夢よい虛實あるとを考らぞ。思いずしてよく中る。これを名つけて正夢といひ。怪き夢を奇夢といひ。思ふて中るとおきを。虛夢といひ。思夢といふ。ひのし先君寶光寺殿。いのにもして藤綱が俸祿を增バや。と日來思ひたまひしかバ。さる夢を見たまひゝん。是所謂思夢ゝ。虛實あり。故ふれてきを受ず。又善吉お六が如きい。五年前よりのゝるべき。禍あらんと思いんや。おもいずしてよく中をり。是い奇夢わて奇怪の夢。中れるとゝい。正夢とおる。故よわをこれを取をり。上古唐山周の時。既わ占夢の官を置り。大卜三夢の法を掌。第一わ致夢。第二

よ奇夢。第三を惑涉といふ。このとおさ〳〵周禮わ見へたり。又別わ五夢あり。正夢といひ。愕夢といひ。思夢といひ。寤夢といひ。奇夢といひ。懼夢といふ。正夢い則ち正うして。よく中る夢をいふ。愕夢い則驚とあり。よりて夢わ見るをいふ。思夢い則ち思ひ寐の夢。寤夢い則目覺て見る夢。喜夢い則喜ぶとあり。さて夢よ見るをいふ。懼夢いおそるゝとありて。夢わも懼を泣をいふあり。ゝかれバ夢い一事をもて。その處實を推べかふず。こをを史傳よ考れバ。神日本磐余彥天皇。神武い。夢わ天照皇大神。武甕雷神と謀りて。劍を下したまふと見て。丹敷戸畔者を誅したまひ。活目入彥五十挾茅尊垂仁天皇い。御諸の山の巓よ登りて四方よ繩と組。粟食雀を逐と夢見て。帝嗣わ定らる。殷の武丁い夢わよりて。賢臣傅說を擧用ひ。周文王い夢よよりて。九十九の齡を考れり。この餘。詩書禮經わ載する所。毛擧に遑あらねど。おそらくい汝に說とも。馬の耳よ風あらん。かくいいへど。こを只夢の虛實を辨じて。汝等が罪を決ずるわあらぞ。終よい彼昌九郎と。丑を縛捕て後よ。斯の夢の中たると。中らざるをあるよしあふん。その時を等かし。といいるゝ伎倆の破れ口。兎を鉗て上臺馮司い遲也と目わ目を注しつゝ。思いぞ大息をつきわげる。青砥い又與惣白眉等ようち對ひ。若曹善吉を。水火の中わ救

んとて。日來苦心ありたりと聞り。そいいかある所行をしたる。思ひあいする事いあさや。と問れて與惣白眉い。些搔る額を拊。善吉夫婦ゞ心操ゐ。愛てい生育のわゞ子より。いと惜しく思ひしへゞ。財を擲打。產を破り。いくその艱苦ゐ迫るとも。彼が命ゑ換らるゝ。物あちゞとゝのへて。救ひ出さんと讎する折。白眉ゞまうせしい。千金の子い市ゑ死ず。吾儕素より多賀殿の。内の人ゑいあるよしあり。苞苴を進らして。善吉がうへを密やゝのゑ。憑ゞやといふゑまゝし。形のごとく物せしゐ。善吉既ゐ首伏して。人殺れ罪定りされゞ。助命の事い稱ひらさし。但獄舍へ赴きて。碗飯を饋るとい。妻子の乞ゐよるべしとて。まづこの事を許されさり。さらゞ彼方ざまゐ。ます〳〵媚おゞ善吉が。よしや首伏ざるとも。首を續るゝともやあらん。とそのあさ事も憑きて。廼弟い路費の金錢。殘りおく齎しつ。某の日の黄昏ゑ。多賀殿へ參ると。摺鍼蘋の半腹ゐて。三個の賊ゑ撞見て。善吉が爲ゐ命の綱と。思ひし金を奪れゐき。その爲体い箇樣々々とすべて匿さず聞えゐぐれば。藤綱ゐきを聞もゐへず。忽地ゐ聲をふり立。多賀に知己ありといふとも。故おく物を贈る事。潔白の所行にあらぜ。郡司いいのでこれをゑるべき。嗚呼おるとをいふものかゐ。と飽までゐいひ懲らし。左右を佶と見ゐへれゞ。郡司

い面色燒が如くやゝ。咳ゐ紛らしつ。頭を低て默然さり。青砥このさねて。汝等おどて曉らざる。一鄉に富るもの。好て鳥を放つときと。鳥を捕て賣ものあり。捕るゝ故ゐ隕る鳥あり。去のらゞ人の善行功德い。放さず捕ざるゑますとあし。與惣白眉相謀りて。善吉が爲ゐ苞苴を多賀へ贈らんと思ひしも。好て鳥を放ものへ。鳥を捕て賣ゑ同じ。盜る錢を僧ゑ施し。人を殺して塔を建るを。作善功德ゑと思ふ白物い。好て鳥を放さんとて。鳥を捕して買ものゝ亞ゑ。迷ひ孰の深しとせん。善吉果して罪おくい。與惣白眉苞苴を。竊に多賀へ贈るとも。その失い許すべし。善吉實ゐ罪あらゞ。人を殺して塔を建る。功德といふとも許しゞさし。こと後日の沙汰ゑ及ばん。抑白眉と。件の賊を惡。認さる歟いのゐぞや。と問ば著さる掌をもるべ。とじめ出さる一人ゝい。盜賊の大將軍ゑやゐらんぞふん。手拭をふかくして。面を裹ていゐ。黄昏のとなれゞ。その面貌い認いいず。背ゑを出たる兩個の賊い。野伏とおぼしきが。これをゞ認いき。其骨相い如此々々おり。箇樣々々と聞ゑ上をゞ。藤綱筆を採て。いふ隨ゐ書寫し。汝等ゞふいまづ退出ゑ。丑昌九郎等ゞ存亡を。搜得て又召とあらん。善吉馮司遲也等い奮のごとく獄舍に繫ん。渠引立ゑ。と下知すれゞ。ゐるじ滿信主從は。青砥ゞ才ゐ感伏し。お六い率をて

ゆく其人を。物いひさげに目送れば。共ゐ見のへる馮司遲也い。三ッ四ッ脫さる齒を切りて疾視目子を光らする。白眼青眼の黑白論。この日の廳は果ゐ々り。くゝりしかゞ藤綱い。馮司等ゞ奸計を。明ゐ察すといへども。いまゞ昌九郎お丑等が。存亡を詳ゐせざれど。佻々しく馮司等が。罪籍を定めず。忽地思ひよする事ありて。竊に淺羽十郎よいふやう。憑ゐされ。信濃路を巡歷して。諏訪の舵ごの館ゐ止宿し。上下の神社へ詣しとき。年をの兄男女二人。甲斐峯のこゝへ走るあり。その爲体間道を問て。人をおそるゝものと見えたり。この故に引捕て。その來歷を問ばや。と思ひしが。這奴い色よ惑ひつゝ。走るよこそと思ひかへして。そごのまゝよ見ゆるせしが。今更おもへば女を將ゝる。件の旅客が面顏。些馮司ゐ似さりしぞや。ゑのらば男い昌九郎。女い丑のも去るべのら走。故五七人の夥兵等と。又昌九郎と丑とを認とる。二夫川村の莊客を將て。案内とし。大凡信濃より甲斐より。相摸までの客店を穿鑿し。先より先へ跡を跟て。詳ゐ往方を問求め。搦捕てとく歸れ。這奴等が往方い鎌倉あるべし。そべて世の浮浪人。身の經營ゐ赴くもの。多くい繁華ゝ地を出ず。京あらざれば鎌倉あり。とくゝ。といそがせど。淺羽十郎こゝろを得て。夥兵五七人を將て。まづ二夫川へ赴き。昌九郎等をよく認れる。馮司が鄰家の莊客を案内としつ。信濃路を投て走もきけり。却說昌九郎お丑等い。いぬる夜梓川原ゝて。父馮司よ別れしより。お丑をば馬ゐ乘し。竹輿ゐ乘し。又あるときい歩行よりもいそゞして。夜を日ゐ續て走る程よ。六十余里を四日よ走りて。下諏訪まで來ゐけり。甲斐國へ入るときい。間道多て。潛ぶゐ便よければ。頻りゐお丑をいそがせども。この時お丑い長途ゐ疲勞をて。その夜寒熱往來し。忽地死ぬべく覺といふゐ。昌九郎い驚き患ひて。己とを得ず。諏訪の旅店ゐ逗留する程ゐ。八日ばかりよ去て。お丑が病著おこたりぬ。翌いつとめて。この處を立んとて。その日午後て。昌九郎いお丑を將て。潛やりゐ宿を出。秋の宮へぞ詣ける。彼等何事をか祈りけん。神明いわで不善の人よ。禍を降しさまふべきこの時淺羽十郎い頭梨の地の茶店よて。下の諏訪ゐる客店ゐ。夫婦とおぼしき旅客。逗留して在と聞て。殊更ゐ歩をいそがし。二夫の里人を先ゐ立して。喘々來る程ゐ。昌九郎等が秋の宮より。下向するよゆきあふたり。案内の二夫人指して。渠こそ昌九郎お丑あれと。告るを聞て。件の夫婦い駭き騷きて。狩場の雉よ異ゐら走。路を求めて逃んとすれば。淺羽十郎夥兵に下知して。失庭よお丑を引捕て。彼々と縛させ。その身い昌九郎を追蒐つゝ。項髮を引爬て。仰さまに引倒せど。臥な

がら刃を拔て。淺羽が向脛砍らんとするを。跳踰て踏落し。押て些とも動せぢ。忽地索をかけたりける。桑下某生再說。靑砥藤綱い昌九郎を丑が往方を索て。搦捕て歸れとて。淺羽十郎等を。信濃路へ遣しつ。又いぬる日摺鍼嶺にて。白眉の長が金を。奪ひとりたりといふ。三賊を捕んとて。五十子七郎に。物熟たる兵士三四人をさし副て。毎日に彼此へ出せしゞ五十子等い姿を變。貌を變し。迭ゐ暗号を定めつゝ。二町三町引別れて。大堀川よりあなた。醒井柏原の驛路を徘徊する事。六七日ゐ及べども。それかと思ふものを見ぢ。有一日五十子七郎い。ひとり摺鍼嶺を越る程よ。と見れゞふりゑる松の下に莚を布て。野ふせりの乞兒ゐやあらん。おどろ〳〵ゑをのこ二人。さし向ひつゝ酒を飲てをり。ほとり近くあるまゝよ。山風よ吹おくられて。酒の香芽。と鼻ゐ入りしゝゞ。七郎思ふやう。這奴等が今飲酒い。茶醡漉片白の類ゐあふぢ。その氣を嗅ゐ。これ寂上の諸白あるべし。這奴かゝるざまをして。この旨酒を喫する事。不良の錢を獲たるよあらぢや。まづ探りて見ん。と思ひて。莞然とうち笑つゝもるしたまへ。といひかけて。席の端へ尻をうけ假蘇民ゐいひよりつゝ。口ゐ涎を流すまで。彼等が飲酒をさし覗き。卒爾あるとあがら。吾儕い生得て。人あみあらぢ酒を嗜り。ゑかるゐけふい

山路を越來て一滴も咽を潤さぢ。物ゐしゐ折あるゐ。今汝達が。酒もりするを見るゐ得堪ず。餘分あらゞ一二碗。わけ與へたまへといへゞ。野伏等うち笑ひ。れも人も嗜むといへゞ。もろ共よ酒中の餓鬼あり。折ふし酒よ乏かふぢ。れけ飲しまゐふせんとて。一碗を與しかゞ。五十子い半飲て。舌うち鳴ふし。美濃路い養老の名ゐしおひて。酒の佳ところあれど。この諸白い得がたのるべし。汝達いかあるる鳥がゝゝりて。かゝる驕奢を極めたまふ。ゑらしたまへ。と熟やかよ。問ゞ頭をうち掉て。いゝでかいさるとあらん。物ゐぢいいぢよ傾けたまへ。と輒くこゝろを放さねゞ。七郎醉たるふもゝちして。腰を探りて一枚の圓金を閃りと投與へ。これい當坐の酒價あり。かく昵しく相譚も寶ゐ一樹の蔭よして。一河の流を汲酒も。他生の緣ときくとれい。物つゝましくも思いぬかし。れい元來盜賊ゐて。美濃と近江を宿とせし。彼船坂が子孫あれど。果敢々々しき支黨もあし。れをよ等しき徒あらゞ。志を語らん。と思へど無下ゐいわりさをず。この摺鍼嶺をゞ。毎月よ越るものから。汝達をよくも知ふず。その名を知らしたまひね。と他事もあくいひよれゞ。野伏等い醉ゐ紛れて。呵々とうち笑ひ。さ聞てい馬ふあもあり。れい拯平。彼い鼈平と呼れて。この年來信濃路よて。あるとれい駄賃をとり又

馮司
梓川の危難救ふ好計を廣ゝそ

梓川
昌カ

あるとたい引剝して。五七年を過よりれど。獨汗の大衣。臂力ハなし。擊劍ハ絶てゑらぜ。去いざしたるともあけれバ。其處わも終わ住ゐびて。近ころハ。この山下へ巣をかへたり。去るよいぬる日。俄頃よ人よたのまれて。金駄懐中せー。老人をこゝよ埋伏して。よろしき働去たりしかど。三ッが一ッをゐけとりて。十日あまり飲酒す。酒の因縁件の如し。と舌もまハら去ハ二人して。いと囲ごりがよ物りたるを。五十子楚と間ぶ。衝と身を起して兩個の賊を左右りへ丁と蹴倒し。天わ口あし。身の罪をそづから告る自ゆ。自得。青砥殿の命を稟て汝等を搦捕る。五十子七郎を去らざるや。と罵られて拯平鬮平。うち拯さつゝ身を起し。側よよせたる堅木の杖を。閃して打んとするを。五十子ハ飛鳥の如く。受あが。し潛り脱。二條の杖を奪ひとりて。肩腰の嫌ひあく。打あやましてひとりゝよ。掴起して索を被。暗号の笛を吹く程よ。且くして駄兵二人。この所へ集合しのバ。七郎則綷の趣を說ゑらして。この癖者を觀音寺へ。將てゆきたまへ。といそがせバ。駄兵等ハ嘆賞して。拯平鬮平を引立つゝ。勇進て走去けり。かくて五十子七郎ハ。彼草賊等が支黨の。隱をとをるともやとて。山路を彼此とうちめぐり。番場醍井の驛路を過りつゝ。梓川を三度渡りて。梓村の向ひある。田畝をゆく程わ。

この地方ハ。梓川の上よして。川水溢れて。田よおちいり。路さへいとゝぬかりけり。時よ二月も。とや纔よありけれど。今茲ハ閏月あれバよやをり〳〵淡雪ふりて。凍解ず。まだ鋤ぬ田ハ大かた氷りて。群居る雁と見るだも寒し。折ゑもあれ。榛林わ鳥さゑぎて。かハ〳〵と鳴しかバ。彼何を見て求食よや。とこのをとりへ來て見れバ年紀ハ三十わまりよして。旅やつれせし一個の武士。深田の氷をうち碎きて。斬られたる二ッの頸を。只今引上たりとおぼしくて。男の頸へハ目もかけど。女の頸を膝よ抱きて。潛然と泣わけり。五十子ハ。この形勢に思ひあハする事あれバ。件の武士ようち對ひ。旅客それハ和殿の妻よや。仇を索て擊んとあらど。こゝあたわ便宜の事多ゆり。それハ巡歷使の雜色わ。五十子七郎といふものゝ。いぬる日この川の上りよて。男女を砍殺し。二夫の村長善吉を誣たる奸民。馮司昌九郎等が一件の事よりて。藤綱今よ觀音寺の城中よ坐するゝ。綷の顚末をまうさるべし。といへバ旅客形を更め。原來その名を聞及ぶ。五十子ぬしよてをハせしか。某ハ鎌倉ある。二階堂權頭が家隷よ。井輕元二といふものゝ。又推量のとく。これあるハ。ゐ〻妻空蟬が首級あり。いと耻しき事あがふ。この空蟬ハ當初化粧坂ある遊君ありしゞ。故ありて迎とり。年來を經てハひき。去か

るよこの婦人。幼稚とき。勾引光棍よ奪ひ去ふれて。化粧坂へ賣ゝれしの〻。親同胞の名いさらこ。舊里だゐも楚といまらぞ。護身蠶よ近江ある。多賀の社の神符ありをと。父の手跡とゐぼしくて。云々と。寫したる。臍帶をのゑ心あてゐ。索て親よ環會〻。世よあるかひとうち歎く心操病しく。筑磯の温泉ゐ浴すとて。主君ゐ身の假をたまいり 妻を携へてゑる〻と。近江路へ入るその日よ。箇條々々の事ゐよりて。馬逐夫よ。空蟬を掠奪られ。彼此と索る折。鎌倉よて相識きる。善吉といふものよあひぬ。をかれぞも猶妻の。往方を〻をるよしゐくて。いさづふゐ夜をあかし。天明て聞ば梓川よて。斬殺されさる男女あり。走りゆきてこれを見るよ。その死骸ゐ首いあゐれど。衣の色いゐが妻ゐらぞ。こい空蟬ゐいあらざりゐり。と些い心休ひて。立歸らんとする途ゐ。日來空蟬〻身を放さで。その日まで襟よ掛たる。護身蠶を拾ひよ記。疑念ふたゝびこゝゐ發りて。事の趣を國の守へ。訴んと思へども。素より潛行あれ〻主君の名を告んと。影護所爲あれ〻。こをさへに默止つゝ。又善吉〻宿所を索て。わがゆへと憑を聞る。相談敵手にあさ〻やとて。次の日辛くして索當。隣る人よ彼を問〻如此々々の事よりて。多賀殿へ搦捕れ。家よい女房のをゝといふ。その女房を〻いまだをらぬ〻。竟ゐ善吉

〻宿所を訪ぞ。妻の存亡見定めぞば。鎌倉へいかへられとて。十四五日彼此と。惑ひあるさてけふはからぞも。深田の水ゐ閉られし。二ッの頸を引あげ見ぞば。一ッい正しく妻空蟬一ッい妻を奪ひ去たる。馬逐男の首級あり。氷の中ゐありしかひゐい。日來い經ても朽もせず。爛もせね〻吾妹子と。をれども解ぬ疑ひを。ゐ邊よよりて散しあ〻。追薦これゐまそとあらじ。といふよ五十子うち點頭。目今和殿の物がたりよて。符節を合する事こそあれ。觀音寺へ參りゝまいゝ。綽自づのら分明あふんとく〳〵。といそがし。立れば。元二い やゞて二ッの頸を。袱よ包て楚と背負ひ。遂よ七郎よ誘引れて。觀音寺の城へ趣をゝり。をこのるよこの日淺羽の十郎等い。昌九郎お丑を搦捕て歸りつゝ。途ゐ五十子七郎よあふて。迭ゐ勞ひ。此彼齊一城ゐ入りて。淺羽い昌九郎等が。首伏の趣きゐ演說し。五十子い井輕元二〻。頭末を告しか〻青砥まづ拭平靄平を引出さして。首伏の趣を糺明し。次よ昌九郎お丑を引出さして。綽の始末を責問ゐ。前後の首伏ゝがふとあを。よりてまづ。四個の罪人を〻。おの〳〵別よ獄舍よ繫し。さて井輕元二を召出して。其來歷をたづぬるゐ。元二〻口狀し。嚮よ五十子よ述たるよおゐ。よりて七郎して。二ッの首級と。護身蠶を受とらして。彼をを城外の客店ゐ退し。次の

日。お六與惣白眉元二等を文注所へ召よし。又善吉。馮司遲也等を引出さするよ。この日も主人滿信いさらん。多賀郡司。村井田八郎。五十子七郎。淺羽十郎。すべて佐々木青砥の家隷夥兵等ゐ及ぶまで。その席よ侍ると。前の日のごとし。當下青砥は馮司ゐ對ひて。れ向に二夫の里人の老さるを。召よしてさつね聞しゐ。汝が子い昌九郎のそあふぞ。又一女兒あり。これゞ幼稚きときゐ。汝多賀祭祀見よ將てゆきて。人に奪ひとられしよを。絶て存亡をえらぎと いふは實ありや。女兒の名をゞ何と呼び去と。問れて馮司い肩根をよせ。思ひのゝぬとを問せさまふものあ。伴諚のごとくこの年來。絶て女兒ゞ往方をえらぎ。名い工虫と呼びてひひき。と心もつこで答れば。青砥このさねて。件の工虫は相州化粧坂ある。風流藪澤屋の遊女とありて。空蟬と呼れ。年期果て鎌倉ある。二階堂が私卒。井輕元二よ歸さを。この臍帶認つらん。と護身囊を推ひらき。五十子七郎ゐとらすれゞ。五十子やのて推向て。馮司ゞ眼前へさし出すを。熟視てます〳〵怪ぞ。現臍帶に寫せしは。小人が手跡ぞ。こいいのよして獲さまひる。こゝろ得のさしと。咳ゞゞ。青砥又遲也よ對ひ。汝よは。前夫がうましさる。鵜太郎といふ男兒あり。稚き時赤坂ある。主の家を逐電して。外父善三に債を肩し。うくて夥の年を經て。丑が離別せらるゝ日。善吉が宿所よて。汝等。彼鵜太郎ゐ環會しゞ。後遂よその往方をえらぎ。と亦是二夫の里人等よ聞り。抑鵜太郎は。その年紀は今いくゞくぞ。面顔はいのありゝ。と問ば遲也も訝りつ。現ゐが子鵜太郎は。三十余歳よありぬべし。面色黑く。眼鋭く。鼻はひゝらき。鎌髯青く。髮い蓬〳〵て眼下ゐ。大きやうある黑子あり。又左の耳の裏よ。刀瘡の跡あり。とおばへいひし。ゞとゝふ間ゐ五十子淺羽。首桶二ッと携來て。寶子の端ゐ開さり。青砥扇をとり直し。汝等この世の思ひ出ゐ。絶て久しき子どもらと。面をあはさし得させんぞ。とく〳〵。と下知すれゞ。五十子淺羽首桶の蓋を左右へうい取れば。是則空蟬と。馬逐夫ゞ首級あを。遲也いゐゞ子鵜太郎ゞ頸へと見てゞれゞ。忽地よ氣色變りて。呆るゝと半晌ゞのり。と問ふよしもあかりけり。青砥小膝を立直し。奸賊ぞも思ひえるや。馮司いいぬる夜梓川にて。惡棍よ勾引され。猿轡を被ふれし。女子を一刀ゐ砍殺し。又昌九郎もろともゐ。件の女子を引摺來たりし。荒男をも砍殺して。こゝゐ惡念增長して。二ッの頸を川へ投棄。昌九郎と丑が表裝を。男女の軀ゐ被更させ。善吉を誣たりし。因果覿面。脫れぬ惡報。殺したる旅路の女子い。馮司ごの女兒空蟬へ。勾引光視い。丑ゞ兄鵜太郎あれぞ。くらき夜あれゞ迭ゐしらぎ。父い娘を手づ

から殺し。子ハ又妻の兄を殺して。恩義ハふかき親族の善吉を。推倒し。舊の如く村長よあらゞやと較計毒惡。汝よ出て。汝ゐ反る。昌九郎等ゞ首伏ゐよりて。當夜のとをよくたりぬ。嚮ゐれ淺羽十郎を遣して。昌九郎丑もろ共よ。下諏訪にてこれを生拘り。又摺鍼嶺ゐて。端ゐく馮司よ相譚を。白眉ゞ金を奪ひとらしたる野伏。拭平靄平をも捕獲たり。且空蟬等が頸ハ白と呼倣たる。深田の中へ流を入りて。氷よ閉れしかゞ。腐爛せゞ。良人元二ゐとりあげられ。鵜太郎が頸もろ共。廳前ゐ聚合と。照々たる皇天。この結局を作ゐ似たり。奇哉空蟬ゞ。乳名を工虫と呼れし。工虫ハ則たくめるむし。穴單を添るとさハ。空とあり。蟬とある。諺よいふ單穴の狐よ劣る親ハ毒虫。山路を出て水ゐ沒せし。鵜太郎ゞ名も虚しうらず。氷を碎きて獲たる頸もて善吉が。罪釋たれゞ。六も夢をし頭座川。氷れる氷よ人馬陷り。昌字を分たる。日輪二ッハ偽陽の隱謀。悉皆その應あり。かくても正夢ゐふざるか。見よやこの空蟬ハ。舊里の名も去らざれば。多賀の神符と臍帶よ。書つけたる筆蹟を。よゝがゐ親を索んとて。良人元二よ携られ。舊里近く來つれども。あれでぞ歸る黄泉の旅。妻の仇人ハ妻ゞ父。增の元二もこゝゐあり。斬れて日を經し二ッの頸を。とり出したる田畝の字。鬼頭も名詮。自性。六ハ則阿の正數。婦德愛たき未曾有の賢妻。夫ハ去かも三世の善人。祖父は樂善。父は善三。その子よ臻て積善の。善吉と呼ぶハ虚名ゐあふゞ。今ぞ釋さる寃枉。善吉素より咎ゐしとて。その縛を釋除せ。坪のあゐたゐ引居たる。昌九郎ゐ丑。拭平靄平を呼出して。馮司遲也等ゐ見せしかゞ。殘忍無歇れ上臺あれども。方寸摧げ腸斷をして。今ハ半句も匿し得ず。梓川の事ハさらゝ年來の隱慝を。おちもおく首伏し。又その夜さり善吉が。おあじ河原を歸るを見て。草履のうらを血ゐ浸し。善吉ゞ庭の卷石へ塗ふせた事。摺鍼嶺よて。拭平靄平を相譚人として。白眉が金を奪ひとゞ。これを郡司よ贈りつゝ。善吉が死刑をいそがしたる。一五一十をまうせしかゞ。遲也も脱るゝ所あくて。舊惡さへゐ首伏し。ゞ子は及ゞぬ孝順の。姪善吉をいたく憎て。をさ〳〵馮司昌九郎等を。村長よせまはしくて。日來ゐ丑等もろともよ。奸計をめぐらせしよしをいふ。事の趣。己前昌九郎とゐ丑が首伏よ符合せしかゞ。罪籍こゝよ定らる。現惡人の爲ゐ禍は。善人の福ゝ。ゐ六與惣白眉等ゞ歡びは。比んゐ物あかるべし。そゞ中よ善吉ハ。拭平靄平を見て訝しげよ。又つく〳〵とうち目護れゞ。青砥も又これを。訝り善吉ハ。そのものどもを識たるの。と惶聰問をて。さンハ。此ものどもは往よ小人。鎌倉よりかへるさ。物あるをよ

くまりてや。寢寤の里のゐとりにて。故あく鬪諍をまうゞたる。癖者等ゐ似てい。と應まうせゞ。その事わらん。這奴等は近ころ信濃より。近江路へうつり來さる。野伏の惡棍あり。藝ゐい信濃路ゑて汝を苦しめ。後ゑい摺鉞巔ゐて。白眉を惱したる。天罰人罰いかで脫れん。夫他の妻を犯し。こゝを奪て足をりとせず。竊ゐ善吉を。殺さんとまたるものは。昌九郎あり。又飢渴を善吉ゑ救れし。親子が再生の恩を思ゞず。良人の金を盜つゝ。密夫ゐ取らし。更ゐ密夫の妻とありて恥とせず。まらずして兄を害し。更ゑ夫の惡を輔て善吉を殺さんとせしものい丑あり。がゝれゞこの奸夫毒婦。その罪尤大あり。宜梓川ゑ梟首そべし。又年來善吉が田園を横領まて。村長さへゐ推惑。おのが越度ゑよりて。村長を止られたるゐ。却善吉を媚く思ひて。おさ〳〵毒惡を事とし剩拭平齶平を相謀て。白眉ゞ金を奪ひとり。これをもて郡司を誘ひ。速ゑ善吉を。殺さんとしたるものい馮司ゑ。その罪すべて死刑ゐ當れり宜拭平齶平と共ゐ摺鉞巔ゑ梟首そべし。又年來夥の夫をかえて。岐嶋路ゐありし日。原い主ある。良人和五郎ゞ病著をいぶせく思ひて。女兒丑と密談し。丑ゑい密夫を誘引しつゝ。母子和五郎ゞ衣裝金錢を盜みとりて。逐電し更ゑ善吉ゑ婆るゝゑ及ひて。丑と昌九郎と姦通するを。知りつゝも禁めゞ爲ゑい姪ゑける。善吉を誣たるものい遲也あり。かゝれゞ死刑ゑ當るとゐへども。善吉ゞ孝順の誠心ゑ贖得さし。一等をくゞして追放べし。鵜太郎い。素より積惡の癖者あれども。既ゑ馮司昌九郎等ゐ殺されたれゞ。罪科その沙汰ゐ及ゞぞ。又坂田犬上兩郡を管領して。ゐは足とをまらず。苞苴を貪りて。幸なきを殺さんとせしものい郡司あり。宜所領を召放て。生涯閉居せしむべし。就中善吉が人とあり。孝子ゑ。義男ゑ。行狀一點の瑕瑾あし。まかのみあらぞ善吉い。癈たる家業を興さんとて。年來苦心して貯祿たる。百五十金を惜とあく。遲也と鵜太郎丑等ゑ分與しい。義ゑ仁ゑ。斯て彼等と絶交して。後の禍を禦たるい智ゑ。丑を昌九郎ゑとらして。見かへらざるい信ゑ。罪あくて獄舍ゐ繫れ。怨言あきい禮あり。溥命と嘆じて。死を決しい勇あり。その五常ゑ稱ふとかくの如く。賢ゑして又至善なるものゑ。よろしくその德行と。門閭ゑ表して。彼此とあくしらしむべし。且當座の褒美として。砂金二百兩と。大小の刀を賜ふ。夫婦まず〳〵德をおさめて。里人を敎諭せよ。與惣白眉等。よくその人を知りて。善を助け。義ゐ依て財を惜ず。その心操又賞すべし。井輕元二い。妻空蟬の故をもく。且く召

よするといへども。可もおく。不可もおし。おのゞの隨意鏃倉へ。歸るゝを許すものゝ。是併執權北條殿の恩澤ゆゑして。守佐々木氏が。善政の及ぶ所ぞゝし。衆皆てゝろ得ゆへ。と明斷既ゆ事了れゞ。村井田八郎等。走り蒐て。郡司が腰刀を奪ひとり。素袍烏帽子を剝とりて。一室の中へ閉籠れゞ。五十子淺羽い夥兵等ゐ昌九郎。お丑。馮司。遲也。拯平。鼈平を引出さし。摺鍼嶺。梓川原。二ケ所ゐおゐて。首を刎。その首級ともを斬かげたり。是より先夥兵兩三人。遲也ゞの縛をとき除きて。城外へ追放せゞ。善吉い身ゐあまる。國恩の忝きゐも。心ごゝろゐて嫉遲也ゞ。子を殺し。家を喪ひ。道路ゐ迷ひやすらん。と思へゞ今更痛しげれと。私ゐ救ふべうもあらず。被物を賜いりて。お六與惣白眉もろとも。藤綱滿信を拜謝しつ。二夫川村へ歸りけり。これよりして件の村を牛打村と呼ぶゐおん。二夫川舊い入川ゝ。こきも又。お丑ゞ夫おりし。善吉と昌九郎が。淸濁を褒貶し。入と二夫と音相似さきゞ。好事の者文字をのへて。二夫と唱牛打といふよしい。いさくお丑を憎ゞゝ。さる程ゐ。遲也い彼此を呻吟つゝ。身のふき所おさまゝゐ。梓川へ身を投たりゝくて。雨夜ゐい彼川原ゐ。鬼の泣壁聞へしゝゞ。善吉いたく哀とて。法華堂ゐ塔婆を建。又毎月ゐ經を讀して。なき。人々の菩提と吊ゐどゐ。さるあやしみもおくおりつ。これゝの事。都鄙ゐ聞へて。善吉お六ゞ芳名。いと高くおりゐゞれば。夫婦い二夫川村ゐおりといへども。彼岐岨れお六櫛い。ますゝ世の人翫て繁昌せり。うゝる禍ひのこおらで。お六ゞ。腹ゐ。子ゞから夥擧しゝゞ。善吉これらが。成長の後。家子にい二夫の村長を嗣せ。二男い與惣褒ひとりゝ。野上の客店を相續させ三男にい。父善吉ゞ母の姓。芋環氏を冒させしに。これと樽水の村長ゐなりつ。四男にい。母お六ゞ姓。森村氏を續し。母が舊里へ家を遣て。酒店を開かせしに。こきを和合の酒と唱てその名高くおゐにゞり。かくゝ善吉お六い。老後に岐岨の櫛店へ隱居し。末女ゐ壻を招て店のあるじとす。白眉の長にい子おし。妻は先さちゝ身まかりつ。五十年の非をおりては。遊里の生活疎しとゝ。さゞかゐの家產を棄。頭剃こぼちゝ。善光寺へ退隱し。生涯行ひすませしとゞ。

玄同陳人批してゐへらく。人の性い善ゝ。おかれとも染ると久しゞれば。是を洗てうつらざるものあり。こゝをもて聖人も。艱ひがさしといへり。凡人の親としゝ。誰のその子の賢おらんとゝ庶幾ざるべき。おりれども不肖者い。必賢者をいぶせしとす。その故は何ぞや。物おのゝ異類を愛せず。その志雲壞のたゞひあるを以おり。不仁を恥とせず。不義を畏

を走。利を見ざれば勸まず。威さゝれゞ德ず。是則小人の所爲ゝ。人々見るべし。お丑ゞよろこぶ所ゝ色のゝ。遲也が愛するものゝ利のゝ。同氣相求め。同病相憐ゝ。頻をもて友とすこのゆゑゝ。馮司昌九郎等ゝあふときゝ。膠と漆の如し。強て離さんとするといへども。著ざるとあし。君見ずや。お六ゞ愛る所ゝ色ゝあらず。恩ゝ感じ。義ゝ仗て。捨ゞたき思ひあれども。媒ゝあらざれゞ歸ゞず。親していよゝ敬し。樂て淫せず。亦彼與惣白眉ゞ友とする所は。利の爲ゝあらぢ。この故ゝ。樂を共ゝせんとをねがゝぢ。憂を與ゝ去て辭せぢ。これら善吉ゝあふときゝ。氷の炭きゝ就が如し。堰とゞめんと欲するとも。赴ざるとあし。世間もしくゝ百の善吉あらん。世間もしくゝ百のお六あらん。但かくのごと兄奇耦ゝ稀ゝ。彼名を取て。外物ゝ惑ひ。利ゝ走て。理義ゝ私するものゝ。善吉お六ゞ鄰人といふとも。猶胡と越人のごとくあるべし。危かゝ。砥公もし微せゞ。誰のその是非をゝかさん。おそれても懼るべきものゝ。只奸佞人の忘ゝ。

青砥藤綱摸稜案後集卷之下終　大尾

明治十六年三月十五日御届
同　十七年六月　印行

飜刻兼出版人　東京府平民　辻岡文助　日本橋區横山町三丁目二番地

發兌書林　金松堂　日本橋區横山町三丁目二番地

定價金壹圓

L-G-74

ゐ也。利を見ざれば勸まず。威さいれゞ懲す。是則小人の所爲ゝ。人々見るべし。お丑ゞよろこぶ所い色のゝ。運也が愛するものい利のゝ。同氣相求め。同病相憐ゝ。類をもて友とすこのゆゑゝ。馮司昌九郎等ゐあふときい。膠と漆の如し。強て離さんとするといへども。著ざるとあし。君見ずや。お六ゞ愛る所い色ゝあらず。恩ゝ感じ。義ゐ仗て。捨ゞたき思ひあれども。媒ゐあらざれゞ歸ゞず。親していよゝ敬し。樂て淫せず。亦彼與惣白眉ゞ友とする所は。利の爲ゐあらぢ。この故ゐ。樂を共ゐせんとをねがいぢ。愛を與ゝ去て辞せぢ。これら善吉ゝあふときい。氷の臭きゐ就が如し。堰とゞめんと欲するとも。赴ざるとあし。世間もしくゝ百の善吉あらん。世間もしくい百のお六あらん。但かくのごと況奇耦い稀ゝ。彼名を取て。外物ゝ惑ひ。利ゝ走て。理義ゝ私するものい。善吉お六ゞ鄰人といふとも。猶胡と越人のごとくあるべし。危かゐ。砥公もし微せゞ。誰のその是非をゆかさん。おそれても懼るべきものゝ。只奸佞人の忘ゝ。

青砥藤綱摸稜案後集卷之下終　大尾

明治十六年三月十五日御届
同　十七年六月　印行

定價金壹圓

飜刻兼出版人　東京府平民　辻岡文助　日本橋區横山町三丁目二番地

發書　兌林　金松堂　日本橋區横山町三丁目二番地

E 974

913.56
Ta624a2

089068−000−2

913.56−Ta624a2

青砥藤綱摸稜案

滝沢　馬琴／著

M17

DBM−0003